重信の
子供の遊び

序にかえて

戦後40年，わが国は驚異的な経済発展によって国民生活は著しく向上し，国民の80％以上が中流意識をもつまでになりました。本町におきましても，町制施行30周年を来年に控え，町勢は順調に進展して県下第2の雄町に躍進しました。

このように進展激動する中で，明日の社会を背負う子供たちにかかわる課題をみてみますと，豊かな生活により，子供たちの体位は向上したが体力は必ずしも伴っていないと言われ，また，殆んどの子供たちは，勉強部屋をもち恵まれた生活をしている反面，自然体験や社会体験が乏しく，遊びを知らない子供が増えているといわれています。

郷土の自然や社会環境の中で少年期に欠かせない遊びを通して集団活動の楽しさを経験させ，遊びの体験の中から社会性，創造性，自主性を育てることが極めて大切であろうかと存じます。

このときにあたり，子供の生活の中で重要不可欠なこの「遊び」に焦点をあて，本町の自然と風土の中から創造された「重信の子供の遊び」が郷土読本シリーズとして発刊されますことは誠に時宜を得たものであり意義深いものがあります。

この集録が，現代の子供たちの望ましい成長の一助にもなることを願うとともに，広く町民の皆さんにも愛読され，健やかで，うるおいと安らぎのある町づくりに役立つものと確信するものであります。

終わりになりましたが，本書の発刊に寄せられた方々のご尽力と編集にたずさわった方々のご労苦に対し，深甚の敬意と謝意を表し，序文といたします。

昭和60年11月3日

重信町長　東　村　　旭

発刊のことば

現在の子供たちは,「友達が出来ない」「親しくなれない」とかの悩みを持つ子供が多く, 一般的に子供たちは対人関係が未熟であると言われています。

これは幼児期からの人間関係が不充分であることに起因していると思われますが, その背景には核家族化・少子化によるマイホーム主義や, 近隣社会との交流の乏しさにより, 多面的な人間関係を育ちにくくしています。更には漫画本やテレビ等によって戸外で遊ばずに巣ごもり現象を助長し,保護者自身も「勉強さえしてくれれば」と言う考え方が, 子供たちの健全な成長に不可欠な遊びを軽視する傾向にあります。いま子供たちは与えられた遊びを苦労することも考えることもなく遊んでいる実状にあります。

このときにあたって「重信の子供の遊び」を集録し発刊することを企画しました。私たちの先人は, 自然の中, 生活の中から知恵を働かせ, 金のかからない手づくりの遊びを考案してきました。これらの遊びは異年齢の子供同士で遊び, その中で遊びにもルールがあり, 人間関係で大切な年齢によるマナー等も学びあい, 子供相互の信頼関係を育くんできました。

私たちは, この先人の生きざまの良さを再発見し, 郷土で生まれた遊びを継承して子供たちの楽しみを倍加し, 豊かな体験の糧として, 本誌を家庭で地域で活用いただければ幸いに存じます。

終わりになりましたが, 本誌発刊にあたり資料収集に執筆に御尽力下さった方々に対し, 深甚の謝意を申し上げ, 発刊のことばといたします。

昭和60年11月3日

重信町教育委員会教育長　野　中　信一郎

この本を読まれる方へ

1　この本は，昔の子供たちが，遊びを創造し，たくましく生きていた姿を，古老の方々から聞き取り，学校・家庭の教育資料として，小学校４年生以上を対象に読みやすいようにまとめたものです。

2　遊びは子供の世界であり，子供はまた遊びを創（つく）る天才でもあります。ほとんど遊び道具のなかった明治・大正の子供たちは，山で，野原で，川で，鳥や虫や魚，さらに草花などを友として，自分たちで自然にとけ込み，その中で遊びを見つけだし，工夫して結構楽しく遊んでいました。

ところが，時代の変化は自然環境を大きく変え，さらに，行事や伝統の喪失となり，子供たちの遊びにも大きな影響を与え，物の豊かさはそれに拍車をかけています。子供たちの遊びの復興をはかり，豊かな心情を育てるため，子供たちに遊び本来の姿を教えることは大切だと思います。

3　75種類の遊びを取りあげていますが，記述は童話的な発想でなされているので親しみをもって読むことができ，さらに，わらべ唄を数多く取り入れていますので，楽しく読んだり，みんなで歌ったり，みんなで遊んでみようという意欲が湧（わ）いてくるものと考えます。

4　遊びの紹介は，重信の子供歳時記風にまとめております。この郷土読本が，子供たちの心をゆさぶり，美しい童心を支え，そして，ふるさとを愛する青少年を育てる一助になればと願っております。

目　次

序にかえて

発刊のことば

◇ 春

1　おはじき……10
2　ままごと遊び……13
3　花の首かざり……16
4　草花とり……19
5　草　笛……23
6　草ずもう……25
7　いたどりの水車……27
8　風　車……28
9　木の葉のすもう……31
10　ささ舟……33
11　輪まわし……35
11　けんけんとび……37
13　花いちもんめ……41
14　かごめかごめ……44

◇ 夏

1　ほうずき遊び……48
2　麦わら細工……50
3　かぶとむし……52
4　とんぼとり……54

5　いなごとり……………………………… 57
6　ほたるがり……………………………… 60
7　せみとり………………………………… 62
8　涼み台つくり…………………………… 66
9　棒たおし………………………………… 68
10　水でっぽう……………………………… 70
11　川遊び…………………………………… 73
12　国とり…………………………………… 78

◇ 秋

1　大豆の葉柄細工（みこし・かご）… 82
2　木の実とり……………………………… 83
3　どんぐり遊び…………………………… 86
4　竹とんぼとぶんまわし………………… 90
5　百間とばし（しゃくとり）…………… 93
6　鉄ぽう遊び……………………………… 95
7　力くらべ…………………………………100
8　よどのかわせ（せどのかわせ／いどのかわせ）………101
9　とおりゃんせ……………………………102
10　子とろ子とろ……………………………105
11　かげふみ…………………………………107

◇ 冬

1　あやとり…………………………………110
2　紙鉄ぽう…………………………………113
3　いろはかるた……………………………115

4　お手玉遊び……………………………119
5　七つ子（七つ竹）………………………124
6　にらめっこ遊び（1）…………………126
—だるまさん—
7　にらめっこ遊び（2）…………………128
—あがりめさがりめ—
8　指遊び…………………………………129
9　手遊び（1）……………………………132
—おちゃらか—
10　手遊び（2）……………………………134
—げんこつ山—
11　手遊び（3）……………………………136
—らかんさん—
12　手遊び（4）……………………………138
—いちが刺した—
13　紙風船…………………………………140
14　紙飛行機………………………………143
15　凧あげうた……………………………146
16　なわとび………………………………148
17　羽根つき………………………………154
18　まりつき遊び…………………………156
(1)　手まりうた
ア　あんたがたどこさ
イ　お芳よしよし
ウ　おんしょう　正月
エ　ひとごろふたごろ
オ　水師営の会見
カ　せんした　おんごろもち

キ　一かけ二かけ
(2)　まりつきうた
ア　どうでお寺の　どうみょうじ
イ　一裂談判
１９　いの子……173
２０　すずめとり……177
２１　竹馬……180
２２　こままわし……184
２３　じんとり……187
２４　こいのたきのぼり……190
２５　乗りものごっこ……192
２６　どう馬（どん馬）……194
２７　肝だめし……196

◇わらべうた

1　わらべうた……200
―向かいの山から―
2　子もりうた……203
3　数えうた……206

おわりに

表紙絵　田中　和
題　字　菅野　茂美

春

おはじき

女の子が二人以上集まったとき，よくする室内遊びに，「おはじき」があります。

この遊びは，ガラスか平たい石を使って取り合いをします。

最後に，取った石の数の，多い少ないによって，勝負が決まる遊びです。

遊び方は，みんなが，おはじきを，5個か10個ぐらい，同じずつ出し合い，ジャンケンによって順番（じゅんばん）を決めます。

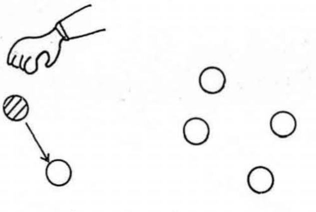
最初の子が，手の中でおはじきをふって，全体に広くちらします。

次に，二つのおはじきの間に，右の小指（ゆび）（左ぎきの子は左の小指）をさし入れます。

このとき，もし左右いずれかの石が，指にふれたら，その子は失格となります。

うまく，石の間に指先がはいったら，親指とひとさし指ではじいて，一方の石を一方の石にあてます。自分のねらった石だけに，みごとにあたったらそのあたった石をとります。

次に，またどれか，二



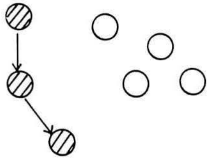
〈いっちょあて〉

① 自分がはじく石をきめる
② 次にあてる石をきめる
③ ねらった石に向けて指ではじき，あたったらはじかれた方の石をとる。

つの石の間に小指を入れ，うまくいけば，また前と同じようにあたった石をとり，前と同じことを続けます。

他の石にあたっても，だめですし，あてる石が，はずれたら失格（しっかく）ですから，次の者にかわります。

たくさんあてて，多く石をとった者が勝ちになります。


〈にちょあて〉

① 自分ではじく石をきめる
② 次にあてる石をきめる
③ 近い方の石にむけて指ではじき，そのあたった石が，もう一つの石にはじきあたるようにする。

一つの石にあてることを「いっちょあて」,二つの石に同時にあてることを「にちょあて」といいました。

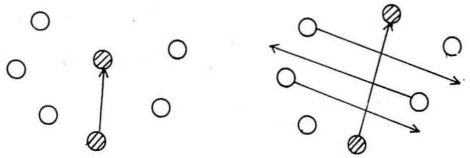
「にちょあて」は，一つの石に向けてはじいていき，そのあたった石が，また，他の一つの石にはじきあてることをいいます。その場合，その二つ目以外の石にあたれば，失格となります。

なお，赤や黄など，いろいろな色のおはじきを使い，見た目もはっきりし，遊びを楽しくさせる工夫や，遊びの約束もして子供達は，ルールを守って遊んでいました。

また，「通し（とお）」という遊びもしていました。

その遊び方は，「いっちょあて」や「にちょあて」と同じように，門になる石を，二つ選び，選んだ二つの石を互いにはじかせます。(その場合も，二つの石以外の石にあたってはいけません。)その門になる，二つの石の間を，のこっている石を指ではじいてとおらせるのです。(この場合も，そのはじく石がどの石

にあたってもいけません。)くぐらせたら，もう一度門になる石を，互いにはじかせ，他の石にあたらずに，とおらせた石が自分のものになります。これも，たくさんとった方が勝ちになります。なお，別の石にあたったら，失格となり，次の人と交代をします。



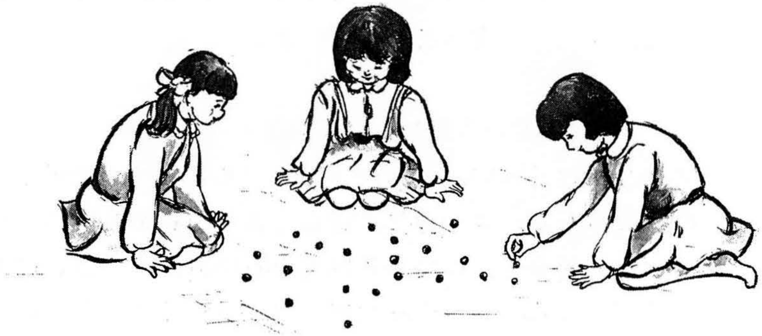
〈通し〉

① 門になる石を二つ選び，たがいにはじいて，また門をつくる。

② 二つの石の間を，他の石に当たらないよう注意してはじきとばす。

③ だいたいはじいたら，(むずかしいのを除いて) もう一度二つの石をたがいにはじかせる。この時に，その二つの石が，別の石にあたったら，今まで通した石はとれなくなってしまう。

④ 他の石にあたったら，次の者とかわり、たくさんの石をあつめた方が勝ち。



ままごと遊び

ままごと遊びは，女の子ならだれでも，何回となく繰り返して遊んだ思い出があるはずです。日のあたる庭や，涼しい木かげに，むしろやござをしいて，仲よしの友達数人で，はじめます。時には，男の子をお父さんにしたり，お客さんにしたりしました。今のように，りっぱな本物そっくりの道具はありません。古くなったお皿やさかずき，貝がらや大きな木の葉，板ぎれなどを工夫して食器にしました。ごちそうの材料は，その辺に咲いている花や草です。どろの上に花をかざっておすしにしたり，どろを木の葉で巻いてかしわもちを作ったりしました。

お気に入りの料理ができると，お客様のおもてなしをします。お母さんの姿を思い浮かべて，口調もそっくりで，お客様ごっこのはじまりです。さあ，みなさんも，身の回りにある物で，ままごとをして見ませんか。

(1) ままごと

木の葉や木の枝で手作りのままごと道具を作ります。また，古いお皿なども使います。大きな木の葉などでお皿を作り，木や草の実をごちそうにしてのせます。木の小枝でおはしを作ってそえます。

春は，暖かいえんがわや，のき先，土手などで遊ぶことが多いようです。ごちそうの材料は，れんげ，すみれ，つばな，つくしなどです。

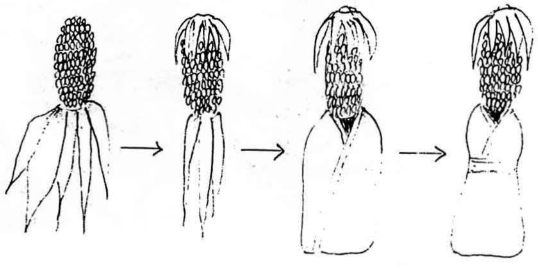
夏は，涼しい木かげや，水の流れのほとりでよく遊びました。ごちそうは，つゆ草，朝顔，ひまわりなどです。つゆ草や朝顔の花からは，色水がとれるのでニッケ酒(しゅ)や，ラムネを作ったりしました。

秋は，日ざしのきつくない庭や，のき先で遊びました。いちょう，もみじ，くぬぎの色づいた葉は，きれいなお皿です。どんぐりやしいの実を拾って，ごちそうにしたりしました。またあけびや，山ぶどうなどは本当に食べたりして楽しんだものです。

(2) 人形つくり

自分がおかあさんになったり，お客さんになったりするだけでなく，自分で作った人形でも，ままごと遊びをしてみましょう。

○ とうもろこしの実を人形の体にし，とうもろこしの毛を頭のかみの毛に



とうもろこし

してしばります。

かみの毛は自分のすきな形にします。中には器用な人は，丸まげ姿の人形を作ったりしました。

○　でき上がった人形に，紙や布（ぬの）で着物を作ります。一番かんたんなのは，くるりと巻くだけです。そして，帯（おび）によいようなひもや布をえらんで結びます。工夫して何まいも着物を着せたり，すそを花よめさんのように長くしたりしました。またほうずき人形も作りました。

○　また，このようなとうもろこし人形や，ほうずき人形を使って，ままごと遊びをすることもありました。自分たちの手作りの道具で遊ぶところに，ままごと遊びのよさがあるのです。

「ごめんください。」

「どうぞ，おあがりください。」

「きょうは，この子のひな祭りです。おひな様を見てくださいね。」

「どうぞ，おかしを食べてください。」

「はい，えんりょなくいただきます。」

「おあじは，どうですか。」

「とても，おいしいですよ。」

……と，まじめな顔で，わが子のように人形をあやすのです。

花の首かざり

3月に入ると，つくしが頭を出しはじめ，やがてれんげの花が，咲きそろいます。田んぼは，れんげの花いっぱいで，遠くから見ると，ピンク色のじゅうたんをしきつめたようです。

「わあ，きれい。」と，思わず走り出してしまいます。一本つんでみます。かんざしにして，自分の頭にかざります。次には友達の頭にもかざります。お互いに顔を見合わせて，にっこりします。胸にもつけてみます。れんげの花が，ぽとんと落ちてしまいます。「わあ，何とかして胸にくっつけたいなあ」。

女の子は昔(むかし)から，身をかざって，美しくしたいというねがいがあります。そうです。たくさんのれんげの花で，首かざりのようにしたらいいのです。いい考えが浮かびました。もう夢中で，れんげの花をつみ，土手に腰をおろして作ります。暖かい春の太陽がふり注ぎ，時のたつのも忘れてしまいます。

さあ，みなさんも作ってみましょう。だれにでもできますよ。できたら，お友達にプレゼントしてみましょう。喜んでもらえることうけ合いです。

作り方は，自分で工夫したのでいいですが，昔から伝わっている作り方をご紹介しましょう。

(1) れんげの首かざり

れんげの花や，すみれの花をたくさんつみ，それを連ねて作ります。連ねるとき，1本のれんげの花を巻きつけます。次には，もう1本のれんげの花を，さきほどのれんげのくきに巻きつけるのです。これを繰り返してすきな大きさにするのです。くきが長すぎる場合は，てきとうな長さに切るといいでしょう。下の図を参考にしてください。

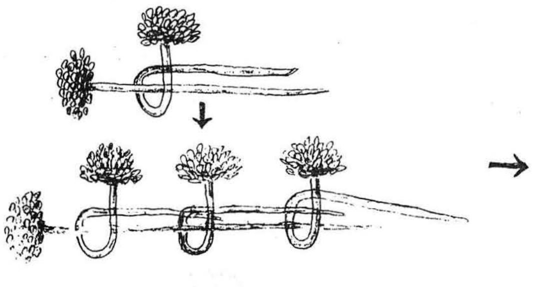
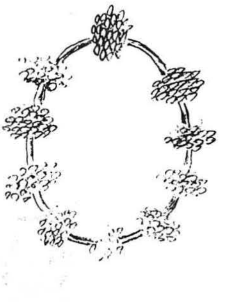


図1



首かざり

また，次のような作り方もあります。れんげの根元の部分をつめで二つに割り，そこへもう一つのれんげの根元をさしこんでずっと引っぱります。このように順につないで首かざりを作ります。くきがあまり長いと，花の数が少なくてさびしくなるので，くきの長さは短めにしましょう。図2を参考にしてください。

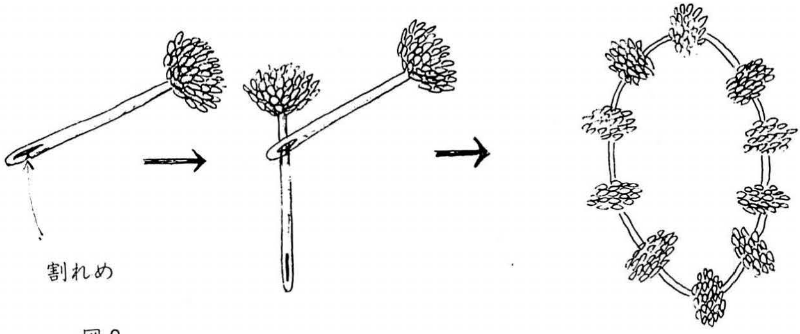


図 2

⑵ 白つめぐさの首かざり

れんげの花が終わるころ，庭さきや川の土手などに，クローバーの白い花が咲き始めます。白つめ草というのは，このクローバーの花のことです。もっともっと花の首かざりで遊びたいと思っていた女の子たちにとって，白つめ草はまたとないおくり物です。れんげの花の時と同じように，たくさん摘んでは，純白の花の首かざりを作り，およめさんごっこなどをして楽しく遊びました。

草　花　と　り

寒かった冬も，しだいにいきおいがなくなり，やわらかな日ざしが野山にかがやきはじめると，子どもたちは，なにもいわなくても春が来ていることを感じます。

まだ，かれ草色の池の土手から，小さなつくしを見つけ出し，小川の岸から，ふきのとうの緑の色を発見し，たしかに来ている春に，胸をおどらせるのです。

これから，子どもたちと野山のつきあいが，さかんになっていきます。「つくしつみ」「わらびとり」「つばなつみ」「はなつみ」「いちごとり」など，自然と一つになって，子どもたちの活動がはじまるのです。

ここで，その遊びの中のいくつかを，しょうかいします。

(1)　つばなつみ

春になって，ぽかぽかあたたかくなると，池の土手や小川のつつみには，「ちがや」が芽を出しはじめます。このちがやの若芽を「つばな」または「つんばな」と，子どもたちはよんでいます。

まだ，ちがやの花は，この若芽のつつの中に包まれています。でも，子どもたちは，この若芽の中に，銀色のやわらかい花がつつみこまれていることを知っているのです。

びっしりと並んだ，ちがやの芽を
「つんばなぬいた，毛ぬいた。」
と，言いながら，指でつまんでぬいていきます。つんばなは，

きゅっきゅっと心地よい音をたててぬけます。

ぬきとった若い芽の，外がわの葉をむくと，銀色のまぶしい花のほが出て来ます。それをてのひらにのせて，

「へびならじっとせい。はめならとんでいけ。」

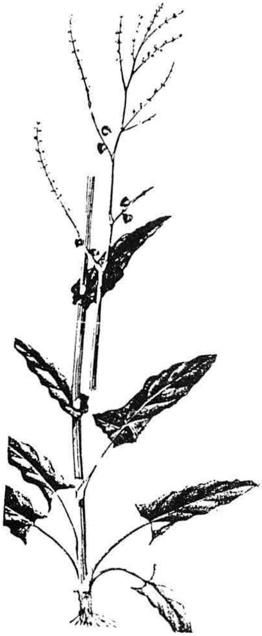
と言いながら，両手の中でもみます。すると，まだ若い花は，やわらかいので，てのひらの中で小さな玉になります。もう成長しているのはかたいため，もんでもすぐに，元の形にのびます。つまり，やわらかいのは食べられるが，かたいのは食べてもおいしくないわけで，すててしまうのです。そのふるいわけを，両手でもんでしらべているわけです。

ほんとうに，自然と遊ぶかしこい子どもたちの知恵ではありませんか。みなさんも遊んでみましょう。

土手でほを出したつばな

(2) すいばつみ

麦のほが出る４月の終わりごろ，田んぼのあぜには，やわらかい「すいば」または「すかんぽ」のとうもでてきます。



すいば

緑色をしたすいばと赤味がかったすいばがありますが，赤味がかったすいばは，食べられます。

あぜ道で，れんげやすみれの草つみをして遊んでいると，このすいばのとうが見つかります。できるだけ長くとって，皮をむいて食べます。すっぱい味がしますが，塩をつけるとすこしすっぱい味がやわらぎます。そのため外へ遊びに出る時は，紙に塩を包んでポケットに入れていました。

しかし，たくさん食べると，たん石という病気のもとになるのだそうです。

(3) 野いちごとり

５月の終わりごろになると，山手の野原には野いちごがたくさんうれてきます。赤くて丸い野いちごは，あまくて，とってもおいしいおやつです。野原で野いちごがたくさんとれた時はいちごがつぶれないように，いちごさし（カニツリグサ）にさして持って帰ります。

いちごさしにさしたいちごのたばは，きれいなので弟や妹がよろこびます。その顔を見るのも楽しみです。

〈いちごさしにさした野いちご〉

(4) あまちことり

秋になると，田んぼのあぜや川っぷちの草は，かれはじめます。しかし，あまちこの根っこは太っています。あまちことはちがやの根っこのことです。この根っこを土の中からひっこぬいて水で洗い，よくかむと，すこしあまい汁(しる)が出てきます。

このように，子どもたちは，どこにでも生えている草の中から自分のおやつをさがしていたのです。

自然の中にあるおやつは虫歯になったりしません。みなさんも野や山へ出かけて食べられる草をさがしてみましょう。

草　笛

新学期も始まり，遠足のころになると麦の穂(ほ)もつんつん伸びて，あちこちに麦の黒穂(ほ)（くろんぼ）が見え始めます。昔(むかし)の子どもたちは，学校の行き帰りに黒穂を抜(ぬ)き取り，麦笛(ふえ)を作ってよく吹(ふ)いたものです。よく伸びた麦の穂に見えかくれしながら男の子たちの吹くピーピーという麦笛の音は，大へんのどかな初夏の田園風景でした。

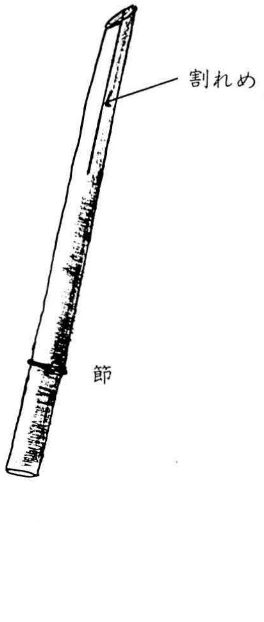
(1) 麦笛

作り方は，大へんかんたんで，麦のくきの節を一つ残して切り，その節の上の部分に，ナイフかつめでたてにわれ目を入れるともう出来上がりです。

鳴らし方は，われ目を入れた方をくわえて，吹くのではなくて吸(す)うのです。

だれが作ったのでも，ピーピーとすみ切った音でよく鳴るから，うれしくなります。また，出来上がった笛は，どれもこれも，少しずつ音色がちがうので，おもしろみがふえます。5～6人が，ちがった音の麦笛を作って，ドレミファ……と楽器のように鳴らしてとくいになったものです。

〈麦の穂のくき〉



(2) 豆の笛

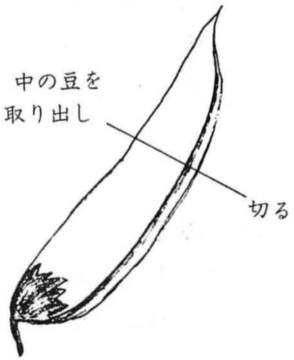
麦の取り入れがすむころ，からすのえんどうが花を咲(さ)かせます。花がすむと，次々に小さい4～5㎝のさやができます。このえんどうのさやが，りっぱな笛になるのです。

作り方は，曲がっている方のさやを開いて中の豆を取り出し，さやのまん中ぐらいから手でちぎります。そして切り口を外にむけてくわえ、吹くときれいな音で鳴ります。強く吹いたり，弱く吹いたり，その吹き方によっていろいろ音が変わります。

また，さやの大きさや，さやの切り方によっても，音(ね)色がちがうので，おもしろく、たくさん作って遊びました。

その上に，この笛は，口の中にかくして鳴らすことができるので，だれが鳴らしたか当てやいこをしたりして遊んだものです。

からすのえんどうのさや



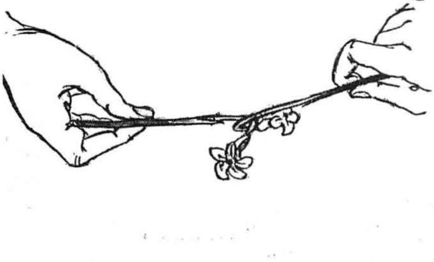
草ずもう

明治・大正から，昭和のはじめにかけて，いなかの子の遊ぶ材料(ざいりょう)は，身のまわりにあるすべてのものでした。何でもくふうして，楽しい遊びを考え出したり，競争(きょうそう)したりしたものです。だから，子供は遊びの天才(てんさい)でした。野原の草も，校庭の木の葉っぱも，みんな遊びの材料にしてしまう子供たちでした。

(1) すみれのすもう

春になると，田んぼのあぜ道に，紫(むらさき)色の花をつけたすみれがたくさん咲(さ)いています。これをたくさん取ってきて，すもうをさせて遊びます。だから，すみれのことを，すもうとり草ともいいます。

花の下のくきと続くところが，曲がっているので，その曲がり目のところへ，２本のすみれをからませて，「一，二，三」と呼吸(こきゅう)を合わせて，そうっと引っぱるのです。



花が落ちたほうが負けです。

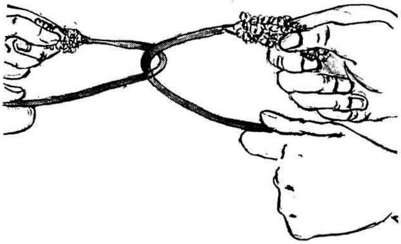
負けたほうは，新しい花を出して，勝った花と勝負(しょうぶ)します。

強い花は，何回も，連勝するので，強い花の持ち主はうれしそうです。
「やった，やった」と，花を頭の上にさし上げて，叫んだものです。

すみれのほかに，クローバーや，れんげ草で，すもうを取らせて遊んだりもしました。

⑵　おおばこのすもう

おおばこの花のついているくきを引きぬき，図のようにくきをからませて，
「一，二，三」で，そうっと，引き合います。
きれたほうが，負けになります。できるだけ，根もとのほうをからませるほうが，勝ちにつながるようです。
勝ったくきは，また新しいくきのちょう戦を受けます。
太いくきが，意外に弱かったり，細くても強いのがあったり，予想外のことがおこるところに，おもしろさがあります。
この，おおばこのすもうは，春から夏にかけて，よくおこなわれました。

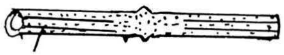
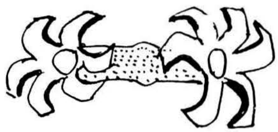
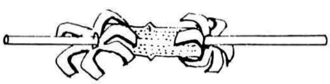


いたどりの水車

野山に花が咲き乱れ，1日1日と暖かくなってくると，子供たちは，山へわらびやぜんまいを取りにでかけます。

途中で，いたどりを見つけると，子供たちはわれ先にと，いたどり取りをします。かわいいのや，50㎝を越すものもあります。ちょうどアスパラガスを大きくしたような形をしています。これを家に持ちかえって，食べたり水車にしたりします。

水車の作り方

1　大きい節の長いいたどりを準備する。  ①　節をまん中に残して切り取る。 ②　両はしを四つ割りか六つ割りの切りめを入れる。	2　一晩水につけておくと両はしが開く。 
3　両はしの開いたいたどりに女竹をとおす。 	4　はり金などで，水車をのせる台をつくる。 ●木や竹で三つまたをつくる　●石を積む　●はり金でまたを作る ●木のまたをさがす

風　車

春風・そよ風・秋風・北風・こがらし・からっ風，ずっとずっとむかしから，日本人は風にいろいろな名前をつけて親しんできました。

寒い冬が終わりに近づき，小川にめだかが泳ぎ始めるころ，冷たい北風はやさしい春の風に変わります。そんなとき，「風と話をしてみたいな。」と思ったことはありませんか。風の運ぶ春のかおりを「胸いっぱいにすいこんでみたいな。」と思ったことはありませんか。

そう思ったら，もういても立ってもいられないはずです。さあ，寒がりさん，こたつからぬけ出して近くの土手を思いっきりかけてみましょう。風に向かって。もう上着なんていらないはずです。ただ小さなかざぐるまを一つ持って。

くるくる，くるくる回るかざぐるまをぐっとつき出して，どこまでも走っていけば，ほら，冬はいつの間にかどこかへ行っちゃいましたよ。

作り方は，とてもかんたんです。短い竹とはり金，それに厚紙。おっと，豆も１こ用意しておきましょう。

さあ，それではさっそく作ってみましょう。わからないところはお家の人にたずねてもいいですが，まず自分で作ってみることです。だれでもできますよ。

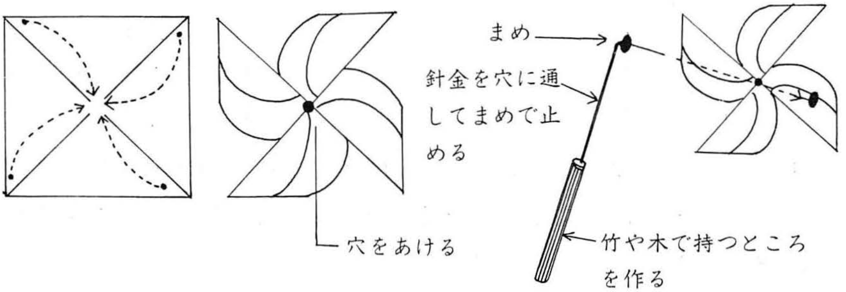
かざぐるまは，いろいろな作り方がありますが，まずその一つを紹介（しょうかい）しましょう。

作り方〈その1〉

① 正方形の紙に直線の切れ目を入れる。

② 切れ目の片方のはしを点線のように曲げる。

③ 針金をさし通して，まめで止める。

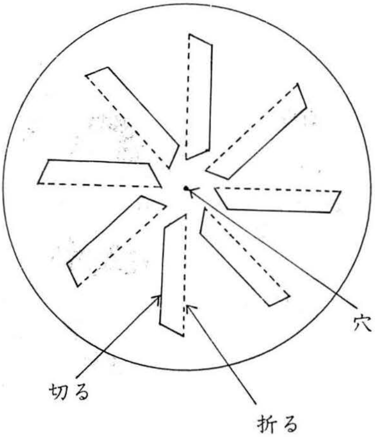


うまく回りましたか。まめのない人はセロテープをまきつけて止めてもいいでしょう。また，紙の表と裏にちがう色をぬると美しいかざぐるまになります。

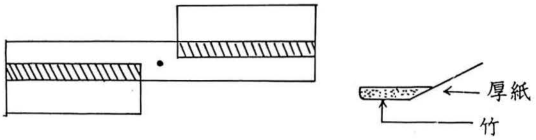
○

かざぐるまの作り方はまだあります。その2を見てください。まん円いかざぐるまです。コンパスや定規を使って作りましょう。はり金にまめなどを使って止めるのは1の作り方と同じです。折り曲げ方を工夫するとよく回ります。うずまきなどをかくと，もっと楽しくなります。色は，そう，春らしい明るい色を使いましょうね。

作り方〈その2〉



作り方〈その3〉



① 竹材を平たくする。
② 皮のついた方を斜線部のように対称にけずってうすくする。
③ 斜線部に厚紙をはる。

今度は薄く切った竹を使ったかざぐるまを一つ作ってみましょう。3の図のように竹をけずり，そこに紙をはって作ります。けずるときは手までいっしょにけずってしまわないように気をつけてください。小さい人はおうちの人に手つだってもらいましょう。また，紙をはるときは木工用ボンドがいいと思います。

あとは穴を開けて，その1と同じようにはり金にまめなどで止めるとできあがりです。何だかヘリコプターや竹とんぼに似ていませんか。

○

どうです。かんたんに作れたでしょう。それではいよいよ外に出て回してみましょう。どんどん走ってごらんなさい。そして，走りつかれたら原っぱにこしをおろしましょう。今度は春風があなたのかざぐるまを回してくれますよ。

おや，あなたの足もとに，つくしが顔を出しています。

木の葉のすもう

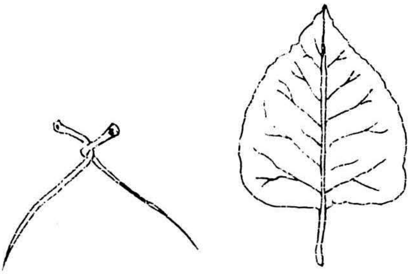
子供たちは，大変遊びがじょうずです。秋になって，木の葉が色づけば，それをつかって楽しく遊びました。

(1) ポプラのすもう

ポプラの木は，どの学校にも植えてあり，子供たちの二かかえも，三かかえもあるような大木が，運動場で，青々とした葉を茂(しげ)らせていました。

秋になると，ポプラの葉が，黄色く色づいて，風が吹くたびに，ひらひらと落ちてきます。

子供たちは，休みの時間になると，われ先にと，校庭に走り出て，争って落葉を拾(ひろ)い集めました。拾ったポプラの葉は，葉の部分をしごいて取り除(のぞ)き，葉の柄(え)の部分だけにします。



〈ポプラの葉〉

この柄をからませて，引っぱり合いをします。

くきを強くするために，くきをやわらかくもんだり，塩(しお)づけにしたり，なかには，えの中に荷札用(にふだよう)のはり金をひそかに入れた違反者(いはんしゃ)もおりました。

ポプラのすもうは，秋の終わりから，冬の初めにかけて，よく行われた遊びです。

⑵　松葉ずもう

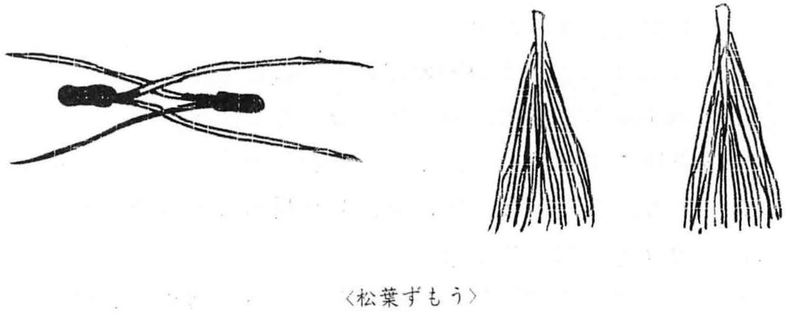
この遊びは，２本の松葉をからませて引き合い，切れて，ばらばらになったほうが，負けという遊びです。

松葉は，年中青いので，いつでも遊ぶことができます。黒松（おん松）が赤松（めん松）より，葉がじょうぶなようです。

この遊びを，「切りやいこ」とよんでよく遊びました。

また，庭の松の手入れをするときできた松葉で，すもうをして遊ぶことも行われました。一対（つい）の松葉ではなくて，小枝（こえだ）のじくについた松葉です。

枝の先を，15cmほどに切ったものを，えん台の上に，枝の葉先で立たせ，とんとんとたたいていると，両方が近づいて，からみあってきます。そのうち，どちらかが倒（たお）れて勝負がつきます。いっしょに倒れてしまうと，引き分け勝負なし，ということでよく遊びました。とてもおもしろいので，女の子がよく遊んでいました。



〈松葉ずもう〉

さ　さ　舟

「春の小川はさらさらいくよ……」暖かくなった小川のほとりから，子どもたちの歌声が聞こえてきます。のどかな昼下がり，学校が引けた小学生が三々五々と連れ立って帰ってくる。

小川の流れに沿って歩いていた子供たちは，道ばたの笹（ささ）の葉を取って舟を作り始めました。

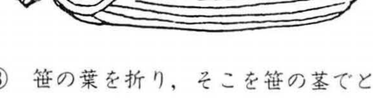
(1)　笹舟（ささぶね）のつくり方

笹舟は笹の葉でつくります。その葉も広いほどでき上がった舟の底が広くなって水によく浮きます。はじめは，図(1)のよう

（1）

①　笹の葉を折って両はしに切り込みをいれる。

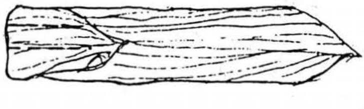
②　両はしをはさみこむ。



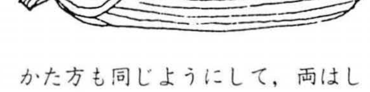
③　笹の葉を折り，そこを笹の茎でとめて舟のへさきにする。

（2）

①　笹の葉を折って，両はしに切り込みをいれる。



②　両はしをはさみこむ。



③　かた方も同じようにして，両はしをはさみこむ。

に笹(ささ)の葉のはしをおって，たてに二つ切り込みをいれるのですが，みじかめの方がよいのです。あまり長いとそこから水が入ってきて笹舟(ささぶね)は浮くことができません。(2)も同じ方法です。

(2) 遊び方

小川の流れにそって，そっと水に浮かべます。みどりの笹舟が静かに流れていくようすは，見ていて本当に楽しいものです。自分でいくつもの笹舟を作って流したり，友達の笹舟といっしょに浮かべたりして楽しんでみませんか。笹舟はまた広い広い海の外国船、いつか乗った船を思い出させてくれるでしょう。

友達の笹舟ときょうそうさせるのも楽しいですね。同じところから笹舟を出発させて，どちらが速(はや)いかきょうそうさせるのです。追いこしたり，追いこされたりして進む笹舟，みなさんの心もはずむことでしょう。

輪まわし

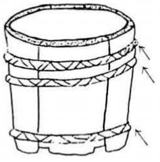
ぽかぽかした春の日，近くの広場に元気いっぱいの子供たちが四，五人集まって来ました。簡単な道具を使って，みんながおもしろく遊べるものに，輪まわしがあります。

昔（むかし）は，お正月前にはおけ屋さんが各家々をまわっては，ゆるんだおけの「たが」の張りかえをしていました。その張りかえをした時の古い「たが」を輪にします。この輪は，おけの大きさによって大，中，小様々です。だから，遊ぶ時は大きさをそろえてやったり，一つの物を交代ごうたいでしたりします。

近ごろでは，古い自転車のつかえなくなったものを車輪だけ取りはずし，タイヤをのけたものを輪にして遊んだりもしました。

次に，そえ木を作ります。太くてじょうぶな針金30～50センチメートルくらいの長さのものの先を輪の半分くらいが，かかるように曲げて作ります。あるいは，枝がまたになっている木を使ったり，竹の末の方の細くなった部分を切り，その先の枝を短く切ったものを使ったり，竹や木に針金をしばりつけて輪にかかるようにしたりします。こうして作った輪にそえ木を使って次のようにして遊びます。

●輪の作り方



① おけのたが

古くなったおけの「たが」をもらって使う。

② 自転車の車輪

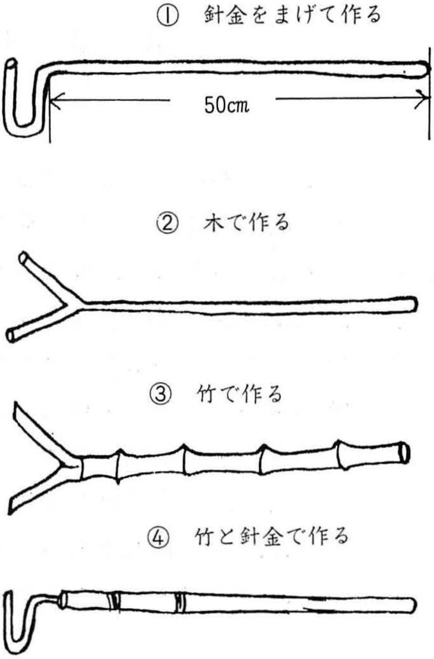
スポークやタイヤをはずして，金の輪だけにする。

初めは，バランスをとってまっすぐに進むことから始めます。それができだすと，どこまで進めるか，距離(きょり)で競争します。さらにできだすと，カーブのあるコースを作って距離を競争して遊びます。

竹の枝を短く切ったそえ木を使うと，枝と枝の間がせまいために，バランスが楽に取れます。

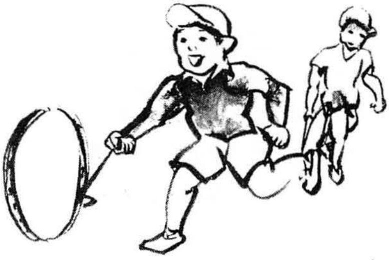
さらにできだすと，支えのない１本の棒や竹でやれるようになります。

●そえ木の作り方



おりまげた針金を，竹にくくりつける。

この遊びは，そえ木で輪を自由に操(あやつ)りながら，それがどこまで長続きできるか，という点に子供たちの興味はつきません。車の通らない小道をすいすいと輪が進んでいく様子や時には，田や畑に落としてしまったりして，ため息をついている様子などが目に浮かんできます。みなさんも一度やってみませんか。



けんけんとび

けんけんとびは，きめられた区画の中に小石を投げ入れて，その小石を片足でけりながら（けんけん）次の区画へと進んで行くのを競い合う遊びです。よく似た遊びには，昔は平安時代の〝けまり〟から今は〝サッカー〟などがあります。いずれも片足で正確にけつることを目的にした遊びで，小さい子供からお年寄りまで楽しまれています。

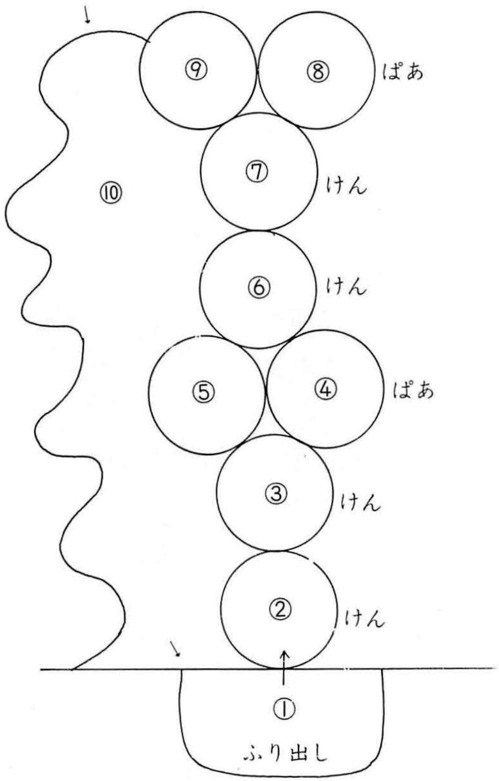
けんけんとびは，少しの広場（遊び場）と小さな石さえあれば，いつでも遊ぶことができます。こういう手軽さの中から起こったけんけんとびは，昔の人の身近な所に楽しみを，何もない所から遊びを生み出そうとする願いがこめられていたのだと言えるでしょう。

少ない回数で正確に入れることが勝敗の決め手です。おまん

じゅうのような丸い石は，軽くけっただけでもコロコロと遠くへころがって行ってしまいます。逆におせんべいのような平たい石だと，ほどよくころがります。ころがりやすい形，積み重ねることのできる形等，昔の人は，遊びを通して体で知らず知らずのうちにわかっていました。けんけんとびに使う石は人によって好みの大きさや形がありますので，こういう石が一番いいということははっきり言えません。

それでは，けんけんとびのルールの説明をしましょう。

遊び方（その１）



(1) 数人の子供が，一つずつ平たい小石を用意します。

(2) 右図のような円やかこいを地面にかきます。

(3) 横線の下の①のところにみんなの石を入れます。

(4) ゲームをする順番を，じゃんけん等で決めます。

(5) １番の人が①の中から自分の石を②に投げ入れます。円の外に石が出たら失格(しっかく)で，次の人と交代します。

(6) うまく石が②に入ったら，その円をまたぎ越して，片足でふり返り，後ろの①の石を拾って持ち「けん，ぱあ，けんけん

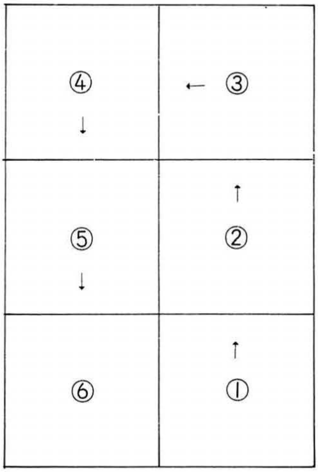
ぱあ。」と片足でとびながら⑨まで進みます。このとき，線をふんだり，片足とびのところを両足でつくと失格となり，次の人と交代します。そして，石は①のふり出しにもどります。

(7) ⑨まで進むと，手に持っていた石を，⑩のかこいの中（かこいの中ならどこでもよろしい。）に投げ入れて，うまく入ったら自分も入り，石をかこいの中でけりながら，ふり出しの①の中にけりこみます。①にうまく入ったら，また，①から②に石を投げ入れ，前と同じ方法で進んで行きます。と中で線をふんだり，石が線より外に出たりしたら失格で，次の人と交代します。失格になるまで続けますので，じょうずな人は何度もできるわけです。

(8) スタート①から進み，⑩を通ってもとの位置に帰るまでが1回です。例えば，③で失格になったら，石は②にとどまって次回を待つことになります。

(9) 石の位置が遠くの円に進んだ人の勝ちとなります。

(10) 「けんけん，ぱあ，けんけん，ぱあ。」と調子をつけて片足でとびながら進みます。



遊び方（その2）

(1) 地面に右のような図をかき，石を足もとにおいて，①より始めます。

(2) けんけんで，石を①から②へけります。

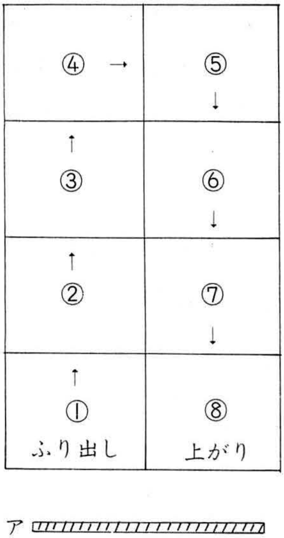
(3) うまく②へ入ったら，けんけんで②へ進み，また③へ石をけります。

(4) うまく②へ行けないときは，石を

①へもどして休み，他の人と交代します。

(5) これを繰り返して⑥まで行けた人の勝ちとなります。

遊び方（その3）



(1) 地面に左のような方形の線を引きます。

(2) 自分の小石を持ち，決められた線（ア）から，手で①に投げ入れます。

(3) うまく入れることができたら，片足で②③……と進んで行きます。

(4) 最初にゴール⑧（上がり・天）に達した者が勝ちになります。

(5) 最初に投げた石や，けった石が線にふれた時は失格です。途中で失格した人は，自分の順番がくるまで，失格になった区画より一つ手前の区画に石を置いて待ちます。⑥で失格した人は⑤に石を置くのです。

(6) 人数は4～5人が適当ですが，2人で競争もできます。

(7) 区画の大きさは自由です。上達した人とそうでない人では大きさを変える必要があります。

(8) けりこむ回数も，最初は5回までとか決めておき，うまく入るようになると，4回まで，3回までと，回数を減してきます。

このように，けんけんとびは思ったよりバランスや器用さを必要とし，片足でけり進むという体力も必要とします。

花いちもんめ

遠足などに行くと，子供たちは，二組に分かれて，「花いちもんめ」をはじめます。

この歌は，桜(さくら)の花が，一面に咲(さ)いているようすをあらわしていて，子供たちが，お花見に行きたいという，願いの遊びの歌だそうです。

この花見のさいそくの遊びが，春だけでなく，子供たちが集まると，秋でも，冬でも遊ぶようになりました。

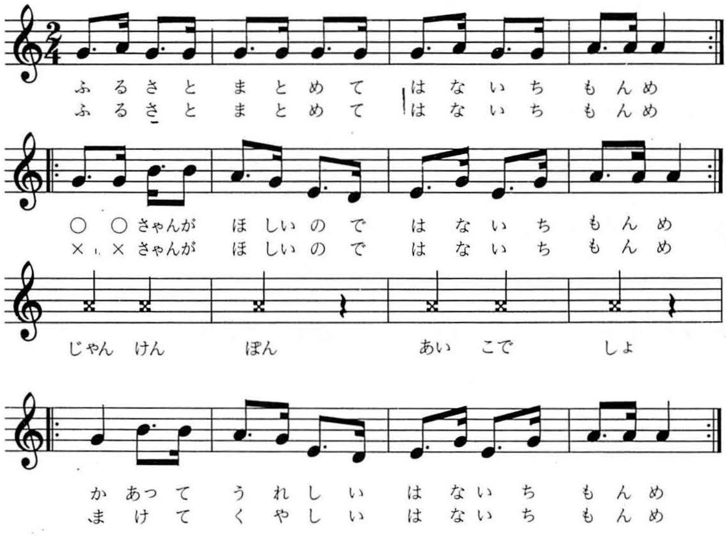
子供たちが，二組に分かれて，手をつないで向かい合って立ちます。ジャンケンをして，勝った組が，「ふるさとまとめて花いちもんめ」と，うたいながら前進し，さいごに片足をあげます。

負けた組が，「ふるさとまとめて花いちもんめ」と，歌いながら前進して，片足をあげます。（このとき，勝った組は，負けた組がせまってくるので後へさがります。）

これを歌に合わせてくり返し，選ばれた者が，ジャンケンをし，ジャンケンで負けたら，勝った方の組に加わり，これをくり返して遊びます。

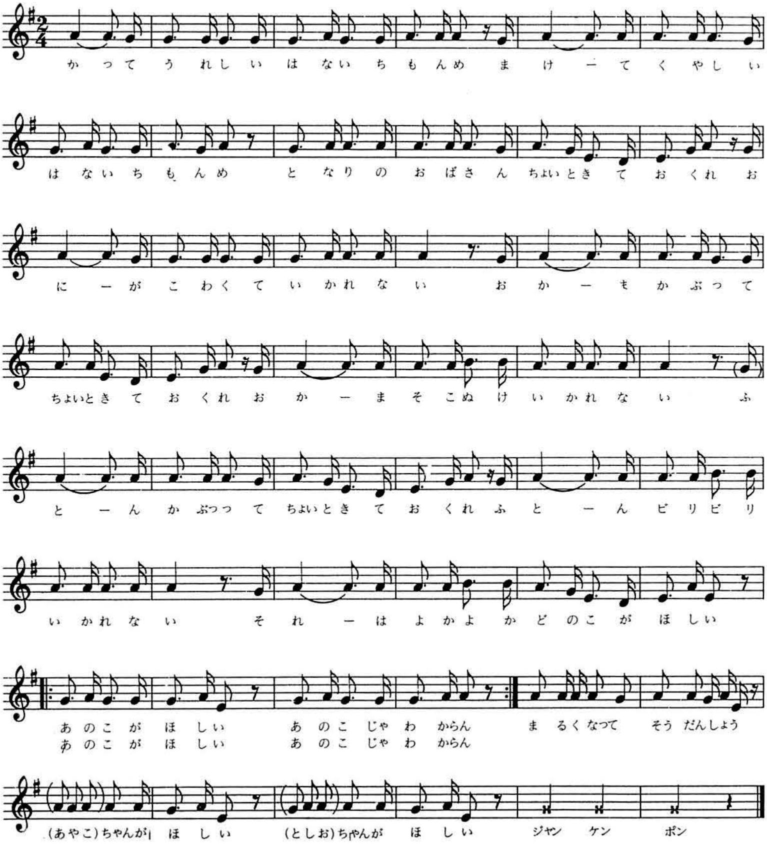
ふるさとまとめてはないちもんめ
ふるさとまとめてはないちもんめ
◯◯ちゃんがほしいのではないちもんめ
××ちゃんがほしいのではないちもんめ
じゃんけんぽん　あいこでしょ
かーあってうれしい　はないちもんめ
まーけてくやしい　はないちもんめ

花いちもんめ



また次のような歌でもよく遊びました。

花いちもんめ



花いちもんめ

勝ってうれしい　花いちもんめ
負けてくやしい　花いちもんめ
となりのおばさん　ちょいときておくれ
鬼がこわくて　行かれない
おかまかぶって　ちょいときておくれ
おかま底ぬけ　行かれない
ふとんかぶって　ちょいときておくれ
ふとんびりびり　行かれない
それはよかよか　どの子がほしい
あの子が　ほしい
あの子じゃ　わからん
この子が　ほしい
この子じゃ　わからん
まるくなって　そうだんしよう
（あやこちゃん）がほしい
（としおちゃん）がほしい
ジャンケンポン

かごめかごめ

昔の子供たちは，ひとりぼっちで遊ぶことはほとんどなく，何人かが集まってはいろいろな遊びをしました。学校では同じ学年の友達と遊んでも家へ帰れば，近所の年の違(ちが)う子供たちと仲よく遊んだものです。

小春びよりの気持ちのよい日などに，お宮や公会堂（地区の公民館や集会所）の前の広場などでよく遊びました。

「かごめかごめ」もその一つです。

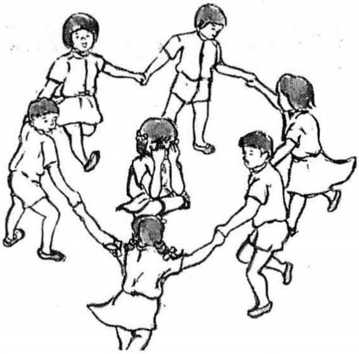
この「かごめかごめ」の遊びは，子供たちが手をつないで輪になり，歌いながら遊ぶのです。

〈遊び方〉

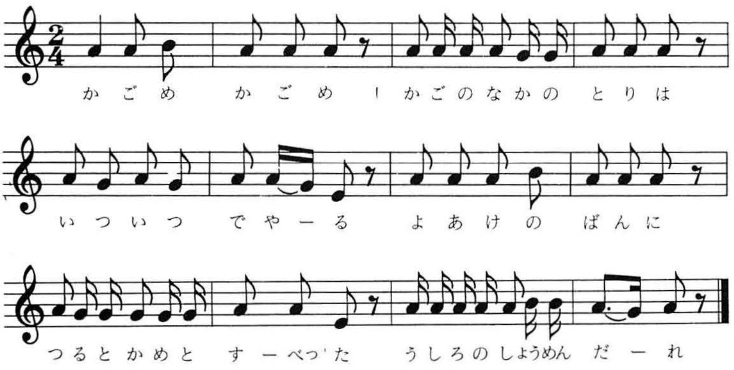
① 鬼(おに)は，円の中心に座(すわ)り，目を閉じて両手で顔をかくします。

② 鬼以外の子供たちは，輪を作り手をつなぎます。

かごめかごめ
かごの中の鳥は
いついつ出やる
夜明けの晩に
つると亀(かめ)とすべった
後ろの正面だあれ



かごめかごめ



③　鬼以外の子供は，歌を歌いながら，つないだ手をふって拍子をとり，右回りに回ります。

④　鬼は歌わないで，輪の中心で目をかくして歌をじっと聞いています。

⑤　「うしろのしょうめんだあれ」で，鬼以外の子供は手をつないだままその場に座り，「ワンワン」とか「ニャーオン」とか動物の声を出します。

⑥　鬼は，自分の真後ろの子供の名前を，声を頼りに当てるのです。

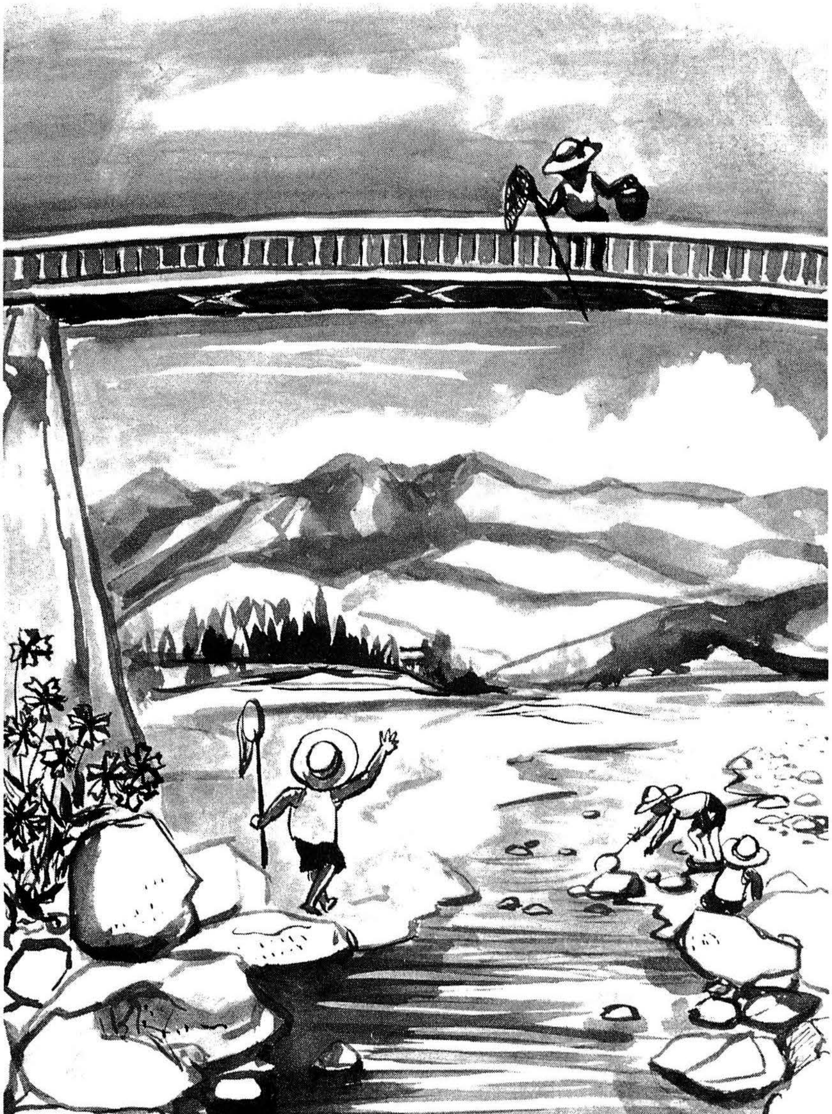
⑦　「◯◯ちゃん」と大きな声でいいます。

⑧　名前がうまく合っている時は，当てられた子供が鬼になって輪の中心に来て座ります。

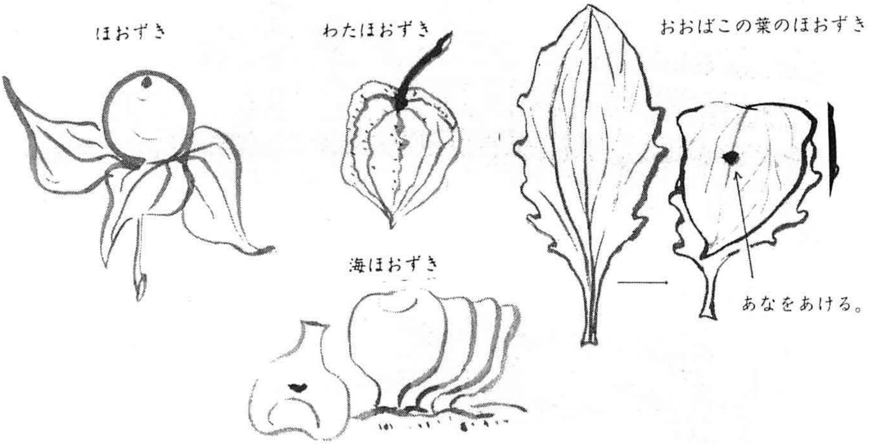
⑨　名前が当たっていない時は，「ちがう」と全員で声をそろえていいます。

⑩　鬼は，もう一度鬼になって，初めからやり直します。

夏



ほおずき遊び



8月の終わりごろ，ほおずきが夏の太陽をあびて，赤く色づきます。この赤く色づいた皮をやぶると，みごとに熟した実が見えてきます。女の子たちはこのほおずきを鳴らして遊ぶのが大きすでした。

さあ，みなさんもいっしょに作ってみましょう。

まず，出てきた赤くてつやつやした実を指の先でそろそろとよくもんでやわらかくした後で，とり口をようじでつっつきながらあなをあけます。そらそら，急いでもむと実をひねりつぶしてしまいますよ。あなをあける時も，口がさけてしまわないようにしないといけないのですよ。

あなをあけ，また，そろそろ気長にもんでいるうちに，小さい黄色の種が一つぶ二つぶとしるにまじって出てくるでしょう。かなりの種が出たところでまん中のしんが出ます。口がさけてしまったら使いものにならないので，この時も急いでひきだしてはいけませんよ。

種が出てしまったら，水できれいにあらいましょう。さあ，赤くすきとおった，うすい皮だけのほうずきのでき上がりです。

鳴らしてみましょう。うまく鳴らせましたか。

とり口が，下くちびるに当たるようにして口の中へふくんでみてください。そして，上の前歯でそうっとおすと，さあ，ブーブーという音が出たでしょう。

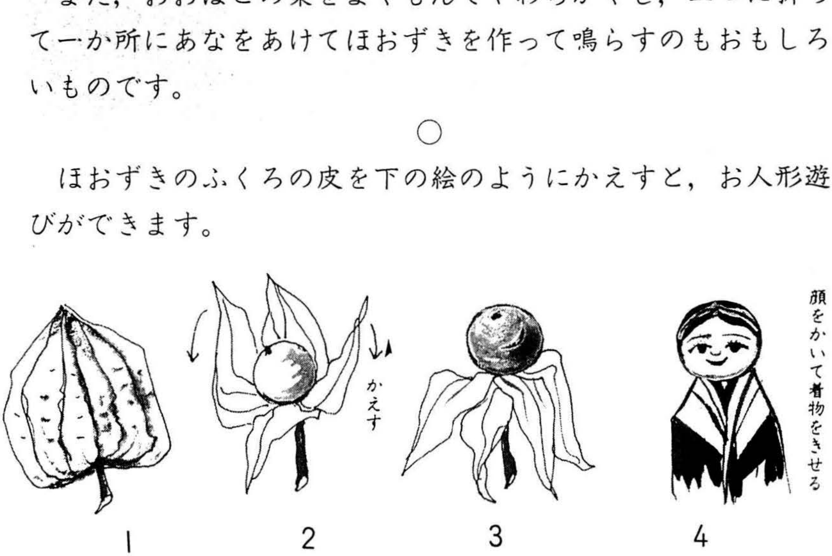
○

ほおずきによくにた小型の緑色をした，わたほおずきもあります。これは，実を出さないで，ふくろごと口にふくんで鳴らします。海ほおずきも同じようにして鳴らします。

また，おおばこの葉をよくもんでやわらかくし，二つに折って一か所にあなをあけてほおずきを作って鳴らすのもおもしろいものです。

○

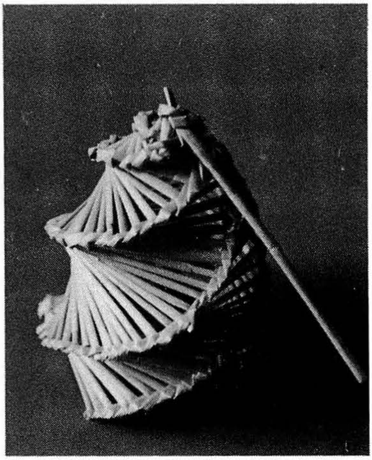
ほおずきのふくろの皮を下の絵のようにかえすと，お人形遊びができます。



麦わら細工(ざいく)

5月の終わりごろになると，むんむん暑くなって，あたり一面の麦田が黄色く色づいてきます。やがて，いっせいに麦刈(か)りが始まります。

今の麦刈りは機械の力で行いますから時間も短く，楽にできるようになりましたが，むかしは，ひとにぎりずつを鎌(かま)で刈(か)り取っていました。それは，腰(こし)を曲げ，汗(あせ)を流しながら朝から夕方ちかくまで続く大へんな仕事でした。

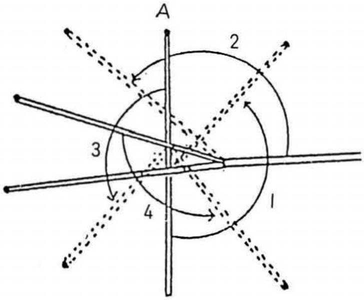

〈ホタルカゴ〉

日暮れがちかくなったころ，刈り取った麦わらを焼くパチパチという音とともに，あたりに煙がただよって，まるで深い霧の中にでもいるような気持ちになります。

麦わら細工(ざいく)は，とり入れの終わったあとの麦わらを使って，いろいろなものを編(あ)み上げて作ったものです。使う麦わらは，穂(ほ)のとれたところから，次の節までの長い部分のところで，これをたくさん集めてそろえます。

麦わらは，むかしからストローとしてよく使われてきたもので，中が空いているので，さしこんで何本もつぎたしていくことができます。刈り取った後の麦わらは水分をふくんでいるので，やわらかく，曲げたり，ねじったりしても折れません。

〈ホタルかごのつくり方〉



〈ホタルカゴのつくり方〉

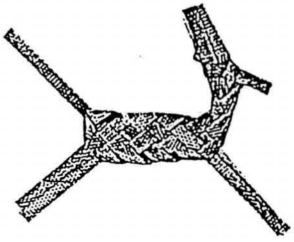
図のように，１本の麦わらに２本の麦わらをさしこみ，三つの足が出たような形をつくります。

つぎに，図のようにＡの麦わらをはじめの２本の麦わらの下に置くと，こんどは５本の足ができます。ここまでできると，どの足からでも，まじわっているところを折り曲げて，次の足の上に置きま。す。こんどは，次の足をその次の足の上へ折り曲げて置きます。

これをくりかえしていって，足が短くなると，新しい麦わらをつぎたして長くして折り進めていくと，かわいらしいかごができ上がります。

麦を刈るころは，ホタルがとびはじめます。そのホタルを，このかごに入れて，のき下につり下げると，とても美しい夜になります。

みなさんも，麦わら細工をやってみませんか。


〈麦わらでつくったうま〉

〈麦わらでつくるもの〉

１　うま　　２　キリン

３　キセル　　４　麦わら真田（きなだ）（ひも）

かぶとむし

かぶとむしは，子供たちにいちばん親しまれている昆虫（こんちゅう）です。夏の初め，くぬぎ林へ取りに行きました。くぬぎは，あまずっぱいにおいのする液（えき）を出すので，かぶとむしは，その液をなめに集まってくるのです。

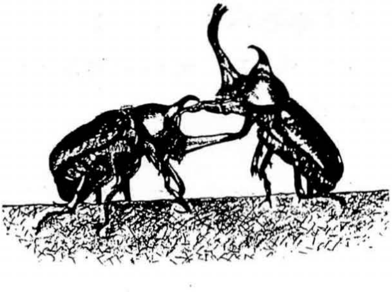
かぶとむしは夕方になるとよく動きはじめ，好物のじゅ液をなめていますが，昼は，木の根もとや落ち葉の下にかくれています。

子供たちは，大きくて強そうなかぶとむしをつかまえて遊びました。

(1) かぶとむしのけんか

かぶとむしあそびで楽しいのは，かぶとむしどうしのけんかです。

2匹の大きなかぶとむしを向かい合わせると，はじめは押（お）し合いをします。やがて，長い方のつのを相手のからだの下に入れ，投げとばそうとします。短い方のつのではねじふせようとします。



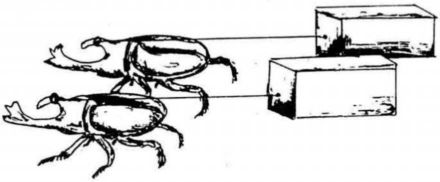
逃げたり，ひっくり返ったりした方が負けです。それは激（はげ）しい戦いです。

ライバルのくわがたむし

ともよくけんかをさせましたが，なかなか勝負がつきませんでした。

子供たちは，いつも，より強いかぶとむしをさがしてまわり，友だちのかぶとむしとけんかをさせて勝つと，宝物(たからもの)のようにだいじにして世話をしていました。

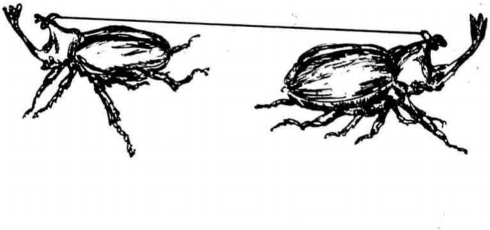
(2) かぶとむしの力くらべ



かぶとむしの遊びには，力くらべもありました。

自分のいちばん強そうなかぶとむしと，友だちのかぶとむしの力くらべをさせるのです。

つのに糸を結びつけて，引っ張(ば)り合いをさせたり，重いにもつを引っ張らせて競争させたりもしました。



「よいしょ，がんばれ，かぶとむし」

「負けるな，早く早く」

とえんだいをたたいて応援(おうえん)する子供たちはいかにも楽しそうでした。

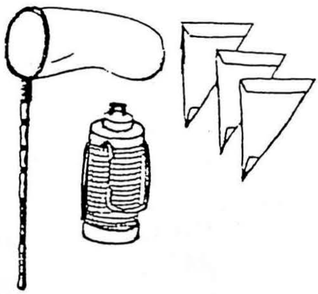
とんぼとり

秋晴れの，澄み切った大空に，昭和20年ごろまでは，とんぼが，群がって飛んでいました。

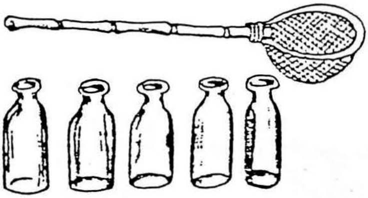
子供たちは,「鬼やんま」などの大きなとんぼをねらって，野原をかけまわりました。

とんぼの中には，飛んでいることが多い,「やんまとんぼ」のなかまや，止まっていることが多い,「しおからとんぼ」のなかまなどがおり，種類によって，住む場所，飛び方，止まり方など，少しずつちがっています。

取り方には，いろいろな方法があります。



(1) さい集のしかた



●よう虫をとるとき

あみ…わくのしっかりしたもの

まほうびん…小さめの薬びんでもよい

●成虫をとるとき

あみ…口の大きいもので，わくのじょうぶなもの

かご…布でおおっておく

三角紙…羽をいためないため

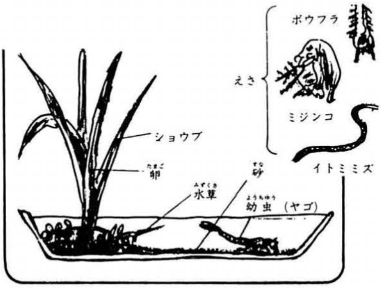
とんぼは，追いかけるとにげるので待ちぶせをし，網は，とんぼの尾の方からかぶせて取ります。

⑵　よう虫のかい方

①　えさは，多くやり過ぎると食べ残すので，食べきれる量だけやります。

②　石などを入れて，よう虫（やご）のかくれ場所を作ってやります。

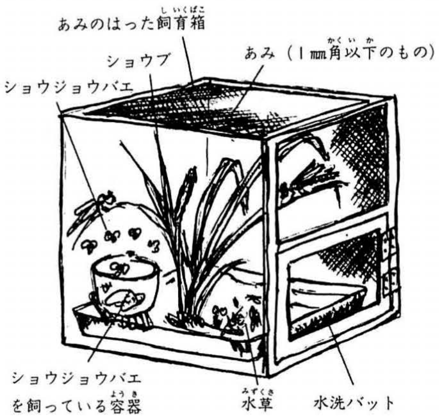
③　羽化のための枝を立ててやります。



④　水草を入れると酸素の補給やかくれがになります。水草が枯れると，水がくさるので注意がいります。

⑤　砂利をまぜたどろを入れておくと，水がにごりにくく観察がしやすくなります。

⑶　成虫のかい方



取って帰ったとんぼは，ダンボールの箱などでかいます。

ダンボールの一方を網にします。飼育箱は，やや大き目の箱で，箱の中をとんぼが，自由に飛べるようにしてやります。食べ物は，ショウジョウバエや，よこばいです。大きさもてごろで，とんぼはよろこんで食べます。

このほか，とんぼの取り方には，針金の先を丸めて輪をつくり，それに，くもの巣を張りつけて取る方法や枝の先に，とり

もちをくっつけて取る方法も行われていました。

また，止まっているとんぼを見つけると，そっと近づきながら，右手の人差し指（左ぎきの人は左手）をくるくる回すと，とんぼは指を見て，あの大きな眼（まなこ）をくるくると回します。

はじめは，大きくそろそろ回し，だんだん小さくしていくととんぼは，目が回ってしまいます。そろそろ終わりに近づくと速く回します。そうすると，とんぼは動かなくじっとしてしまいます。それを手でつかまえたりもしました。

つかまえたとんぼは，自分の家に持って帰り，自分の指にかみつかせたり，とんぼどうしをかみ合わせたりして遊びました。

なかには，捕えたとんぼのしっぽを糸でくくり，竹の先に結びつけて遊んでいる子もいました。とんぼは，捕われの身も忘れて，さもうれしそうに空中に向かって飛んでいました。しかし，なんとなくとんぼがかわいそうに思うときがありました。

農薬（のうやく）の関係で，姿が見えなかったとんぼも，最近は見かけるようになり，秋を楽しませてくれます。

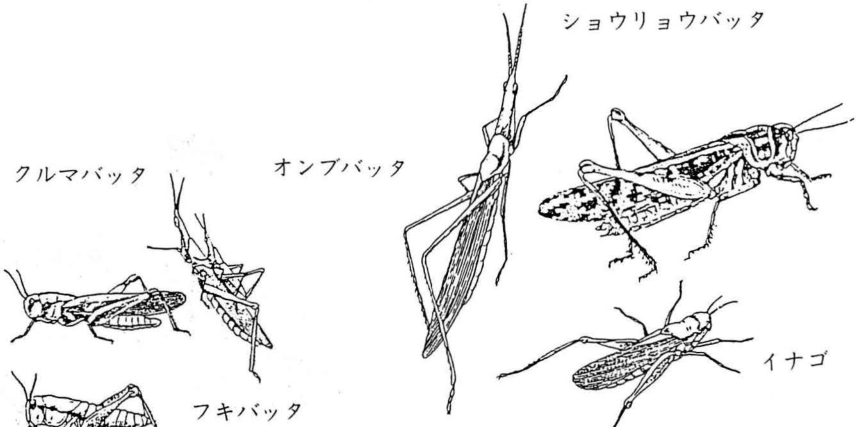
いなごとり

重信町には，田んぼがたくさんあり，重信川の土手には，草原が続いています。

昭和20年ごろまでは，田んぼのあぜを歩いたり，土手の草を踏(ふ)んで遊んでいると，いなごが，足音に驚(おどろ)いて，バタバタとはねて逃げだしていました。

その後，農家の人がお米をたくさん取るため，農薬を使いだしたのでだんだん見かけなくなりました。

けれども，最近は，野原を歩きますと足音で驚いたのか，あちこちでいなご飛び出し，野原を歩く楽しさがふえました。



〈バッタのなかま〉

いなごは．稲の葉を食べたり，実から出る乳を吸ったりして、稲に害を与える虫なので，農家の人にとっては，このいなごの被害を，少しでも少なくすることは大切な仕事でした。

そこで，このきらわれものの，いなごたいじに，ひとやくかっていたのが子供たちです。

自分の家にある針金を，30cmぐらいに切り，くしを作ります。これを数本持って，田んぼのあぜを通ったり，田んぼの中を歩いたりして，いなごをつかまえます。

1本のくしに，さし切れないぐらいさし，たくさん取れたといって，元気よく家に持ち帰ったものです。

針金の外に，自分で竹さをけずってくしをこしらえ，いなごを順々にさして，くしにいっぱいにして持ち帰る子供もいました。

稲から稲へ，あぜからあぜへと逃げ迷ういなごを追いかけ，兄弟が競争して捕らえるのはとてもおもしろいものでした。取って帰ったいなごは，にわとりのえさにしました。

どこの農家にも，にわとりを5羽か6羽はかっており，そのにわとりの世話は，子供の役でしたので，にわとりに食べさせました。いなごには，栄養分がたくさんあるので，いなごを食べたにわとりは，おいしい卵を

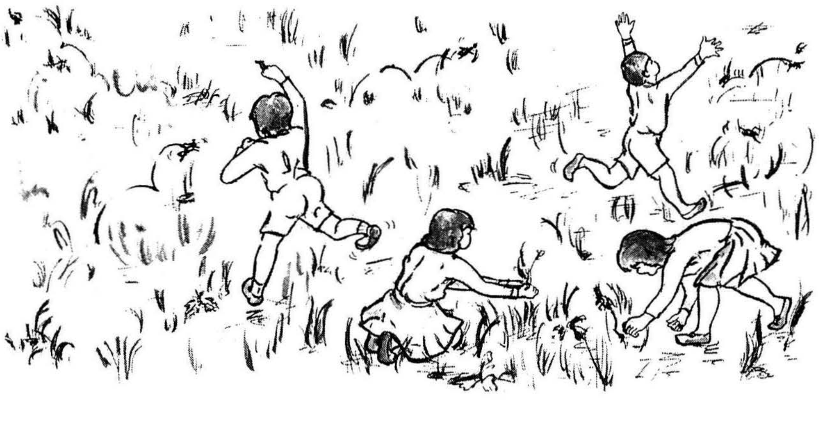
たくさんうみました。そして，この卵を，おべんとうのおかずにしてもらいました。

このように，いなご取りは，ほんとうは家のにわとりの，世話をしているのですが，子供たちにとっては，おもしろい遊びでした。

大正や昭和の初めごろは，今のように物が豊かでありません。くらしも楽ではないので，この栄養のたくさんあるいなごをおかずにして食べました。

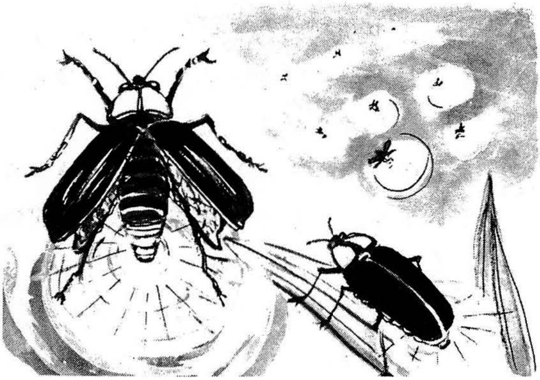
夕飯をたいたあとの，炭火の残り火をかき出して，いなごを焼きます。そして，家族みんなの夕飯のおかずにしました。しょう油をつけて食べると大変こうばしく，細かくすりつぶしてふりかけにすると，ごはんがおいしく食べられました。

このように，いなごという稲(いね)の害虫は，私たちの生活のために役立ってくれてもいたのです。



ほたるがり

ほ，ほ，ほたるこい
あっちの水はにがいぞ
こっちの水はあまいぞ
ほ，ほ，ほたるこい



初夏のころ，重信の子供たちは，この歌を歌いながら，ほたるがりに出かけました。
「ほたる取りに行こや。」
「うん，いこ。いこ。」
と言って出かけようとするのですが，そんな時お母さんは，
「夜は，はめが出るけん，いかんいかん。」
と言います。それでも，
「気をつける。気をつける。」
と言いながら兄弟そろって出かけるのでした。

そのころは,「ぎいやんじ」という大きなほたるや，小さな「ちかちかぼたる」というのがおりました。このぎいやんじというのは源氏(げんじ)ぼたるのことです。松山では，この源氏ぼたるのことを「義安寺(ぎあんじ)ぼたる」と呼んでいました。それは義安寺（道後石手寺の近く）前の小川が源氏ぼたるの名所として有名だったからです。そこで，重信では，ぎあんじぼたるがなまって，ぎいやんじになったのでしょうね。

このぎいやんじは，今でも，夏の夜，草の上や木の下をすいすいとんでいるでしょう。手をのばせばすぐつかまえられそうなのに，もう少しのところで，すうっとにげていってしまいます。高くとんだり，ひくくとんだり，右へ行ったり左へ行ったり，ときどき光をけして見えなくなったりします。

むかしは，小川にはあしが多く生えており，そのあしの中でぴかっぴかっと光っているほたるを，飛び上がって来る時をねらって，ささ竹でさっとはたいて取っていました。

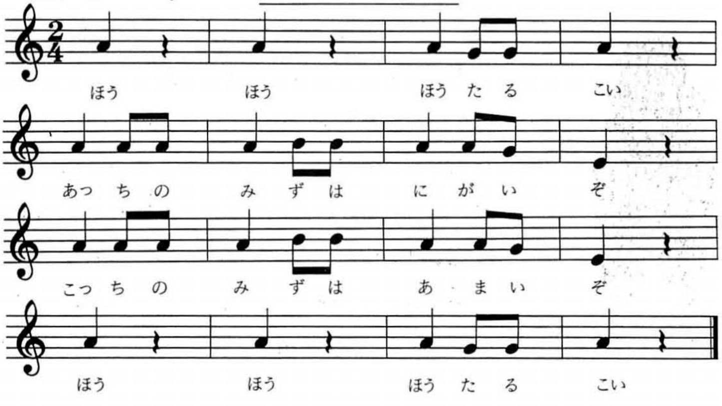
取ったほたるは，麦わらのねじれかごや，ねぶかの中へ入れて持って帰っていました。ねぶか（ねぎのくき）の中へ入れるとすきとおって，中のほたるが，ぼおっと見えて，それはきれいでした。

持って帰ったほたるは，ほたる草を入れて，きりをふいてやって軒下（のきした）へつっておきました。おじいさんが「ほたるにねずみのしっこがかかったら火事になる」と言って，家の中へはなすのは許（ゆる）してくれませんでした。

夕方になると，取ってきたほたるは，そっとにがしてやっていました。

さあ，みなさんも，ほたるがりに出かけませんか。こんなに歌いながら……。

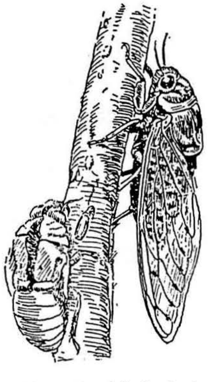
ほ　た　る



せ　み　と　り

待ちに待った夏休みがやってきました。子どもたちの家庭でのくらしがはじまります。夏休みは，自分で自分のくらしを決めなければなりません。

はじめのうちは，自分の生活の計画をたててくらすことに，とまどい，学校へ行くときの朝のようにはやく起きてみたり，何をするのかわからないままに宿題をしたりして日を送ります。



しかし、少しして夏休みであることに気がつきはじめるころ，聞こえてくるのは「せみ」の声です。さっそく，子どもたちは，せみとりをはじめます。

せみには，種類がいろいろあって，４月ごろ松の生えている山で，ねむそうに鳴く「まつぜみ」。夏休みのはじめごろによく鳴くのは，「にいにいぜみ」。夏もさかりの８月のはじめころになると，シャーシャーシャーと，にぎやかに鳴く「くまぜみ」や，ギィーギィーと鳴く「あぶらぜみ」が出てきます。

アブラゼミ

やがて夏休みが終わりに近づき，子どもたちの心が少しさみしくなりかけたころには，「つくつくぼうし」。夕方や雨の降る前には，「かなかなぜみ」が鳴きます。

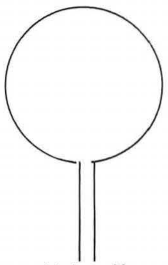
それぞれのせみには，いろいろなとり方があって，とる道具もちがうときがありま

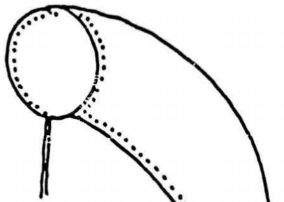
す。兄さんが小さい弟や妹をつれて，せみとりあみを持ち，年下の子にかごを持たせて，なかよくせみとりをしている姿は，とてもいいものですね。

では，そのせみのとり方のいくつかを紹介(しょうかい)します。

(1)　ふくろでとる

ふくろは，じょうぶな針金(はりがね)で直径(ちょっけい)10～15センチメートルほどの輪をつくり，これに長さ30センチメートルほどの白い布のふくろをぬいつけます。ふくろの直径は，あまり大きくない方がとりやすいです。また，ふくろが長いのは入ったせみを逃げにくくするためです。


針金の輪


布で作ったふくろ

(2)　とりもちでとる

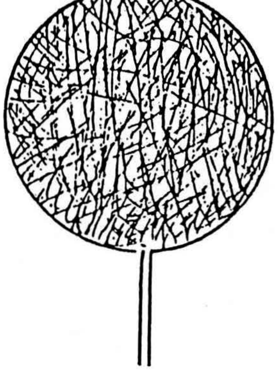
とりもちは，ときにお店で買うこともありましたが，むかしは，たいてい自分で作っていました。作り方は，

① 小麦粉(こ)に水を加えて，たたいてつくる。。
② とりもちの木の皮を石でたたき，ねばりを出す。
③ ハエ取り紙を適当(てきとう)な大きさにハサミで切って，竹ざおの先に巻きつける。

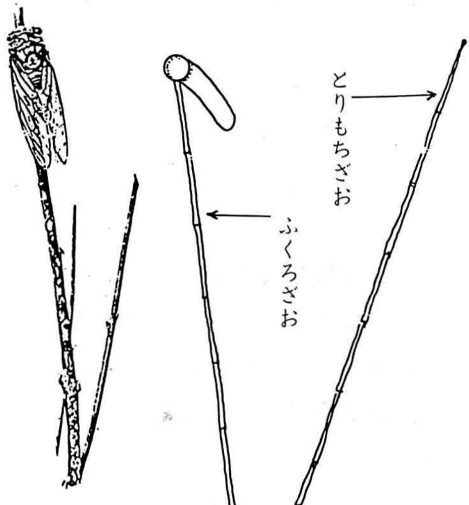
(3)　くもの巣(す)をつかってとる

針金で作った輪に，大将ぐもの巣を何重にもからませたもので，巻きつけたくもの巣が少ないと，大きなせみは暴(あば)れて逃げ

てしまいます。ふくろでも，とりもちでも，くもの巣をつかってでも，せみをとるときには，せをの後ろの方からゆっくりと近づけることが大切で，急な動作をすると，せみはおどろいて逃げてしまうので注意しましょう。



くもの糸のさお



(4)　せみの種類

① くまぜみ
② あぶらぜみ
③ にいにいぜみ
④ まつぜみ
⑤ つくつくぼうし
⑥ かなかなぜみ
⑦ あなぜみ（まだ土の中にいるせみ）

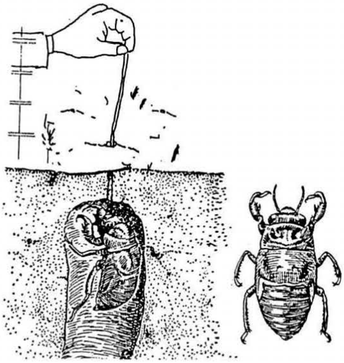
これらのせみの中で，くまぜみはいちばんからだが大きく，動きもすばやいせみです。その上，高い木のてっぺんによくとまるので，なかなかつかまえることができません。その点，小さいせみは，木の低いところによくとまるので，たやすくとることができます。高いところにいるせみをとるには，そっと，木に登ったり，竹をつぎたして長くしたりします。

とったせみは，せみかごの中でも鳴きますが，長くは生きず

たいていは，2，3日のうちに死んでしまいます。

(5) あなぜみとり

あなぜみは，土の中にいるせみの幼虫(ようちゅう)です。木の根元あたりのややわらかい土の表面に，小さいあながぽつぽつとあいているところが，あなぜみの住みかですから，居(い)場所はすぐに見つけることができます。



〈あなぜみのとり方〉

このあなの中に，藁(わら)を１本そっとさし入れてごらんなさい。

あなの中の幼虫が，わらの先をつかむと手ごたえがありますから，急がないでゆっくりと引き上げてやりましょう。とくに，あなの出口のところで下に落ちやすいので，気をつけましょう。

とったあなぜみは，ひと晩蚊帳(かや)の中にとまらせておくと，翌(よく)朝にはきれいに羽化(うか)して親ぜみになります。

〈せみの羽化のようす〉

涼み台つくり

7月に入ると，夏休みを指折りかぞえて待つのは，昔の子どもも今の子どもも変わりはありません。なかのよい仲間たちとのびのび野山をかけ，川あそびをし，夏祭りの夜店を楽しむのも，昔も今も変わらないのです。

その中で，今ごろすっかり忘れられたあそびになってしまったが，昔の子どもたちが，いちばん夏休みらしいあそびとして作っていたのが「涼み台つくり」です。

子どもたちは，夏休みが近づくと，涼み台をつくる丸太んぼうや敷板にする板集めにかかります。

休みに入ると，すぐ，友だちが集まって手伝い合い，涼しい木かげをみつけて涼み台をつくります。

(1) 涼み台のつくり方

① 家の庭の枝の出かたなどをよく見て，木陰の涼しい棚のかかりそうなところを見つける。

② 枝から枝へ，または枝から塀へ，枝から石垣へなど，その場所に合ったやり方で，丸太んぼうをさし渡して，家の

土台のようなしくみをつくる。枝と丸太んぼうは，わらなわで，しっかりとしばりつけ，落ちないように工夫します。

③ 土台がしっかりできると，その上に，できるだけ幅(はば)の広い板をしきならべて，座(ざ)をつくります。この板も，ずり落ちないようになわでしばったり，くぎ打ちします。

④ 板を動かないように止めると，その上に「ござ」や「むしろ」を敷けば，りっぱな座敷(ざしき)ができます。ぼくの，ぼくらの夏の座敷です。

(2) あそび方

できあがると，手伝い合った友達と，わくわくした気持ちで上にあがり，涼み台をつくった苦労(くろう)話をし合います。ねころんで，いろいろ語り合ったり，宿題をし合ったりします。

一けんの家の涼み台ができ，しばらく楽しむと，こんどは次の友だちの家の涼み台つくりに行きます。ここでも同じように力を合わせてつくります。家によって，涼み台をかける場所や庭木のようすがちがいますので，みんないろいろ意見を出し合い，ちえと力を合わせてつくります。

子どもたちは，大人にさしずされないで，自分たちの手足とちえを出し合って，大工さんにでもなった気持ちでつくります。ほんとうに子どもらしい，健康な，たくましいあそびでありませんか。

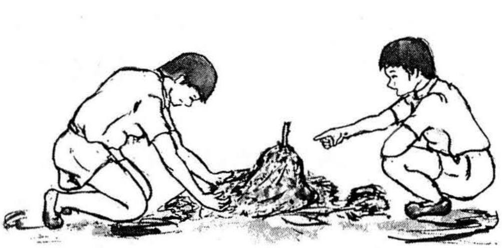
友だちの来ない日は，涼しいせみしぐれの庭の涼み台に，ひとりであがって読書をするのです。地上の高い所ですから，涼(すず)しい風が吹(ふ)いて来ます。本もたくさん読めます。楽しい空想(くうそう)もわいてきます。いつのまにか，すやすやひる寝をしてしまっていることもあります。夢(ゆめ)のような夏休みです。

棒(ぼう)たおし

若葉から青葉になる季節に，子供たちは，木の下に集まってはいろいろな遊びをよくしたものです。せまい校庭や道までも今のように，セメントでぬりつぶしたり，ほそうしたりしていませんでした。だから木の下には，土や砂がたくさんありました。子供たちは，この土や砂にさわって遊ぶことが大好きで，よく遊んだものです。2，3人集まると，よく木の下にしゃがみ込(こ)んで絵や字をかいたり，小石やおはじきなどで遊んだりしました。その中の一つに棒たおしがあります。

砂の小山を作り，そのてっぺんに棒を立てます。その棒が倒(たお)れないように砂を取っていくのです。

はじめは，思い切り両手で砂を自分の方へ取ってのけますが，おわりごろになると少しの砂の山に棒がやっと立っているのですから息をころして棒を倒さないようにそっとそっと，両手で砂を少しだけ取ります。自分が棒を倒しはしないかとドキドキします。倒(たお)した



方が負けになるので，何とも言えないスリルが味わえるのです。

遊び方

① 木の下へ2，3人の子供が向き合ってしゃがみます。
② しゃがんだ子供たちで，木のまわりにある土や砂を両手で集めて，みんなで小さな山を作ります。
③ 小山のてっぺんに短い棒ぎれをひろって来て，まっすぐに立てます。
④ ジャンケンをして勝った者から小山の土を両手で，向こう側から自分の方へ向けてよせ集めます。
⑤ 順番に，何度も棒が倒れないようにまわりの土をのけていきます。
⑥ 土を取った時に棒が倒れた者が負けになります。
⑦ 勝負がつくと，またはじめのように小山を作ってします。

下校の時，他のクラスの友達を待っている間，この棒たおしを校庭の木の下でしたり，お寺やお宮，また公民館など広場でよくしました。

何の道具もいらない，たわいのない遊びです。土や砂のある所であれば，だれだっていつでもできます。みなさんも，やってみませんか。

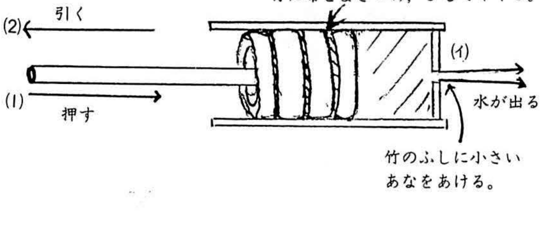
水でっぽう

夏の子どもたちのいちばん楽しい遊びは，水遊びです。どこのおうちにも，夏のお庭には，たらいやバケツやおけが出してあって，子どもたちは，お昼ごろになると，それらの入れものに水をためて，水遊びをしたものです。その遊びの一つに，「水でっぽう」があります。

その水でっぽうも，みんな自分でいろいろ材料を集め，自分で考えて，よくとぶもの，つづけさまにとぶものなど，工夫してつくったものです。そのいくつかを，しょうかいします。

(1) つつの先から水が出る水でっぽう

これが，いちばん簡単(かんたん)にできます。最初はこれから取り組むとよいでしょう。



遊び方

① はじめに水の中に(イ)のところをつっこんで，(ロ)のひき棒(ぼう)を引くと，水が入ってきます。

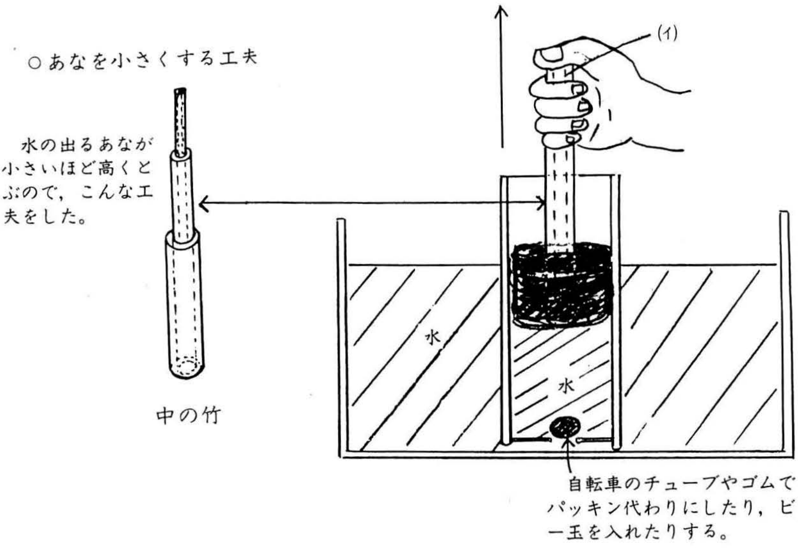
② 水が入ったら，とばしたい方を向けて(ロ)を力強く押(お)すと，水がとびます。

(2) 上に水の出る水でっぽう

中の竹の先を指でおさえておいて上に上げ，その指をはなして下におした時に水がおび出します。この作り方だと，何回もくり返して水をとばすことができます。

また，次の図のように，中の竹を何本もつぎ足し，先を細くすると，より高く水をとばすことができます。大きさの合う竹を探し，小刀でけずったりしてつぎ足していくのは，なかなかむずかしいようです。

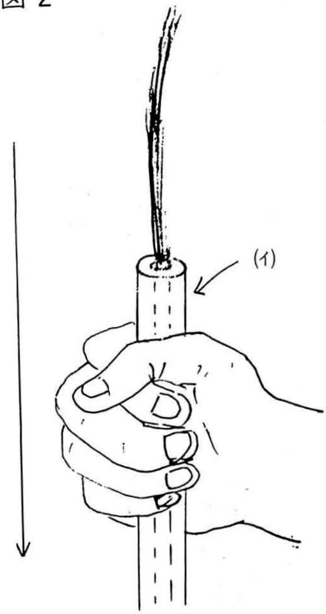
図１



遊び方

① 水そうやバケツ，たらいの水の中に水でっぽうを入れ，図１のように(イ)の先を空気がもれないようしっかり指でおさえます。そして，(イ)を上に引き上げると，中に水が入ってきます。

図 2



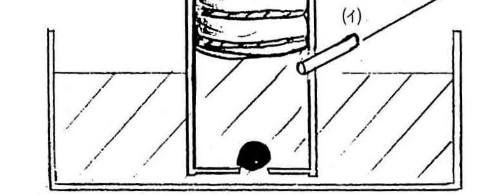
② 水がたくさん入ったら，おさえていた指をはなし，(イ)の竹を下に強く押すと，水が勢いよく上にとび出します。（図 2）

③ ①，②をくり返せば，水がなくなるまで，何回も，水をとばすことができます。

④ (イ)の竹の作り方の工夫により，高さを競ったりする遊びもできます。

(3) つつの横から水をとばす水でっぽう

これは，横に細いつつ（竹）をつけるのが，大変むずかしいようです。



遊び方

① 水でっぽうを水の中に入れて，(ロ)を引き上げると，水が入ります。

② (ロ)を下に強く押すと中の水が(イ)からとび出します。

川　　遊　　び

夏の代表的な遊びは，何といっても，「泳ぐ」ことであったようです。砂遊びをしたり，また，水の中へとびこんだりして，一日中遊んだそうです。

泳ぐことのほかに楽しいのが，魚とりです。

昔は，川の水がきれいだったので，魚もたくさんいました。どじょうやうなぎ，しじみなど，遊びながらとり，持って帰るとそれが晩(ばん)のおかずになるので，遊びと仕事とを兼(か)ねていたようです。

魚をとる時には，前の日から集まって相談し，みんなで道具を用意したりするのも楽しみの一つでした。

(1)　もっことり

いちごさし（カニツリグサ）という草でさおをつくりました。いちごさしというのは，50㎝ぐらいのあしのような草で，細い毛のようなものが両はしにあります。それの葉をすっこいで（手でしごいてのけること）細いしんだけにして，つりざおにします。

そして，石の下にいる「ご虫」（かげろうの幼虫(ようちゆう)）の大きいのを探(さが)してとり，そのご虫の胴(どう)をいちごさしの先にくくりつけます。

ご虫をつけたいちごさしのつりざおを，そうっと石と石の間におろすと，もっこがくいついてきます。くいついたと思ったら，さっとしゃくってひきあげるのです。

とれたもっこは，これまた，いちごさしの草にエラからさし通し，たくさんさしつらねて持って帰りました。

(2) どんことり

どんことり

小川の川はばをせまくしたり，石でせきとめたりして，川上から追いこんでとります。じょうれんやあみを使い，たくさんとったものです。

(3) どじょうとり

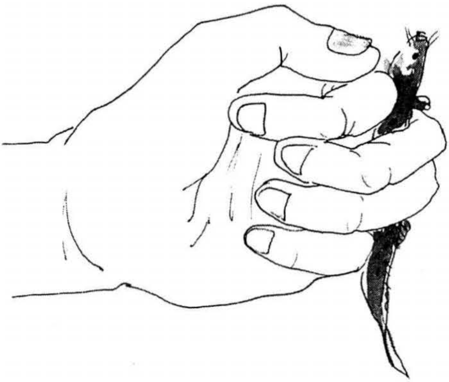
昔は，小川やみぞの石を一つ上げてみると，むれるくらいたくさんいました。

田んぼの稲(いね)が育つ間は，おひゃくしょうさんは，田んぼにいつも水を入れています。どじょうは，その田んぼの水の中で大きくなっています。

ところが，頭のいいおひゃくしょうさんは，稲(いね)を植(う)える前に，その田んぼの水を出すところ（水戸(みと)）の近くに，「つぼえ」という小さな木のおけをしずめておきます。稲(いね)がみのって，水がいらなくなると，田から水を落として，田をかわかします。だんだん水がへってくると，田の中じゅうにいたどじょうは，しぜんに水の出口に集まって来て，その近くにあるつぼえにたまるのです。そして，田の水が落ちてしまったころ，おひゃくしょうさんは，そのつぼえの中から，ぜんぶどじょうをとることができるのです。

手でにぎると，チューとかキューという声が聞かれるのもお

もしろいことでした。
とれたどじょうは，水とうがらしの入ったバケツに入れ，どろをはかせた後，どじょう汁にして食べました。
どじょうやうなぎは，ぬるぬるしてつかみにくいので，図のようにゆがめてつかむとすべりません。


うなぎやどじょうのつかみ方

どじょうのとり方には，小みぞの下(しも)へじょうれんを入れて，上(かみ)の方から足でどじょうをそのじょうれんに追いつめてすくいあげる方法もあります。

⑷ うなぎとり

石と石との「がま」(間) の中へ手を入れると，うなぎやなまずがいました。
「もじ」(竹で編(あ)んだ、入ったら出て来られない細長いかご) でとったり，とうがらしをきざんで川に入れ，からさに酔(よ)って出て来たところをとったりしたそうです。

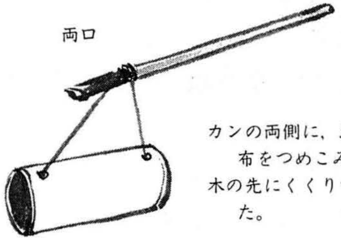
とったうなぎは，火ふき竹でふいて炭火をおこし，うちわであおぎながら焼いて，食べました。

⑸　ツガニとり

ツガニは，雨がふると，川から道に上がってきたりしていました。

夜,「両口（りょうくち）」で川を照らしてとって歩きました。

このツガニを入れてごはんをたくと，だしが出て，とてもおいしいそうです。



カンの両側に，油にひたしたぼろ布をつめこみ，火をつける。木の先にくくりつけ，持って歩いた。

⑹　たにしとり

たにしは，稲（いね）をかった後の田んぼのひびわれの中にもよくいました。親が仕事をしている間,「帰ったら食べさしてあげるけん，せいだしておとりよ。」と，はげまされて，拾（ひろ）ったものです。

身は，こりこりして，サザエのようで，おいしいんですよ。

⑺　しじみとり

いつも水の流れているきれいな小川の砂のところをすくうとしじみがたくさんとれました。

土用の丑（うし）の日には,「しじみを食べなならん。」ことになっていて，みんなが，お汁（しる）にしたりして，食べていたそうです。

松山の方からも,「にないかご」をしょって，しじみを買いに来ていたそうです。

今では，もう，見られない情景ですね。

しじみうり

みなさんも，あぶなくないように気をつけて，魚とりに挑戦(ちょうせん)してみませんか。

家の人といっしょにするのもいいですね。

国　と　り

小川を流れる水音が高くなり，ほほをなでるそよ風もさわやかです。山の新緑も鮮（あざ）やか，大地も呼吸を始めました。みんなで外に出て大地にふれてみましょう。地面のひんやりした手ざわりが，ここちよいはずです。

「国とり」という遊びを知っていますか。遊び道具のあまりなかったお父さんやお母さんが，子どものころよくやった遊びです。広い場所もいりません。遊び方も簡単です。さあ，みんなでやってみましょう。

図１

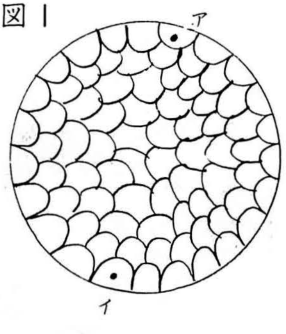
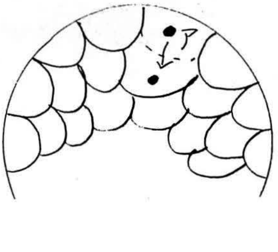


図２—１



遊び方

① おはじきか平べったい小石をひとつずつ持って，２人で向き合ってください。

② 地面に大きな円を書き，両方から小さな半円を書いていきます。（図１）

③ 向かい合って，まず１か所を自分の陣（じん）地にします。

（図１のア・イ）

④ じゃんけんで先にやる人を決めます。先にやることになった人は，自分の陣地のとなりの半円の中へ指先でおはじきをはじ

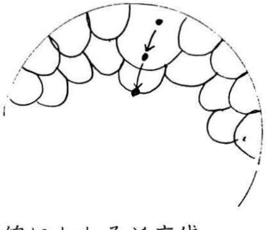
き入れていきます。

線にかからず，うまくとなりの半円の中におはじきが入ると，自分の陣地になります。

これをくりかえします。おはじきが線にかかると相手と交代し，半円がなくなるまで続けます。

（図2の1・2）

図2—2

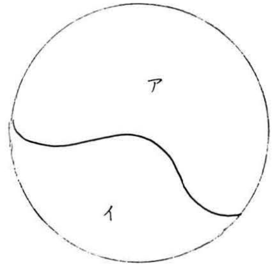


（線にかかると交代にします。）

⑤ 図3のようになると勝負がつきます。

この図の場合は，陣地を広く取ったアの人の勝ちとなります。

図3



小さなお友達にでもかんたんにできる楽しい遊びです。3人以上でやっても，2人ずつのチームを作ってやっても，また別のおもしろさがあるでしょう。お友達を大勢さそって，さあやってみましょう。

遊び終わったら，地面の線を消して，手を洗うことを忘れないようにしましょう。

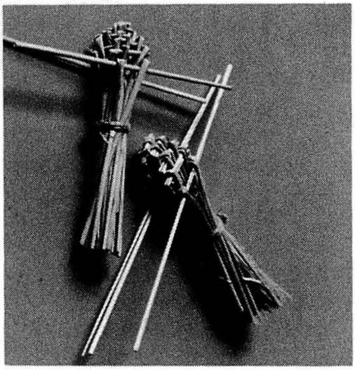
秋

大豆の葉柄細工（みこし・かご）

秋が近づくと，田のあぜに植えられた大豆（あぜまめ）の実が熟してきます。あぜまめは，塩ゆでにするとおいしく，おやつがわりとしてむかしから大へん喜ばれました。

この，あぜまめの葉柄が，みなさんの楽しい遊び道具の材料となるのを知っていますか。

あぜまめの葉柄は，実が熟すころになると，枯れて落ちます。落ちている葉柄を何本もひろい集めて，それを折り曲げたり，組み合わせたりして，小さいみこしや，かごなどを作ります。



〈あぜまめの葉柄で作ったみこし〉

材料が短い葉柄で，麦わらのようにつぎたすことができないので大きさは片手でにぎれる程度のものしか作れません。

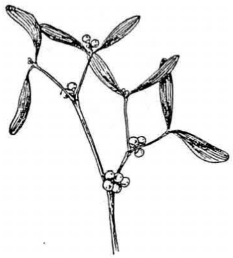
でき上がったみこしを互いに当て合い，はやく相手のものをこわした方が勝ちとなります。固く，しっかりと編んだものがこわれにくいのです。女の子は，みこしのかわりに小さなかごを編んで，虫やカエルのお家を作ってみてはどうでしょう。

みなさん，このあぜまめの葉柄で，みこしや小さいかごを作ってみませんか。

木の実とり

身のまわりの稲（いね）のほが黄色くなりはじめ，すみわたった空からもずの声がきこえはじめると，子どもたちは，あの山には，もう「秋ぐみ」が赤くうれはじめていることや，この松の山には「みどり」という「とりもち」の木の材料になるやどり木の実が，うれはじめたことを体で感じとり，休みの日を待ちかね友だちとさそい合って山へ出かけます。

平和な自然の中で育っているたくましい子どもたちのほほえましい遊びがはじまるのです。



やどりぎ

しいのき

えのき

(1) みどり（やどりぎの実）

むかし，ごはんやおかずは木をもやして，かまどでたいていました。木をじかにもやすのは，むずかしいので，すくず（松葉のかれたもの）をたきつけにしていました。そのすくずを山へ集めに行くのは子どもの役目でした。近所の友だちとさそい合って，山へ行きます。

山へ着くと，すくずを「炭だわら」にいっぱい集めます。競争のようにして早く集めます。入れ物の炭だわらにいっぱいになり，帰るしたくができると，「みどり」さがしをします。高い松の木の枝にあるので，お兄さんたちが登って小枝ごと折り取って落としてくれます。

すくずの炭だわらを背負い，みどりの小枝をもって，家へ勇ましく帰って来ます。

家に帰り着くと，みどりの木の実を一つぶずつもぎとります。もぎとった実の先の方にある茶色の部分をのけ，口の中へ入れてかむと，どろっとしたものが出ます。皮は口ではき出して，つぎのつぶを口に入れます。50つぶも100つぶも取り出して，かんでいると，チューインガムのようになります。また，ふくらませることもできます。このチューインガムは大切なもので，ねる時は水のはいったコップに入れておきます。あくる日，また，チューインガムをかんで楽しむのです。

また、これを「とりもち」として，木の小枝にまきつけ，とんぼや小鳥取りの道具に使って野山で元気に遊んだものでした。

(2) しいの実ひろい

秋の終わりごろになると，木の葉が色づきはじめる中で，青

黒く葉の色を変えないでいる森がきわだって目につきます。この木は,「しいの木」や「かしの木」のなかまです。その中のどの木が「しいの木」であるかということや,いまごろは,黒光りのするしいの実が落ちはじめているということも,子供たちは知っているのです。

学校から帰ると,子供たちは,われさきにと,その木の下へかけていきます。ポケットや着物のたもとに,いっぱいになるまで拾います。

夕方,田んぼの仕事からお母さんたちが帰ってくると,それを「ほうろく」でいってもらいます。

こたつに足を入れて,いったしいの実を食べながら,楽しかった今日の一日を思い出したり,むかし話を聞いたりしました。

(3) えのみとり

いなかでは,どこにでも大きなえのきが見られました。秋には葉も茶色に色づきよく目立ちます。そのえのきには,黒っぽいだいだい色の実がじゅくします。直径6㎜ぐらいの小さな実ですが,あまいので小鳥だけでなく,子供もよく取って食べます。小さな実を口の中にはいるだけ入れて,こつこつとかんで種をプッとはき出します。

わたしが口の中からはき出した種が芽を出したかどうかは,おぼえていませんが,もし芽を出したとしたら,今ごろ,どこかで大きなえのきになっていることでしょう。

このように山や野原を歩いていますと,いろいろな木の実に出合います。その木の実を取って食べた種がどこかで大きくなっていくことを想像するとたいへん楽しいことですね。

どんぐり遊び

重信には，あちこちにくぬぎの林がたくさんありました。秋風が吹きはじめ，木の葉が色づくころになると，子供たちは，つれだって，どんぐり拾いに出かけました。

どんぐりは，木の種類によって，いろいろな形のものがありますが，見奈良原などで拾うのは，くぬぎの実でした。

子供たちにとって，どんぐり拾いは実に楽しいもので，風の吹いた日など，熟(じゅく)した茶色の実があたり一面に落ちています。

学校帰りの子供は，

「きょう，どんぐり拾いに行こうや。」とだれいうともなく，いいだすと，

「うん，いこう。」と，相談はすぐにまとまります。

そして，家に帰って，かばんを置くやいなや，袋(ふくろ)を持って，リーダーの家へ集まりました。

子供たちは，拾って帰ったどんぐりで，いろいろな遊びを工夫しました。

(1) どんぐりごま

どんぐりの実の大きなものをえらんで，こまをつくります。

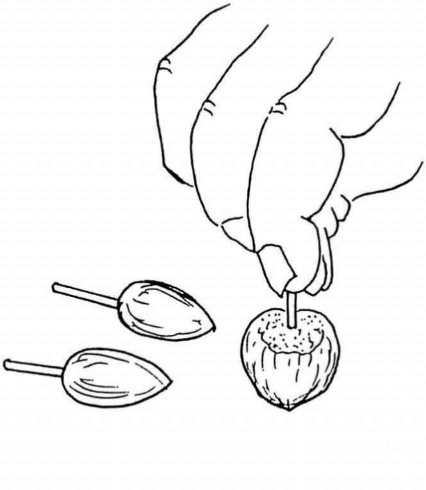
どんぐりのおしりにきりであなをあけ，竹ひごか，ようじを差し込んで，心棒(しんぼう)をつければそれでできあがりです。

どんぐりこま

細長いどんぐりの場合は，どんぐりのおしりを，少し切って心棒をつけると，よく回るようになります。

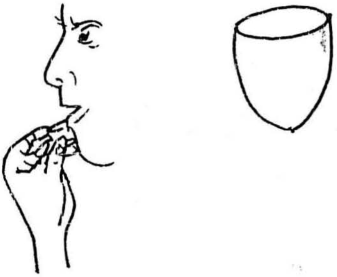
心棒が長すぎると，回り方がよくないので回してみながら，心棒を適(てき)当な長さに切るのが，よく回る「コツ」です。

できたこまで，回る時間の長さを競(きそ)い合ったり，当てっこをしたりして遊びました。



こままわし

⑵　どんぐり笛



どんぐりぶえ

大きなどんぐりの，おしりの部分を切り取り，どんぐりの中味を，きりやくぎで取り出します。これで，どんぐり笛はできあがりです。

どんぐりは，からが薄いので，ていねいに中味を取り出さないと，からが割れてしまうので気を付けて取り出しました。

できあがれば，下くちびるを，かぶせるようにして，強く吹くと，ヒューヒューという音を出して鳴ります。

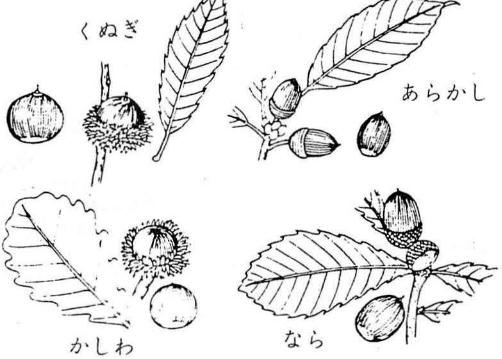
子供たちは，鳴らしっこをして遊びました。

⑶　やじろべえ

拾ったどんぐりで，子供たちはいろいろ工夫して，楽しく遊んでいました。「やじろべえ」遊びも，さかんに行われました。

どんぐりをどう体にして，その上に，丸い小さいどんぐりを，竹ひごでつないで頭にします。

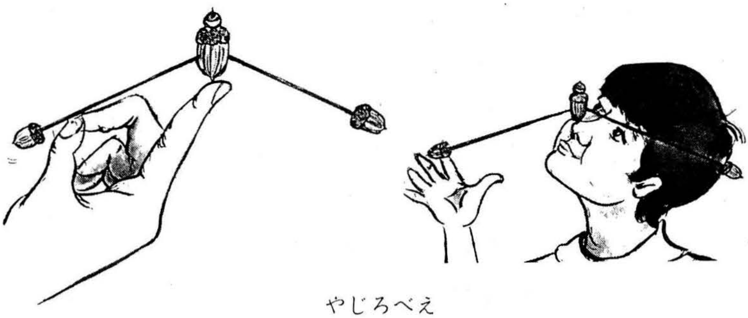
長い竹ひごの腕を出し，その先に，小さいどんぐりをつけ左右がつり合うよう



どんぐりの種類

に，竹ひごの長さを調節(ちょうせつ)します。

できあがれば，指先や，鼻(はな)の頭にのせて遊びました。



やじろべえ

⑷ どんぐりうち

小さな砂(すな)山をつくり，その中に，どんぐりをうずめます。

数人で遊ぶときは，ジャンケンで順番を決め，大きなどんぐりで，どんぐりがうずまっていそうなところを打ちます。

うまくいくと，打ったところに，どんぐりが顔を出します。

このどんぐりは，自分のものとなり，何回も「どんぐりうち」をくり返します。

最後に，たくさんどんぐりを取った方が勝ちになる遊びです。

うめるどんぐりは，同じ数ずつ出し合い砂の中にうめます。

竹とんぼとぶんまわし

竹とんぼは，男の子の遊びです。今のようにテレビもない，遊び道具も少なかった昔の子供は，わが家の庭や原っぱ，学校の運動場などで，よく竹とんぼを飛ばして遊びました。自分の作った竹とんぼが，空高く舞い上がって落ちてくるのを，その場所まで走っていって手で受けたものです。

竹とんぼの作り方については，父や祖父に教えてもらうこともありましたが，子供は自分で作っては飛ばしてみながら，飛ばない原因を考えてはいろいろ工夫したものです。

(1) 竹とんぼ

① 材料　できるだけ大きい竹を使う。

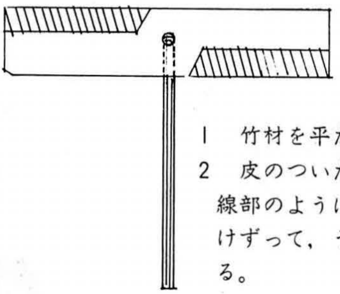
② いろいろな竹とんぼ

ア　回転棒に羽根を固定した竹とんぼ（両手で回転させる）

イ　回転棒から羽根が離れて飛ぶ竹とんぼ

ウ　巻き糸で回転させる竹とんぼ

ア　回転棒に羽根を固定した竹とんぼ



1　竹材を平たくする。

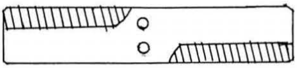
2　皮のついた方を斜線部のように対称にけずって，うすくする。

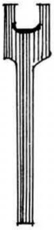
3　竹材の中心に穴をあけて，竹の棒を固定する。

●飛ばし方

両方のてのひらで，竹の棒を回転させながら，勢いよく前方に突き出す。

イ　回転棒から羽根が離れて飛ぶ竹とんぼ

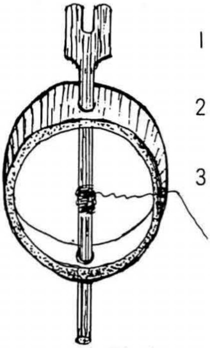




1　羽根の作り方はアと同じ。
2　羽根の中心部に穴を二つあける。
3　回転棒を二またにする。

●飛ばし方
両方のてのひらで竹の棒を回転させながら勢いよく羽根を突き離す。

ウまき糸で回転させる竹とんぼ

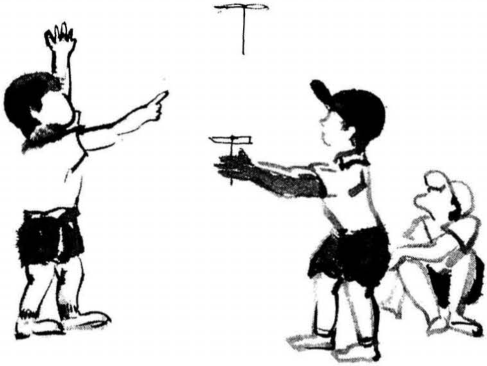


1　羽根の作り方はアと同じ。
2　回転棒の作り方はイと同じ。
3　糸で回転させるために左図のような装置を作る。

●飛ばし方
竹の輪を左手に持ち，右手で強く糸を引っ張って棒を回転させ，羽根を飛ばす。

遊び方

一人で飛ばして楽しんだり，友達と竹とんぼの飛んだ距離とか高さを競ったりして遊びました。よく飛ぶためには，特に羽根の形とか厚さを工夫しました。いろいろと苦心をして作った竹とんぼが，友達とくらべてより，遠くより高く飛んだときは本当に胸のすくような思いがしました。さあみなさんも工夫して作り，友達といっしょに原っぱで飛ばしてみましょう。



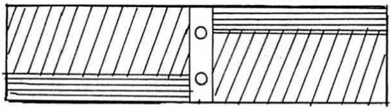
(2)　ぶんまわし

竹とんぼの作り方によく似たものに，ぶんまわしがあります。

竹とんぼは回転しながら空を飛んでいくのに対して，ぶんまわしは両手の引っ張る力によって，羽根を回転させるのです。その時，ぶんぶん音を立てて回転するので，「ぶんまわし」という名がついたのでしょう。

① 材料　できるだけ大きい竹を準備し，節のない部分を使います。

② 作り方



ア　竹材を平たくする。

イ　皮のついた方を斜線部のように対称にけずってうすくする。

ウ　中心に二つ穴をあけて，ひもを通す。

エ　ひもは，じょうぶなものを使う。

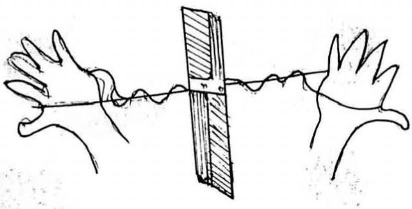
③ 遊び方

ア　はじめにひもをねじらせておく。

イ　両手でひもを引くとひもがとける勢いで羽根がまわり出す。

ウ　羽根が勢いよく回転して反対方向にまたねじれができる。

エ　両手で勢いよく引っ張れば引っ張るほど，早く回転し音を立てる。

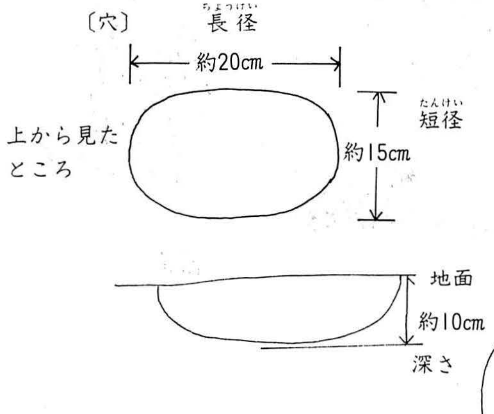


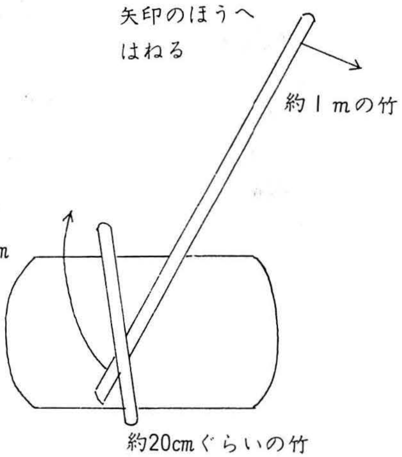
百間とばし（しゃくとり）

主に男子の戸外での遊びです。稲刈りの終わったあとの，広々としたたんぼの中で，秋の終わりから冬にかけて，男の子数名が，短い竹を遠くへとばして遊びました。

遊び方　(1)

まず地面に，長いほうが20cmぐらい，短いほうが15cmぐらい深さが10cmぐらいの穴を掘ります。その短いほうの穴の上に，20cmあまりの竹をおきます。その竹を，1mあまりの長い竹で穴の上に置いた竹をはねて，できるだけ遠くへとばします。そのとんだ距離を，長いほうの竹をものさしがわりにして，しゃくとり虫のように，一間，二間，三間……と数えながら測っていきます。遠くまでとばした者が勝ちとなる遊びです。





遊び方　(2)

ただ，遠くへとばすだけでない遊び方もあります。

それは，一人が，穴(あな)の上に置いた竹をはねます。ほかの者ははねられた竹がとんでくるほうにいて，その竹を手で受けます。受けられると，竹をはねてとばしていた者はアウトになります。そして，とんできた竹を受けた者とかわります。

受けられなかった場合は，落ちたところから，その竹を拾った者が穴をめがけて投げかえします。投げ返された竹を，はねるときに使った１ｍぐらいの竹の棒でうち返します。その短い竹のうち返されたところまでの距離(きょり)を，長い１ｍぐらいの竹で測(はか)り，長い距離(きょり)をうち返した者が勝ちとなります。

鉄ぽう遊び

空が青くすみ，稲の取り入れの季節がくると，むかしの子どもたちは田んぼのお手伝いをよくしました。田のあぜでひと休みしていると，青く細長い竜（りゅう）のひげの根もとから，青紫（あおむらさき）に光る竜のひげの玉がいくつもいくつも顔をのぞかせています。

子どもたちは，これを「すす玉」と呼んでいましたが，頭の中はもう「すす玉鉄ぽう」を作って遊ぶことでいっぱいです。お手伝いが終わるのを待ちかねたように，うら山へ材料の竹切りに飛び出します。作り方はかんたんです。さあ，みなさんも作ってみませんか。

(1) すす玉鉄ぽう

材料は，下図のような直径5～7㎜，長さ20㎝ぐらいの「つつ」にするしの竹1本と、「おし棒」にする直径3～4㎜の細い竹を用意します。

〈作り方〉

①

上図のように切って，つつとにぎり手をつくる。

②

にぎりの中に細い竹をさしこんで，ぬけないようにする。

③

でき上がり

玉の飛ばし方は，つつの中に少しきついめのすす玉を１こつめこんでおき，さらにもう１このすす玉をつめこんで，こんどは押し棒を強くおしきると，つつ先から初めに入れたすす玉が勢いよく「ポン」と音をたてて飛び出します。もうその後は，１こずつつめこんで，おし棒でおせば，次から次へと玉を飛ばすことができます。

このすす玉鉄ぽうで遊ぶとき，すす玉をたくさん取ってポケットに入れておいて，２はんに分かれて打ち合って遊びます。玉は７～８ｍ飛びますが，体に当っても痛くはないので，追っかけっこをしながら打ち合い，先に玉が体に当った方が負けです。

また，的を作っておいて，４～５ｍのところから打って10発のうち，何発当てたかで勝ち負けを決めたりもします。さあ，みなさんもすす玉鉄ぽうを作って，元気に遊びましょう。

(2) 紙玉鉄ぽう

作り方や材料は，すす玉鉄ぽうと全く同じです。ちがうのは鉄ぽうを使って遊ぶとき，つつの中につめる玉が紙の玉に代わるだけです。

つつの中に紙の玉をつめるときには，ティッシュペーパーの

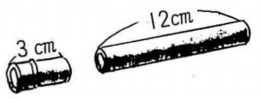
ようなやわらかい紙を，つつの太さよりも少し大きめに丸め，それをつばでしめらせてから歯でかんでかためます。この紙の玉をきつくつつにつめこんで，すす玉と同じやり方で飛ばして遊びます。主にこれは，すす玉のなくなったころ，すす玉の代わりに使って遊んだようです。

(3) すぎ玉鉄ぽう

学校の帰りなどに，家の生け垣の杉が小さな実をつけているのを見かけるようになると，男の子たちは，この実を使って遊ぶ「すぎ玉鉄ぽう」が作りたくてたまらなくなります。前に作ったすす玉鉄ぽうは大きいので，ポケットからはみ出してしまいますが，このすぎ玉鉄ぽうだとうまくポケットにも入るし，ちょうどピストルのような感じで，不意打ちをしたりして友達をおどろかすこともできるのです。かっこいい鉄ぽうですから，みなさんも作ってみましょう。

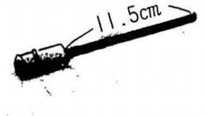
〈作り方〉

①



内径1.5～2㎜の竹を上図のように切って，つつとにぎりの部分をつくる。

②



おしぼうの竹は，大きな竹をわって，おでんのくしのようにけずってさしこむ。

③

でき上がり

作り方は，形が小さいだけで，すす玉鉄ぽうと全く同じです。材料の竹は，杉の実の大きさに合うような，細いしの竹をさがして切ってきます。押し棒も小さくてよいので，おでんのくしのようなものを使います。上の図を参考に，作ってみましょう。

うまくでき上がったら，杉の実をつめこんで，ためし打ちをしてみましょう。玉のつめ方は，すす玉のときと同じ要りょうです。おし棒を強くおすと，小さいわりには，大きな音がして玉が勢いよく飛び出します。さあ，杉の実をたくさん取ってふくろに入れ，お友達と打ち合ったり，まと当てをしたりして楽しく遊びましょう。

(4) はじき鉄ぽう

秋も終わりに近づき，柿の実が赤くじゅくすころになると，男の子たちは，自分の作った「はじき鉄ぽう」を持ちよって，家の庭や，生け垣(がき)の近くで，赤くうれた柿の実や，木の枝にとまっているすずめなどをねらい打ちして遊んだものです。このはじき鉄ぽうは，竹のバネを使うので，すす玉鉄ぽうよりも勢いよく，遠くまで玉が飛ぶので玉の当たるおもしろさは，またかくべつです。玉は小石や，どんぐりなどを使うので，ぜったい人に向けてはいけません。

では，はじき鉄ぽうの作り方を説明しましょう。

○　直けい２～３㎝，長さ40～50㎝ぐらいで，まん中と片方にふしのある「はちく竹」を用意します。

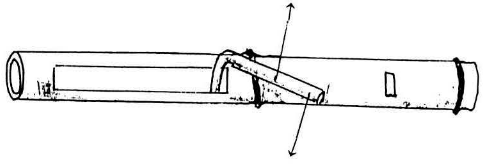
○　図１のように，長い切りこみと，短い切りこみを，のこと切り出し小刀を使って作ります。

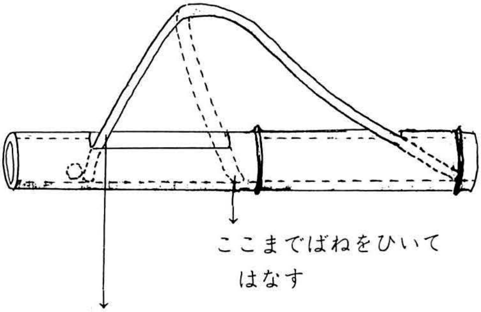
○　次に，ばねの竹を作ります。ばねの竹は，大きな竹を割って肉をけずりとってうすくします。そして，ばねになるように火にあぶりながら曲げて形をととのえます。

○　このばねの竹を，先ほど作った，切りこみにさしこみ，ねもとをくぎでとめて出来上がりです。

さあ，みなさんもよく飛ぶはじき鉄ぽうを作ってみませんか。

真上から見た図





遊び方は，すす玉鉄ぽうや，杉玉鉄ぽうのように，人とうち合うのでなく，初めにも言ったように，かきの木のてっぺんのじゅくしがきや，えだにとまっているすずめなどをめがけて，うち合いをきそうのです。玉が小石やどんぐりなどですから，人に当たらないように気をつけて遊ぶことが大切です。

力くらべ

むかしの農家の人は，機械の力を借りて，農作業をすることは，ほとんど行われなくて，人の力や牛・馬の力を借りて，農業に励(はげ)んでいました。とくに，青年たちの力にたよることが多かったので，青年たちは，自分たちで，力をつける努力をしました。その一つに力くらべがあります。

自分の力が強いほど，みんなに自慢(じまん)ができ，得意(とくい)顔でした。

夕方になると，青年たちは，会堂やお堂にだれいうとなく集まってきて，大きな石を，頭上にさし上げ，力自慢をしたものでした。石の重さは，いろいろちがっており，一つ持ち上げては，次の重さの石にちょう戦します。

力のある青年になると，60 kgくらいの重さの石をかるがると持ち上げていたようです。

青年たちの持ち上げる石は，青年たちが，河原に行って探(さが)してきました。みんなが交替(こうたい)して使うので，手のあぶらで黒びかりのする石もあったようです。

このカくらべの石を，「力石」といいます。

よどのかわせ（せどのかわせ いどのかわせ）

近所の子供が，おおぜい集まると，だれいうとなく，輪遊び を始めました。

農家の庭先や，お宮，お寺の境内には，いつもにぎやかな歌声が流れ，いかにも楽しそうでした。

この遊びは，親になったふたりが，手をつないで，水車の屋根をつくり，輪になった子供たちは，「よどのかわせ」を歌いながら，水車が回るように，その下をくぐっていきます。

よどのかわせの　みずぐるま
みずにせかれて　どんどこしょ

親になった二人が，手をつないで上下に振(ふ)ります。

他の子供たちは，一列になって，その下をくぐりぬけます。

子供たちは，うたが，終わりに近づくと，「キャー・キャー」とさわいで，速く走りまわります。

「どんどこしょ。」のとき，つかまらないように，走ってくぐりぬける遊びです。

この遊びは，組分けをするのにもつかわれました。

親は，つかまえた子供に，どちらの組へいきたいかたずねて行きたいといった組へ行かせます。

このようにして，二組をつくり，「花いちもんめ」や「通りゃんせ」などの遊びに移(うつ)って行きました。

とおりゃんせ

お宮や広場から，きれいな歌声が聞こえて来ます。数名の子供たちが，楽しそうに「とおりゃんせ」の歌を歌っている様子は，いかにものどかで気持ちのいいものです。

とおりゃんせ　とおりゃんせ
ここはどこの　ほそみちじゃ
てんじんさまの　ほそみちじゃ
ちょっと　とおしてくだしゃんせ
ごようのないもの　とおしゃせぬ
このこの　七つの　おいわいに
おふだを　おさめにまいります
いきはよいよい　かえりはこわい
こわいながらも　とおりゃんせ
とおりゃんせ

遊び方

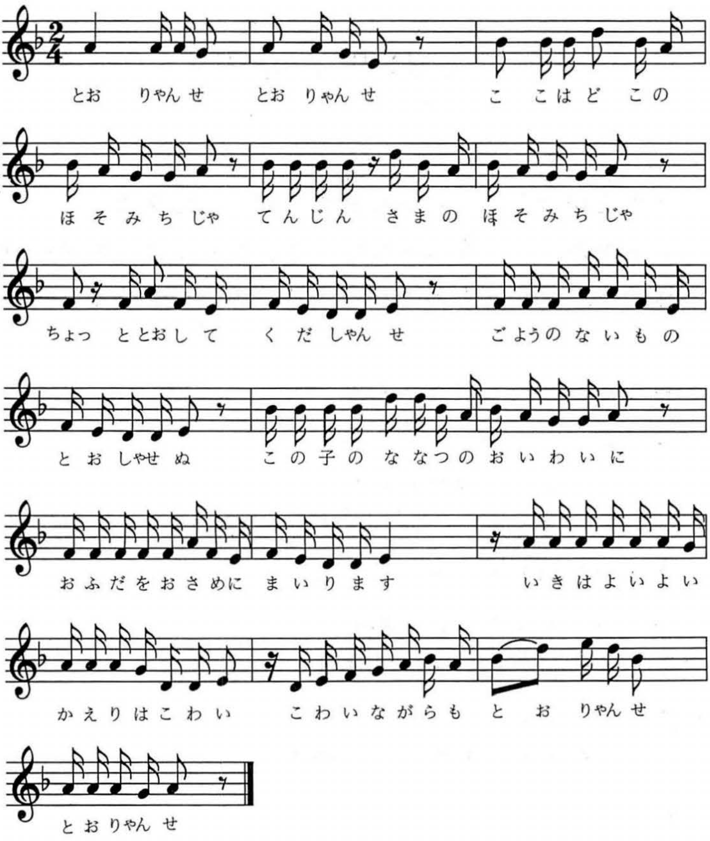
① ２人の子供がアーチを作り，他の子供たちは歌いながらアーチの下を通ります。

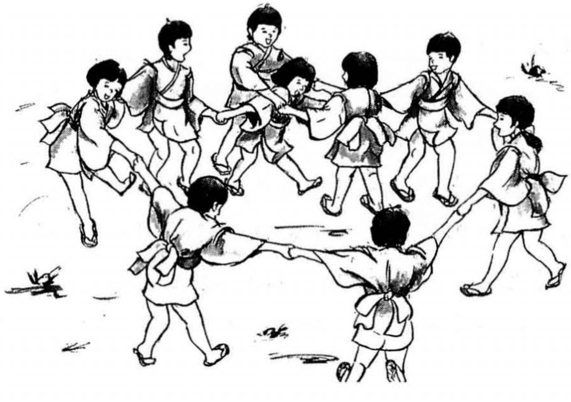
② 歌が終わるまで，何度もくぐりぬけます。

③ 歌の終わりの「とおりゃんせ」で，アーチにしている手を下ろして通っている子供をつかまえます。

④ 通っている子供は，つかまらないように走りぬけます。

通りゃんせ


とお りゃん せ とお りゃん せ こ こは ど この
ほ そ み ち じゃ て ん じ ん さ ま の ほ そ み ち じゃ
ちょっ と とおし て く だ しゃん せ ご ようの な い も の
と お しゃせ ぬ こ の 子 の な なつの お い わ い に
お ふ だ を お さ めに ま い り ま す い き は よ い よ い
か え り は こ わ い こ わ い な が ら も と お りゃん せ
と お りゃん せ



子とろ子とろ

親子と鬼(おに)に分かれて，歌いながら鬼ごっこのようにする遊びです。親や鬼になる子は，大きい子がなります。家へ帰ってする時は，上級生がなります。

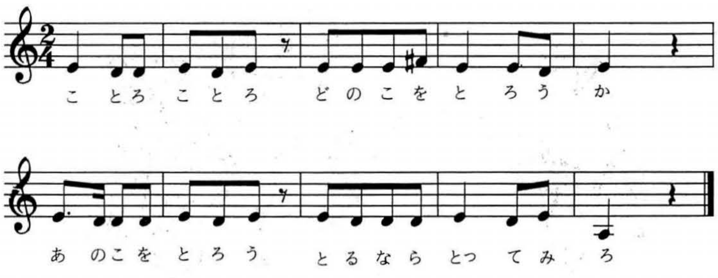
昔の子供は，着物を着ていました。それも自分の家でおったかすりの着物をよく着ていました。

次のような歌を歌いながら遊びました。

鬼「子とろ　子とろ
　　どの子をとろうか
　　あの子をとろう」

親「とるなら　とってみろ」

子とろ 子とろ



遊び方

① 鬼は，子供を追いかけて走ります。

② 親は，両手を広げて子供たちを守ります。

③ 子供は，両手で前の人の胴(どう)か帯をつかみ，鬼につかまらないように，つながったまま逃げます。

また，仲間が二つに分かれてする方法もあります。
これは，どちらの組にも親と子がいて，お互(たがい)に「子とろ子とろ」と言いながら，親は相手の子供をつかまえようとして走りまわります。

つかまった子供は，相手の子供の一員としてしっぽにつきます。そして，また次の勝負が始まります。

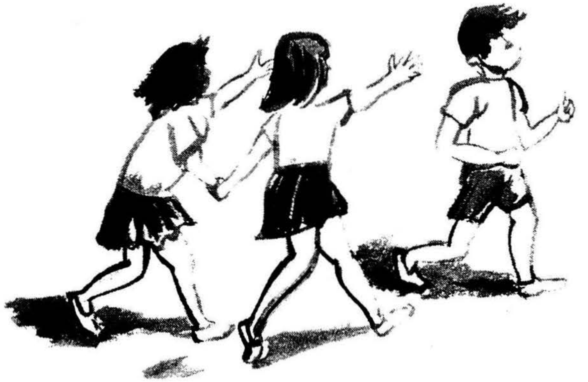
一番前の親同志は，あまり動かなくても後ろについている子供は走りまわります。特にしっぽについている子供は，大変しんどい役です。しかし，つかまらないように逃げるので子供たちは，キャアキャアと声をあげて逃げます。親も，しっぽについている子供をつかまえようとして一生けん命です。子供が後ろにつながっているので，思うように動けないのです。でも，大変楽しい遊びです。みなさんもやってみませんか。

かげふみ

みなさん，おにごっこはよく知っていますね。

かげふみも，そのおにごっこの一つなのです。おにが，にげる子の後を追い，かげをふむと，おにを交代します。

何もなくても簡単(かんたん)に楽しく遊ぶことのできる「かげふみ」今，すぐにできますよ。



このかげふみは，ずいぶん昔(むかし)から遊ばれています。大きい子も小さい子もいっしょになってよく遊びました。赤ん坊(ぼう)をおんぶして，子守りをしながら遊ぶ子もよく見られたそうです。

「はよ，家の人，帰って来んかな。」

「赤ん坊は，おなかがすいて泣(な)き出すし……。」

日が落ち，どこの家からも，ふろたきや食事のしたくのけむりが出始めるころになると，「かーえろ。」と，それぞれの家へ帰っていくのでした。

冬

あ　や　と　り

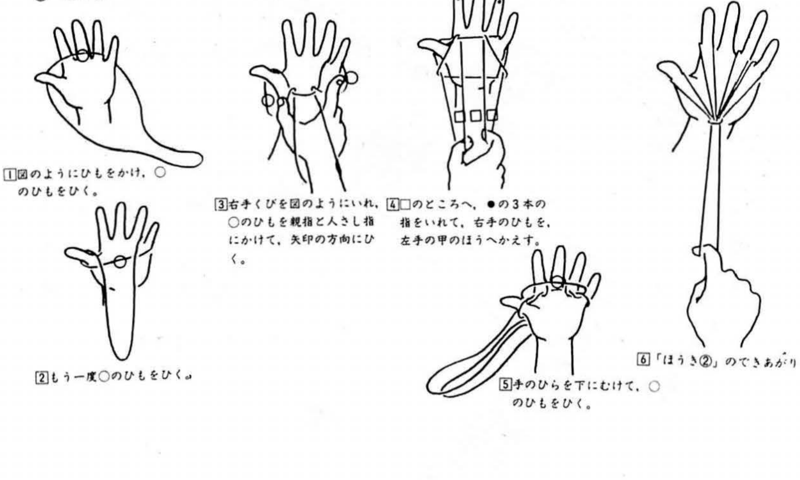
たった１本のひもが，手にかけられたとたん，まるで魔法(まほう)のように美しい形やかわいい動物にかわってしまう。あやとりはそんな楽しい遊びです。

お店で売っているおもちゃやゲームなどからみると，材料(ざいりょう)もひも１本ですからたいへん単純(たんじゅん)です。

あやとり遊びは一人でもできます。相手とかわるがわるひもを取り合う方法を二人あやとりといいます。

昔(むかし)は，雨が降って外で遊べない日や，冬の寒い日など子供たちはパチパチもえる囲炉裏(いろり)ばたで，おばあさんやおかあさんからひもの取り方を教わりながら，次々と変化(へんか)する形のおもしろ

① ほうき



1 図のようにひもをかけ，○のひもをひく。

2 もう一度○のひもをひく。

3 右手くびを図のようにいれ，○のひもを親指と人さし指にかけて，矢印の方向にひく。

4 □のところへ，●の3本の指をいれて，右手のひもを，左手の甲のほうへかえす。

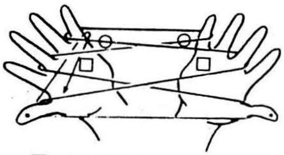
5 手のひらを下にむけて，○のひもをひく。

6 「ほうき②」のできあがり

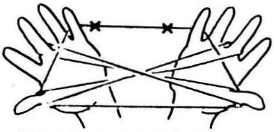
さにむちゅうになったものです。外は雪が降って寒くても家の中は暖かく，おばあちゃんやおかあさんたちとの楽しい会話もはずんだことでしょう。

あやとりは，日本では江戸時代に盛(さか)んになったといわれています。昔は草や木の繊維(せんい)などをひもにして遊びました。

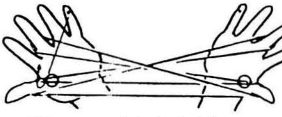
② 七つのダイヤモンド



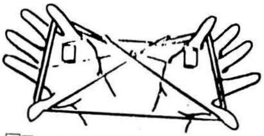
1□のところに親指を上からいれ，○のひもをとる。



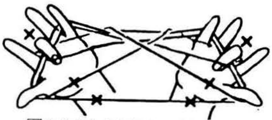
2×のひもを小指からはずす。



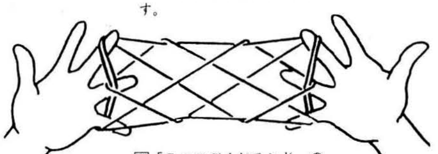
3○のひも2本を下から小指の背でとる。



4□のところに中指をいれる。



5両手をまえにひねってから親指の×のひもをまげた中指の上にすべりおとす。
中指の背のひもも中にはずす。



6「7つのダイヤモンド」のできあがり。

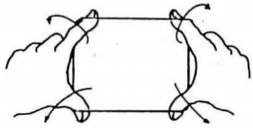
(1) いろいろな形

ひもで作るには，図①～③で示している，ほうき，七つのダイヤモンドのほかに，ちょう，カニ，二段ばしご，三段ばしご，松葉(まつば)，さかずき，やぐらなどかぞえきれないほどあります。

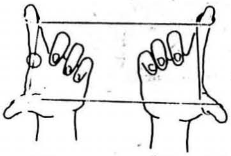
(2) ひもの取り方

あやとりに使うひもは，かたすぎないひもなら，なんでもけっこうです。ひもの長さは，こぶしに8回まきつけたくらいが

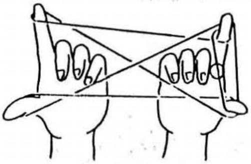
③　あさがお



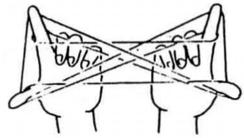
1 図のように親指と人さし指にひもをかけ，内がわに手くびをかえす。



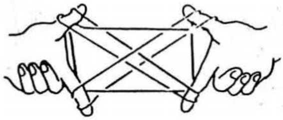
2 ○のひもを，右親指と人さし指で，一度ひねってとり，



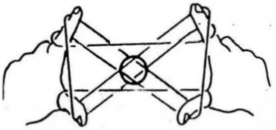
3 右の親指と人さし指にかける。つぎに○のひもを，



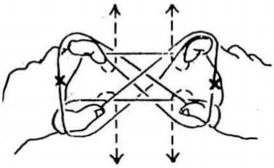
4 左親指と，人さし指で一度ひねってとる。



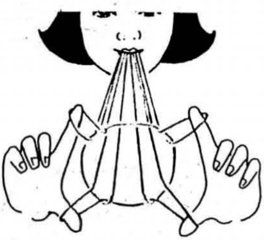
5 かたちがくずれぬように，うらがえして指をぬく。つぎにまた，指を下からいれなおす。



6 ○の４本のひもを口にくわえる。



7 ひもにかけた４本の指を外にかえしながらひく。



8 「あさがお」のできあがり。7の×のひもをゆっくりはずすときれいにできる。

ちょうどよい長さです。ひもの結び方は，ふつうでよいのですが，結び目があまり大きくならないようにしましょう。

ひもの取り方はふつう指を使いますが，形によっては③あさがおのように指と口をつかうこともあります。

さあ，みなさんも手がるにひも１本で遊べるあやとりをやってみませんか。

紙 鉄 ぽ う

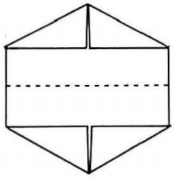
寒い冬の日は，外に出て遊べないことが多いものです。そんなとき，家の中で男の子も女の子も折り紙を作って楽しみます。男の子の折り紙は紙飛行機や紙でっぽうなど動くものや音の出るものが中心でした。今度は家の中でも楽しめる紙でっぽうの作り方をごしょうかいします。みなさんも作って威勢（いせい）よく鳴らしてみましょう。

作り方

○　材料の紙はざら紙より少し厚手の洋紙がよく，新聞の折り込み広告の中にちょうどよいものがあるから利用するといいですよ。折り方は下の図のようにします。

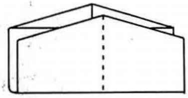
①

②



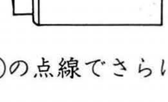
上・下の角を折る。

③



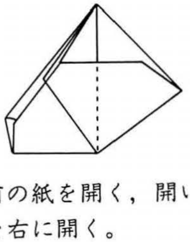
②の点線で中に折る。

④



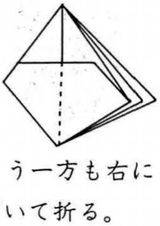
③の点線でさらに折る。

⑤



手前の紙を開く，開いた左の方を右に開く。

⑥



もう一方も右に開いて折る。

遊び方

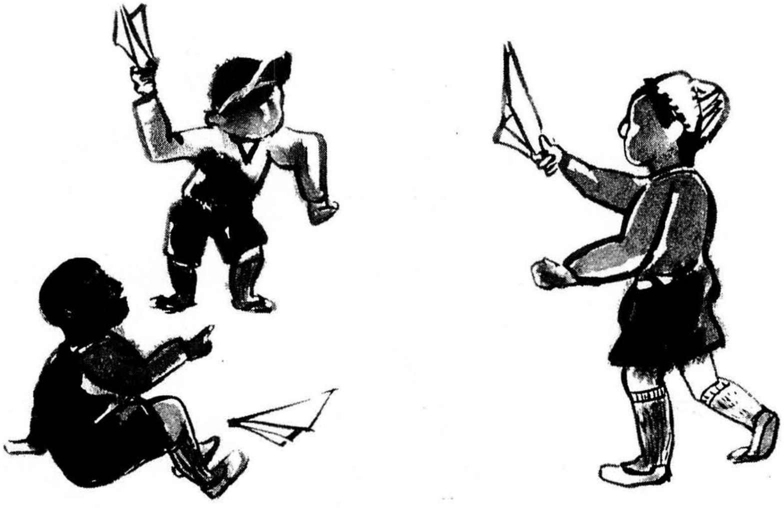
めいめいが紙でっぽうを持ち追いかけ合いをしながら，紙でっぽうを打ち鳴らして遊びます。

また，二人組をつくって，鳴らし合いをして，音の大小で勝ち負けを決めたりもします。

むかし，家のおじいさんが子どもたちのよりも，ずっと大きい紙でっぽうを作り，びっくりするほど大きな音を出して子どもたちを喜ばせてくれたこともありました。

⑦

残りの部分も右に折って出来上がり，この図の上を下に持って振ると音が出る。



いろはかるた

外は木枯(がら)しがピューピューふいています。こたつにばかりもぐりこんでいないで，部屋(へや)の中で楽しく遊んでみませんか。すごろく，福わらいなどいろいろありますが，これから「いろはかるた」をみんなでやってみましょう。お正月などに，家族や親せきの人たちと大勢でやると楽しいものですよ。

「いろはかるた」は，江戸時代の終わりころから始まった遊びで，お正月を中心に，主(おも)に冬の室内遊びとして大人も子供もよく遊んだといいます。いろは48文字を頭文字にし，ことわざなどを書いた札(ふだ)と，その内容を絵にした札(ふだ)と合計96枚をひと組にしたものです。

遊び方

読み手と札を取り合う競技者(きょうぎしゃ)（２人以上）で遊びます。読み手は読み札を読みあげ，競技者は読みあげられた絵札をすばやく見つけて取ればいいのです。

(1)　チラシ

畳の上に48枚の絵札をバラまいて，読みあげられた札を多く取った人を勝ちとします。

(2)　源平

ふた組にわかれ，24枚ずつを持ち札として，早く自分たちの札を取ってしまった方を勝ちとします。この場合，相手の方の札を取ってもかまいません。その時は，自分の方の札を１枚相手にわたします。そして，相手方の札をまちがって手をつけた時は，お手付きといって罰(ばつ)をうけ，札をもらうこと

になります。自分の方のお手付きは関係ありません。なお，お手付きの場合２枚とか３枚とか罰をきびしく決めてやることもできます。

次のものが「いろはかるた」のことばです。絵札は省略(しょうりゃく)します。自分で絵札を作ってみるのも楽しいと思います。

	京都かるた	江戸かるた
(い)	一寸(いっすん)先は闇(やみ)	犬も歩けば棒(ぼう)にあたる
(ろ)	論語(ろんご)読みの論語知らず	論より証拠(しょうこ)
(は)	針(はり)の穴(あな)から天のぞく	花より団(だん)子
(に)	二階(かい)から目薬	憎(にく)まれっ子世にはばかる
(ほ)	仏(ほとけ)の顔も三度	骨(ほね)折り損(そん)のくたびれもうけ
(へ)	へたの長談義(ながだんぎ)	屁(へ)をひって尻(しり)つぼめる
(と)	豆腐(とうふ)にかすがい	年寄りの冷や水
(ち)	地獄(ちごく)の沙汰(さた)も金しだい	ちりも積もれば山となる
(り)	綸言汗(りんげんあせ)のごとし	律義(りちぎ)者の子だくさん
(ぬ)	ぬかにくぎ	盗人(ぬすびと)の昼寝(ひるね)
(る)	類をもって集まる	瑠璃(るり)も玻璃(はり)も照らせば光る
(を)	鬼(おに)も十八	老いては子に従(したが)え
(わ)	笑う門には福来たる	割(わ)れ鍋(なべ)にとじぶた
(か)	かえるのつらに水	かったいのかさうらみ
(よ)	夜目遠目傘(かさ)のうち	よしのずいから天井(てんじょう)のぞく
(た)	立て板に水	旅は道づれ世は情(なさ)け
(れ)	連木(れんき)で腹を切る	良薬は口に苦し
(そ)	袖(そで)すり合うも他生の縁(えん)	惣領(そうりょう)の甚六(じんろく)

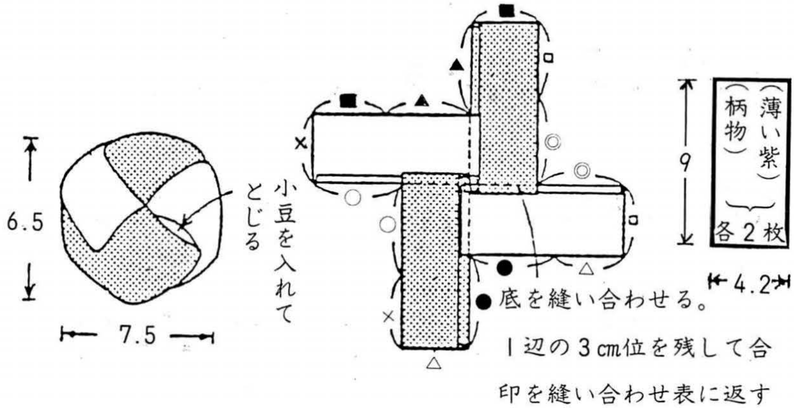
(つ)	月夜に釜(かま)をぬく	月夜に釜をぬく
(ね)	猫(ねこ)に小判(こばん)	念には念を入れ
(な)	なす時のえんま顔	泣(な)き面にハチ
(ら)	来年のことを言えば鬼が笑う	楽あれば苦あり
(む)	馬(うま)の耳に風	無理が通れば道理がひっこむ
(う)	氏より育ち	うそから出たまこと
(ゐ)	鰯(いわし)の頭も信心から	芋(いも)の煮(に)えたも御存(ぞんじ)知ない
(の)	のみといえば小槌(づち)	のどもとすぎれは熱さ忘るる
(お)	負うた子に教えられ浅瀬(せ)を渡る	鬼に金棒(かなぼう)
(く)	臭(くさ)い物にはハエがたかる	臭(くさ)い物にはふたをする
(や)	闇夜(やみよ)に鉄砲(てつぽう)	安物買いの銭(ぜに)失い
(ま)	蒔(ま)かぬ種は生えぬ	負けるが勝ち
(け)	下駄(げた)に焼味噌(みそ)	芸は身を助ける
(ふ)	武士は食わねど高楊(ようじ)枝	文はやりたし書く手はもたぬ
(こ)	これに懲(こ)りよ道才坊(どうさいぼう)	子は三界の首っかせ
(え)	縁(えん)の下の力持ち	えてに帆(ほ)を上げ
(て)	寺から里へ	亭主(ていしゅ)の好きな赤烏帽子(えぼし)
(あ)	足の下から鳥が立つ	頭かくして尻(しり)かくさず
(さ)	竿(さお)の先に鈴(すず)	三遍(べん)まわって煙草(たばこ)にしよ
(き)	義理(ぎり)と褌(ふんどし)かかねばならぬ	聞いて極楽(ごくらく)見て地獄(じごく)
(ゆ)	ゆうれいの浜風(はまかぜ)	油断(だん)大敵
(め)	目くらの垣(かき)のぞき	目の上のたんこぶ
(み)	身は身で通る裸(はだか)ん坊(ぼう)	身から出たさび

㋛	しわん坊の柿の種	知らぬが仏(ほとけ)
㋙	縁と月日	縁は異(い)なもの味なもの
㋪	ひょうたんから駒(こま)	貧乏(びんぼう)ひまなし
㋲	餅(もち)は餅(もち)屋	門前の小僧(こぞう)習わぬ経(きょう)よむ
㋝	聖(せい)は道によりて賢(かし)こし	背(せ)に腹はかえられぬ
㋜	雀(すずめ)百まで踊(おど)り忘(わす)れず	粋(すい)は身を食う
㊖	京に田舎(いなか)あり	京の夢大阪(さか)の夢

お手玉遊び

この遊びは，古く鎌倉時代から行われていたようですが，そのときうたわれた歌はあとからついたものといわれています。明治時代から大正時代にかけて女の子の遊びとして伝えられてきました。

お手玉は，小豆や麦や米やじゅず玉や砂や小石などを布で包んで袋にしたものです。お母さんやおばあさんが，子どもや孫たちのために作ってくれました。みなさんもお母さんに聞いて，自分で作って遊んでみませんか。



遊び方 (1)

お手玉を1個上に投げあげ，下にあるお手玉の中から1個を取り，落ちてくるお手玉といっしょにてのひらにのせます。全

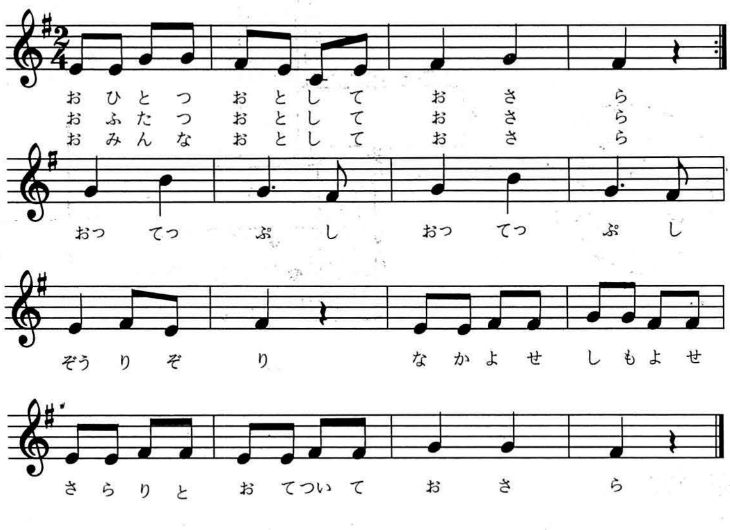
部なくなったら，今度は2個ずつ取っていきます。このようにだんだんとお手玉の数をふやしていきます。お手玉遊びは歌に合わせながら遊びます。

お手玉遊びのうたとしては，次のようなうたがあります。

おさら ①

おひとつおとしておさら
おふたつおとしておさら
おみんなおとしておさら
おってぶしおってぶし
ぞうりぞうり中よせ下よせ
さらりとお手ついておさら

おさら (1)



おさら ②

おみんなおとしておさら

おてじゃみおとしておさら

おはさみおとしておさら

おちりんこおとしておさら

おひだり　まいまいだり　だりだりおとしておさら

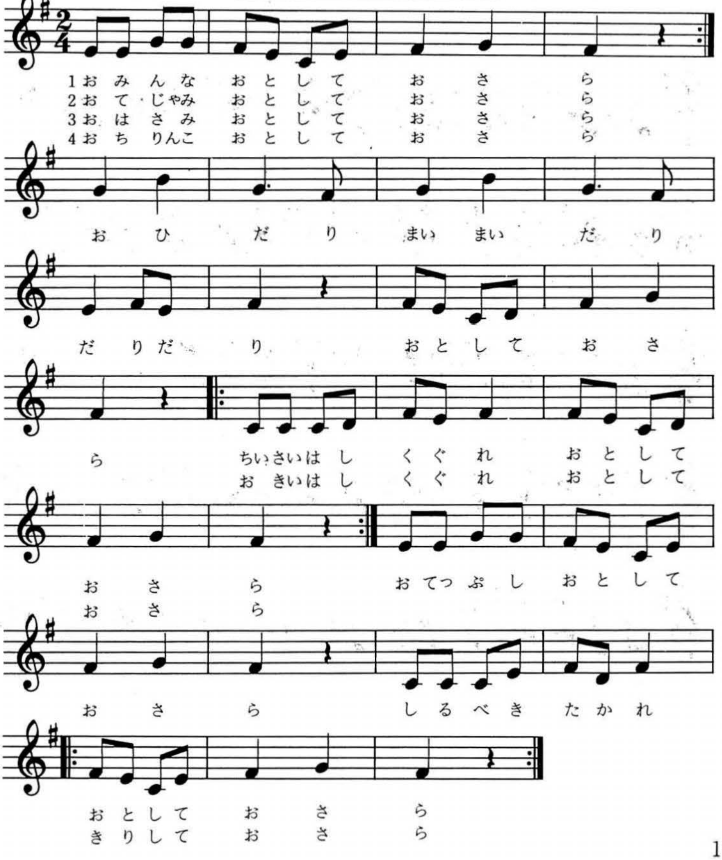
小さい橋くぐれおとしておさら

大きい橋くぐれおとしておさら

おてっぷしぷしおとしておさら

しるべきたかれおとしておさら　きりしておさら

おさら (2)

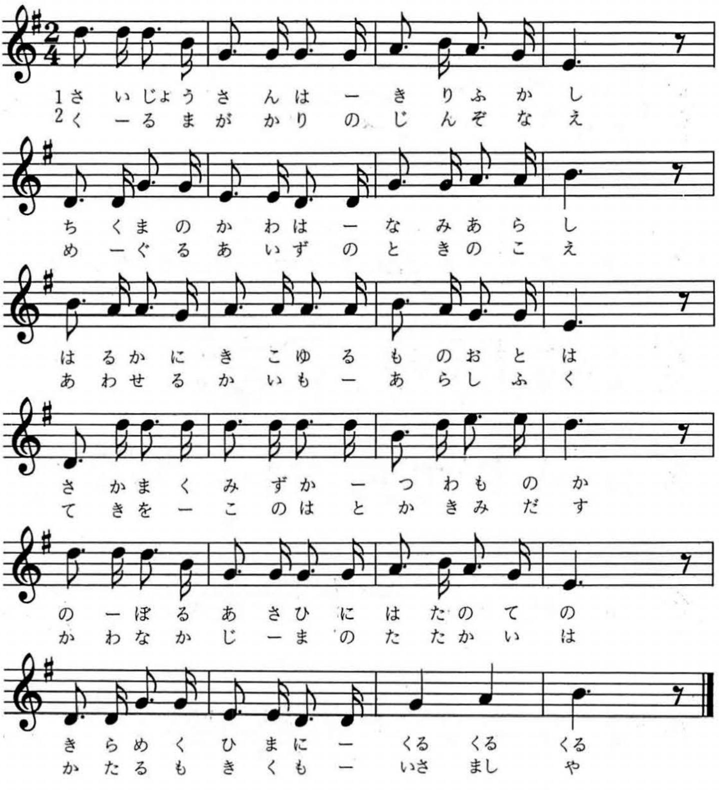


川中島

西条(じょう)山は霧(きり)ふかし
筑摩(ちくま)の河(かわ)はなみあらし
はるかにきこゆる物音は
逆巻(さかま)く水かつわものか
のぼる朝日に旗の手の
きらめくひまにくるくるくる

車がかりの陣(じん)ぞなえ
めぐるあいずのときの声
あわせるかいもあらし吹(ふ)く
敵を木の葉とかきみだす
川中島の戦は
かたるも聞くも勇ましや

川　中　島



遊び方　(2)

三つのお手玉を左手に1個，右手に2個持ち，右手の中の1個を上に投げ上げます。つぎに右手に残っている1個を上に投げあげます。そのあいだに，左手のお手玉を右手にうつし，あいた左手で，上から落ちてくるお手玉を受けます。これを，つぎつぎとくり返して行います。上手になると，四つ，五つとふやしていきます。

七つ子（七つ竹）

昔，重信町にはたくさんの竹が生えていました。男の子たちは，室内遊びによくこの竹を切ってきて「七つ子」という遊びをしては楽しんでいました。

数人の子供が友達の家に集まり，竹をのこぎりで切りそろえ，なたで割り，みんなで協力して遊び道具を作ったものです。

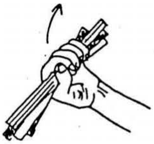
こんな遊び道具を作ることを通して，友達どうしが仲よしになり，助け合う気持ちが育っていきました。

竹の長さ20㎝ぐらい，竹の幅1.5㎝ぐらい，厚さ５㎜ぐらいに割り，竹の表面は青い皮をそのまま残し，裏面は赤か青にぬっておきます。

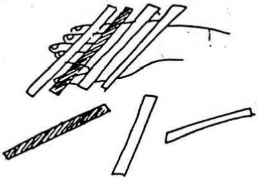
その竹の棒を７本作って遊んだので，「七つ子」または「七つ竹」といいます。

遊び方

①　７本の竹を全部握(にぎ)り，上へ軽く投げます。



②　手を返し，手の甲(こう)に乗せます。この時，竹の棒は裏(うら)と表が入り混(ま)じっています。



③　手を裏がえしたり，ずらしたりして台または床(ゆか)の上に並べていきます。並べた竹は，表なら表，裏なら裏と同じ面が上になるように落としていけば勝ちになります。

勝負がつくと，また初めから行い，何度も何度もくり返して楽しむことができます。

この遊びは，手の甲をいろいろに動かして，竹の棒の面を自分の思う通りに出すために，落とし方や手の甲からの離(はな)し方，そしていかに裏返すかの工夫がなされます。このことが遊びを楽しむこつになるのです。

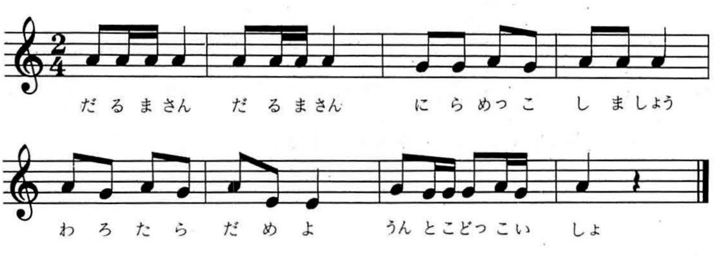
にらめっこ遊び (1)

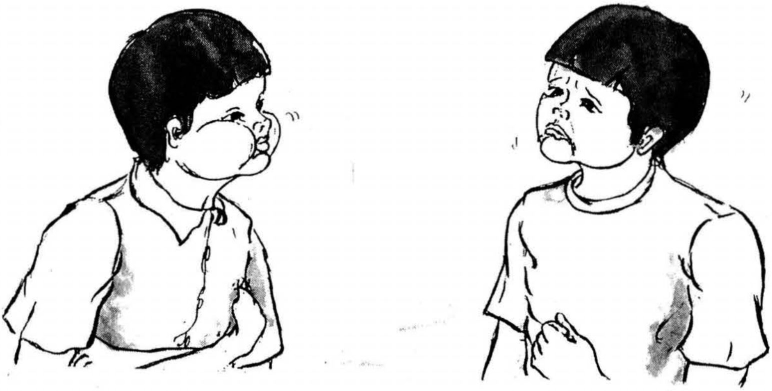
── だるまさん ──

手足のない，どっしりとしただるまさん。まゆが太くてにらみつけているようです。おき上がりこぼしが，右に左に体をゆっているように，ゆるやかなリズムに合わせて拍子をとりながら２人組でします。２人が向き合って「だるまさん，だるまさん。」とひざをたたきながら拍子をとって歌います。「うんとこどっこいしょ」で腕を組み，相手をにらみつけます。おもしろい変な顔をしてにらみ合います。先に笑った方が負けです。負けた子供は，今度こそおもしろい顔をして相手を笑わせてやろうとはり切って「だるまさん，だるまさん。」とまた歌いはじめます。

だるまさん　だるまさん
にらめっこしましょ
わろたら　だめよ
うんとこ　どっこいしょ

だるまさん





にらめっこは，２人組でよくしますが，子供が大勢の時は勝ち抜き勝負をします。

にらめっこには二通りの仕方があります。

① 相手の目を，じっとにらみます。相手が笑うまで，同じかっこうをして動かないで，じっとにらんでいます。

② 無言でさえあれば，いろいろな表情をして相手を笑わすようにエ夫してよいのです。例えば，ほっぺたをふくらませたり，顔をしかめたりして相手を笑わせるのです。

にらめっこ遊び　(2)

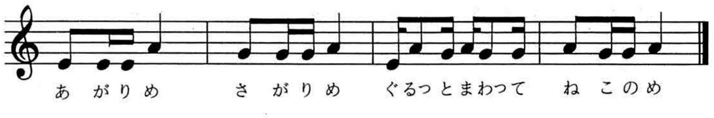
―あがりめさがりめ―

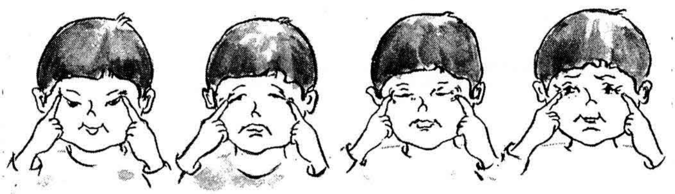
むかしの子供たちは，幼(おさな)い弟や妹のめんどうをよく見たものです。今，保育所や幼稚園(ようちえん)に行っているような幼い子供たちは，当時家にいました。ですから，学校から帰って来た子供たちは，当たり前のこととして弟たちとよく遊んでやりました。

「上がり目，下がり目……」と歌いながら，歌に合わせて動作をします。次々に変化していく妙(みょう)な顔。目がつり上がったり下がったり，目をまわしたり………そのたびにおもしろい顔になります。

小さい子供は，もうケタケタ笑っています。目じりのところにひとさし指を当ててするのです。「ぐるっとまわってねこの目」で，目じりをおさえたまま指で顔の方へ寄(よ)せます。すると丸い変な目になります。たいていの子供は，そんな変な顔を見ると吹き出して笑ってしまいます。何度も何度もくり返しては楽しんだものです。さあ，みなさんも歌いながらやってみませんか。

あがりめさがりめ





指　遊　び

日なたぼっこをしているときや雨が降って外で遊べないときは，室内で車座（ざ）になってみんなが指あそびをしました。指を折り曲げたり，にぎったりたたいたり，動作を早くしたり遅（おそ）くしたりして楽しく遊びます。みなさんも説明にしたがってやってみませんか。

指遊び (1)

説明　両手をひろげます。右と左の指を同時に動かします。

ひにふにダァ

「ひにふにダア」で，親指から順に折り曲げ順に中指まで曲げます。

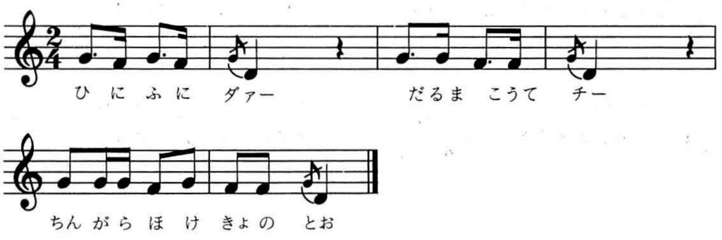
だるまこうてチー

「だるまこうてチー」で，薬指，小指を曲げ，小指を伸ばします。

ちんがらほけきょの十（とお）

「ちんがらほけきょの十」で薬指から親指まで伸ばします。

指　あ　そ　び



指遊び (2)

子供と子供とけんかして

親親が出てきて

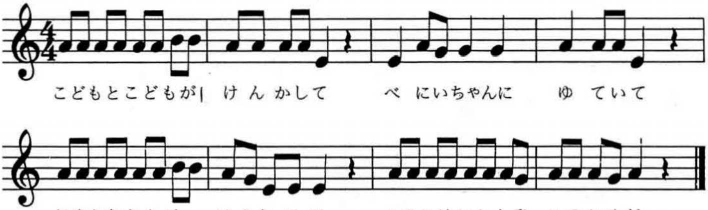
人さんのあいさつに
なかなか言うこときかんで

紅屋ですんだ

説明　両手のひらを合せ各指をくつける。
「子供と子供」(小指と小指を離したり合わせたりする。)
「親親」(親指と親指　〃　)
「人さん」(人さし指と人さし指　〃　)
「なかなか」(中指と中指　〃　)
「紅屋」(薬指と薬指　〃　)

また，この遊びでは次のようにもうたわれました。

子供と子供が



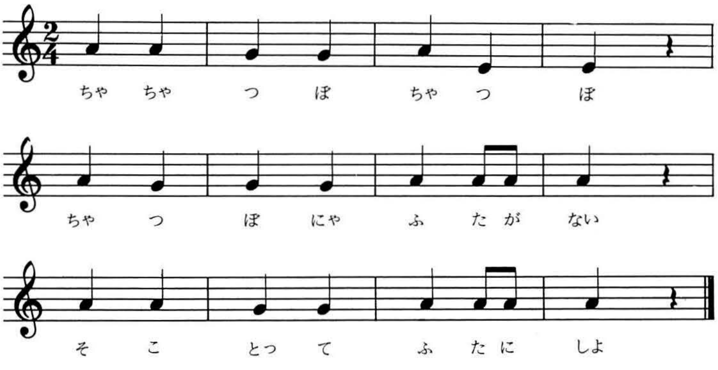
指遊び (3)

茶つぼ　茶つぼ
茶つぼのそ～こがない

ふ～たを取って
そこみしょう

説明　左手をにぎり，右手のひらを下に向け広げて左手のにぎった上に置き，「茶つぼ，茶つぼ」で上下と移動し，「そ～こ」のときには下，「ふ～た」のときには上にくるようにする。

ち　ゃ　つ　ぼ



手　遊　び　(1)
── おちゃらか ──

今のようにおもちゃの多くない時代の子供たちは，今よりももっと豊(ゆた)かな遊びをいろいろしていました。

これは，２人組で向かい合ってするジャンケン遊びです。

何かを始める前にして勝負を決めるジャンケンではなくて，ジャンケンをして楽しむのです。何度も何度もくり返し歌いながら，動作を入れて楽しみます。リズミカルなこの歌に合わせて，手をつないで振(ふ)ったり交さしたり，お互(たが)いの手を合わせてパチンとたたいたりして,「おちゃらかホイ」でジャンケンをします。ジャンケンで勝った者は，えらそうにバンザイをします。負けた者は，ペコンとおじぎをします。

遊んでいる者はもちろん，はたで見ている者までも楽しくなります。

次のような歌です。

せっせっせのよいよいよい
おちゃらか　おちゃらか
おちゃらか　ほい
おちゃらか　かったよ　おちゃらかほい
おちゃらか　まけたよ　おちゃらかほい
おちゃらか　あいこで　おちゃらかほい

おちゃらか

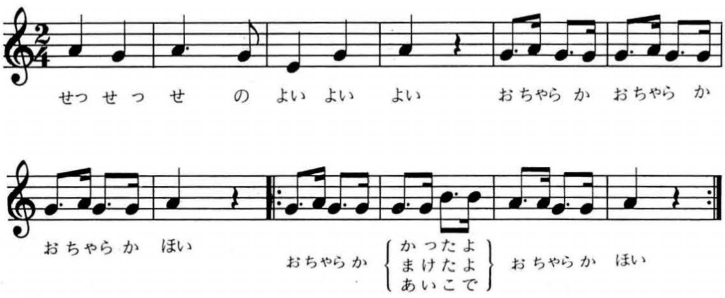


図 1

図 2

図 3

遊び方

① 2人で向き合い，両手を取って上下に4回振り「せっせっせ」をします。

② 「おちゃらか」の「おちゃ」で各自手拍子(てびょうし)を1回し（図1）「らか」で2人のてのひらを合わせます。（図2）

③ 「ほい」でジャンケンをします。

④ 勝った者は，歌いながらバンザイをします。（図3）

⑤ 負けた者は，歌いながらおじぎをします。（図3）

⑥ ジャンケンで勝負がつかなかった時は，お互(たが)いに両手を腰(こし)にとって，勝負がつくまでします。

今でもよくしていますね。やってみませんか。

手　遊　び (2)

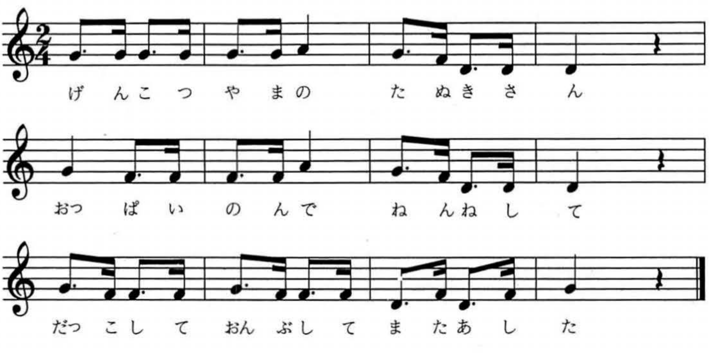
—げんこつ山—

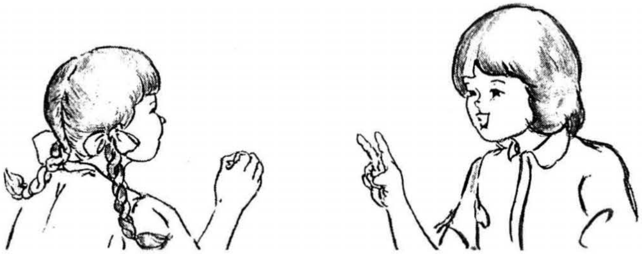
これもジャンケン遊びです。これは幼い子供たちが今でもよくしています。ちょこんと正座にすわりこんで，２人で向き合って歌いながらお互に同じ動作をします。歌詞のとおりに動作を入れてします。「またあした」のところだけお互いにジャンケンをします。勝っても負けてもまた，初めにもどって歌いながらくり返してします。

次のような歌です。

げんこつ山の　たぬきさん
おっぱいのんで　ねんねして
だっこして　おっぽして
またあした

げんこつ山





遊び方

お互いに向き合って，両手をグウにしてげんこつを作ります。片方（かたほう）のげんこつの上へもう片方のげんこつを重ねます。左手と右手を交ごに上下に重ねながら，「……たぬきさん」まで歌いながら４回くり返してします。

「おっぱいのんで」は，おっぱいを飲むかっこうをします。

「ねんねして」は，両手の手の平を合わせて，ほっぺたのところでねるかっこうを右，左とします。

「だっこして」は，両手をむねで交さしてだっこのまねをします。

「おっぽして」は，おっぽのまねをします。

「またあした」は，両手首をお互いに自分の前でグルグル回して，「またあした」の「た」でジャンケンをします。

あいこだったらまた，「またあした」といってくり返しジャンケンをします。

小さい子供が，向き合ってしているのは，ほほえましく，かわいいものです。

手 遊 び (3)

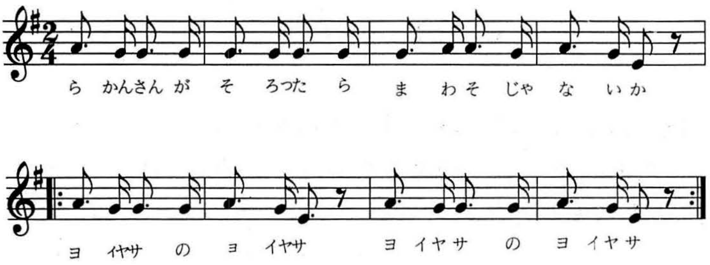
—らかんさん—

雨の日や遠足の時などに，大勢の子供たちが集まった時によくした遊びです。みんなで一つの輪を作り「らかんさん」を歌いながら，表情や動作をまね合う遊びです。

次のような歌です。

らかんさんが　そろたら
まわそじゃないか
ヨイヤサの　ヨイヤサ ⎫ 何度もくり返して歌いながら，
ヨイヤサの　ヨイヤサ ⎭ 動作を変えていきます。

らかんさん



ものまねの仕方には，二通りあります。

その1

輪の中の一人のしぐさを，一動作おくれて輪の全員がまねをします。

その2

全員が，それぞれ自分の好きなしぐさをし，「ヨイヤサで」右どなりの人のしぐさをまねし，次の「ヨイヤサ」でまた右どなりの人のしぐさをまねして，順々にしぐさが回っていくのです。

〈その2の遊び方〉

子供たちが，輪になって座(すわ)ります。

らかんさんが　そろたら
まわそじゃないか
（手をつなぎ上下にふります。）

ヨイヤサのヨイヤサ
（自分の好きなポーズをとります。）

ヨイヤサのヨイヤサ
（以後，右どなりの人のポーズをまねします。）

初めに歌全部を歌い，次からは，ヨイヤサのヨイヤサだけをくり返します。調子を速くしたり，おそくしたりして楽しみます。まねしそんじたら負けで，ばつとして何か芸をするか，みんなからシッペイを受けます。

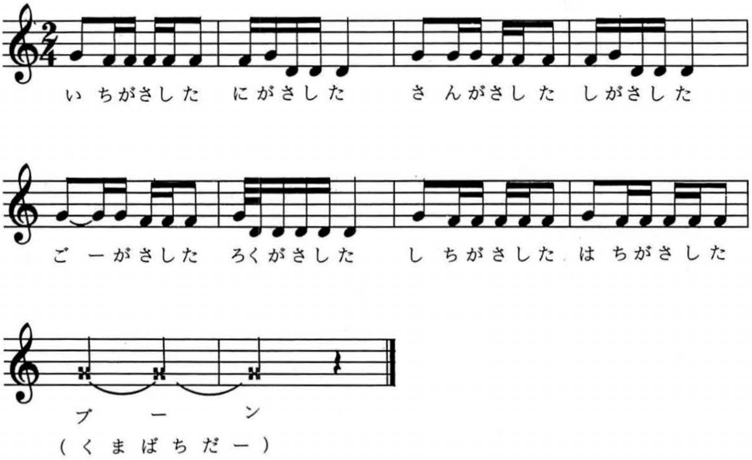
手　遊　び　(4)

—いちが刺(さ)した—

子供たちが，楽しく遊ぶ室内遊びに，「いちがさした」があります。この遊びは，自分の手を畳(たたみ)の上において，歌をうたいながら遊ぶ遊びです。

いちがさした　にがさした
さんがさした　しがさした
ごがさした　ろくがさした
しちがさした　はちがさした
くまんばち

いちがさした



一人の子供が，自分の手を畳(たたみ)の上におきます。次の子供が，「いーちがさした」と歌いながら，手の甲の部分を軽くつまみ

ます。

初めの子供は，下の手を抜いて，

「にーがさした」と歌いながら，つぎつぎつまんでいきます。

同じことをくりかえし，八がきたとき，

「はーちがさした」ブーン，といって，下の子供の手の甲を，皮をつまんであげます。そして

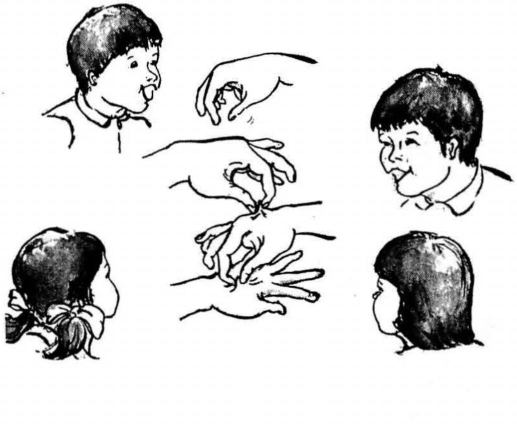
「くまんばち」といって，つつくまねをします。

これは，はちが一匹のときの遊びです。

はちが，何匹もおるときは，順にはちが交替し，歌にあわせて遊びます。

この遊びは，速くやらなければなりません。ぐずぐずしていたら，相手が，すぐに動作をやってしまいます。速いほど，おもしろい遊びです。

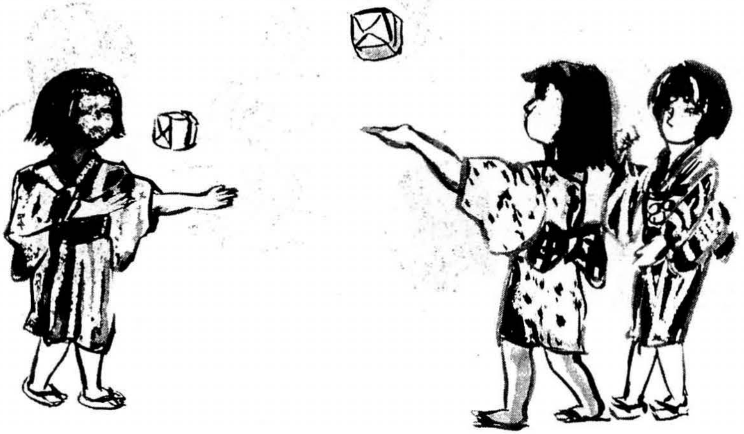
「いちが刺した」の遊びは，友だちどうしで，遊ぶ楽しさもありますが，親子でしたり，おじいさんとしたりするのもおもしろいし，大きな手の，お父さんが，小さな手の子に花をもたせて，上手に，まことらしく負けてやるのも，楽しくほほえましいものです。



紙　風　船

寒い冬がやって来ました。冬は日が短く，北風が吹(ふ)きすさび何となく気がめ入ってきそうです。元気な子供たちは，寒いからといって，家の中にじっとしていません。外へ遊びに行きます。でも春から秋のように，大勢の子供は集まりません。みんなはどうしているのかなあ。あちらこちらさがしてみます。

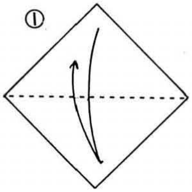
ひい，ふう，みい，と数える声。ぽん，ぽん，ぽんときれいなはずむ音。紙風船をつく音です。のき先や，庭で一人遊びをしていました。きれいな色の紙風船。大きいのや小さいのがあります。くるりくるりと回ったり，高く高く上ったり，低くても何回も続けていたり，高く上げたり低くしたり，あっちへ行ったり，こっちへ行ったり，とても楽しそうです。体がぬくもるのでしょうか。ほっぺたがまっかになっています。

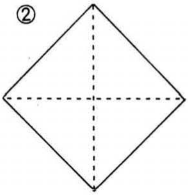


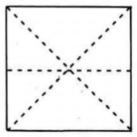
「よせて。」と思わず声をかけました。二人で向き合って遊びます。相手の人が，わざと遠くへ飛ばします。急いで走って行ってつき返します。下の方へ行きました。大丈夫かな。取りました。まるで今のバトミントンかテニスをしているようです。紙風船の空気が出てしまっても，負けまいとして続けます。ちょっと休憩して，紙風船をふくらましてみましょう。

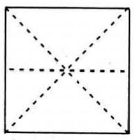
雨の日などに，こたつの中で紙風船を作りましょう。折り紙で作ると美しいのができます。もっと大きいのが作りたい時は，新聞紙などで作るといいですよ。作り方は簡単です。作った紙風船をふくらます時，子供たちの顔は夢と希望でいっぱいです。さあ，みなさんも，そのへんにある小さな紙で，夢のある紙風船を作ってみませんか。

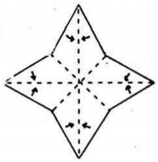
作り方

①

3角に折り，もとにもどす。むきをかえる。

②

3角に折りもとにもどす。うら返す。

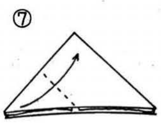
③

半分に折りもとにもどす。むきをかえる。

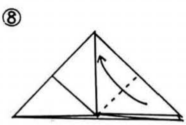
④

半分に折りもとにもどす。うら返す。

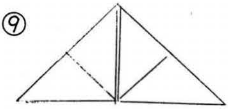
⑤

全体をつまんでまとめる。

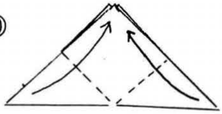
⑥

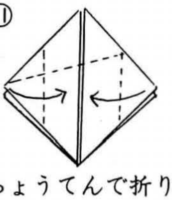
まとめたところ。むきをかえる。

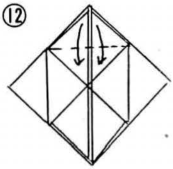
⑦

ちょうてんに合わせて折る。うら返す。

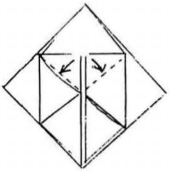
⑧

折り合わせる。

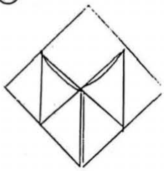
⑨

折れたところ。うら返す。

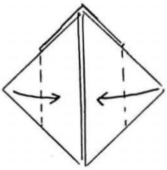
⑩

ちょうてんに合わせて折り合わせる。

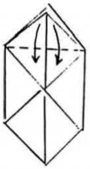
⑪

ちょうてんで折り合わせる。

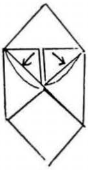
⑫

しかくに折る。

⑬

3角に折り，ふくろにさしこむ。

⑭

ふくろにさしこんだところうら返す。

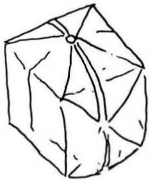
⑮

⑪と同じ

⑯

⑫と同じ

⑰

⑬と同じ

⑱

空気をふきこむ

⑲

〈でき上がり〉

遊び方

○　一人でてのひらや，手の甲（こう）で空中高く突（つ）き上げて，遊ぶことが多かったようです。その時，ひい，ふう，みいと数えながら，自分の記録を更新（こうしん）して楽しみました。

○　二人で向かい合って，突きやいこをして遊ぶこともありました。これは，先に落とした方が負けになります。だから，負けまいとして相手を困らせるような作戦を考え，高く上げたり，足元の方へやったりして勝負を競（きそ）いました。

紙　飛　行　機

山々の雪が消え，木枯(こが)らしが吹(ふ)かない季節になると，男の子たちは，思い思いに紙飛行機を作って飛ばし始めます。青く晴れ上がった空に白い紙飛行機が高く，低く乱舞します。一直線に遠くまで飛んでいくのもあれば，くるりと方向転かんして，もとの所にもどってくるのもあって楽しいものです。

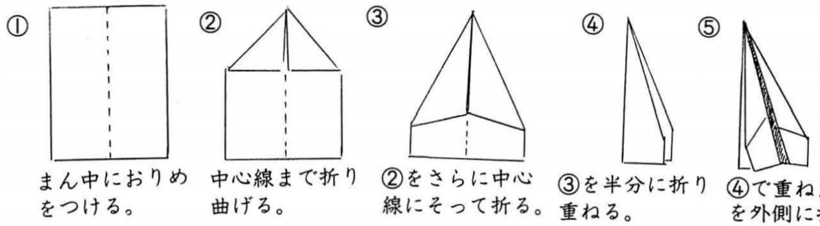
近ごろは，新聞の折り込み広告が毎日のように入っていて，紙飛行機づくりにはもってこいです。作り方はかんたんです。

下の3種類のうち，どれでも好きなのを作って，お友達と飛ばしやいこをしましょう。

作り方

材料の紙は上質紙ぐらいのかたさの広告紙がよい。

(1)　いちばんかんたんな紙飛行機の折り方



① まん中におりめをつける。

② 中心線まで折り曲げる。

③ ②をさらに中心線にそって折る。

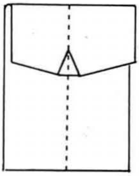
④ ③を半分に折り重ねる。

⑤ ④で重ねたはしを外側に折り，中心線まで両方とも折る。

(2) 少し形のこみ入った紙飛行機

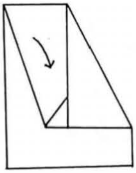
作り方のちがいは，①から②までは(1)と同じで③から後の折り方が変わります。

③



②を横半分より少し上で折り曲げ先を外側へ曲げる。

④

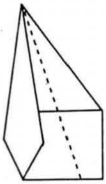


内側に両方とも折り曲げる。

⑤

④をさらに外側へ折る。

⑥

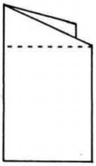


外側へ両方とも折る。

(3) 形の変った紙飛行機

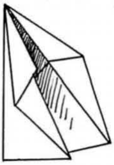
作り方の②までは，さきに作ったのと同じで，③から後の折り方が変わります。

③



半分に折り重ねる。

④



大体中心線にそって外へ折り曲げる。

遊び方

○　友達大ぜいで，お宮やお寺の境内（けいだい）など，広場にそれぞれ自分の作った紙飛行機を持ち寄って，飛ばしやいこをしました。飛んだ距離（きょり）で勝敗を競ったり，空中に浮いている時間を１，２，３，４……と数えて順位をつけたりしました。

○　じょうずに折れなくて，うまく飛ばない低学年の子には，高学年の子が折ってやったり，また，自分の作ったのを与えたりして，みんなが仲よく遊びましたよ。

また，時には近所のおじいさんに，めずらしい紙飛行機の作り方を教わったり，飛ばし方を手にとって教えてもらったりして，とても楽しく遊んだものでした。

凧あげうた

凧あげうたは，大空にどんどん凧があがっていくとき，あげている子供やその凧を見ている大勢の子供たちが，大声をはりあげてうたったものです。ほんとうに楽しいですね。

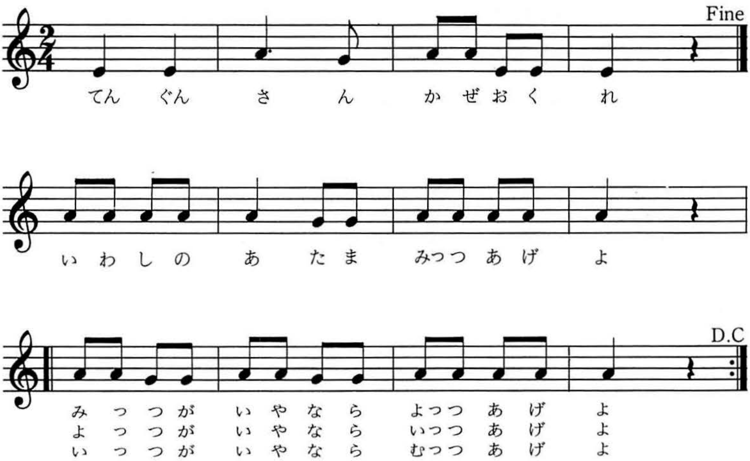
天狗さん風おくれ
いわしの頭三つあげよ
三つがいやなら四つあげよ
四つがいやなら五つあげよ
五ついやなら六つあげよ

天狗さん風おくれ

お多福三福
風が吹いたら四吹く

お多福こけても
鼻うたん

たこあげ



わらべうた

昔弁慶鎌倉殿(べんけいかまくらどの)が熊野(くまの)の道で日が暮(く)れて
松を一本切ってきて　とぼしてもとぼしてもとぼらないで
あんな小屋へ泊まろうか　こんな小屋へ泊まろうか
あんな小屋はあらむしろ　こんな小屋はあらだたみ
こんな小屋に泊まって朝起きてみたら
花のような女郎(じょろう)さんが
一杯(ばい)おあがり　じょうごさん
二杯(はい)おあがり　じょうごさん
三杯(ばい)ぶりにさかながないとてあがらんか　あがらんか
ここらのさかなは　白瓜(うり)・青瓜(うり)・赤大根(だいこん)

な わ と び

冬の寒い季節になると，家の庭や広場でわらべ歌を歌いながら，夢中(むちゅう)になってなわとび遊びをしている姿が目につきます。

このなわとびは，昔からずっと今日まで続いている遊びで，昔は特(とく)に女の子がよく遊びました。

冬の寒い時，女の子が顔を赤くし，髪(かみ)を大きく波うたせながら気持ちよさそうにとんだものです。

なわとび遊びは4通りあります。

① 自分で自由にとぶ遊び

② 2人が向き合ってとび，ひとりがなわをまわす遊び

③ 長なわを2人でまわして，その中で大勢でとぶ遊び

④ なわとびをしながら，目的地へ着く到着(とうちゃく)する遊び

どれも，とび方がいろいろあり，子供たちはそれを工夫し，時にはとびながらジャンケンをしたり，数を数えたり，歌を歌ったりして楽しく遊びました。

〈大さか〉—ひとりとび—

大さか　さかさか

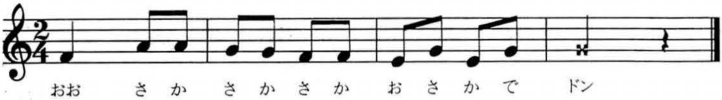
↓

（前1拍子とび）

おさかで　　ドン

（少しはやく）　（あやとび）

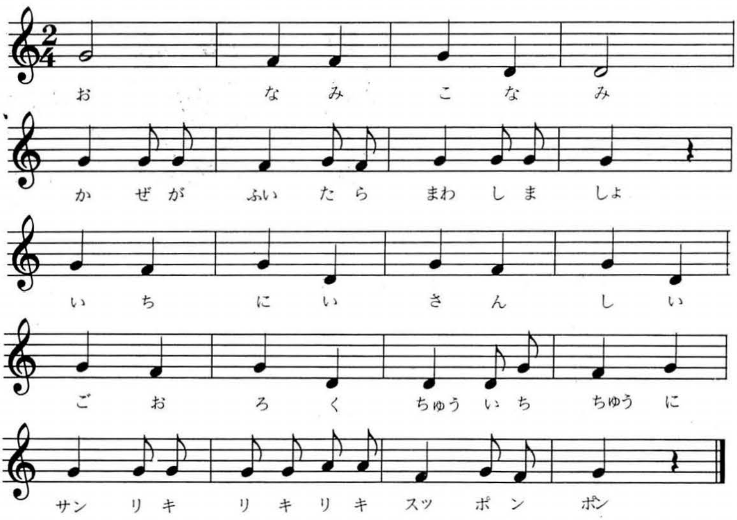
おおさか



〈大なみ　小なみ〉ー長なわとびー

大なみ　小なみ
風が吹いたら　まわしましょ
いち，に，さん
し，ご，ろく
高一，高二
サンリキリキリキ
スッポンポン

大なみ小なみ



① 歌を歌いながら
ひとりで入ります。

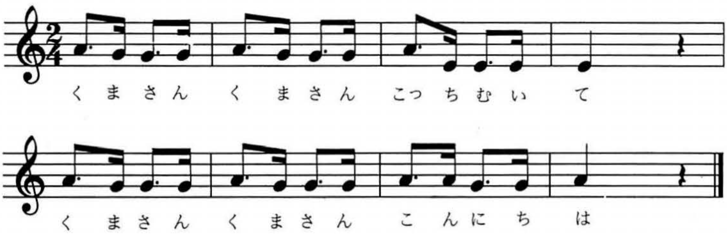
② 入った子供は,「スッポンポン」
の「ポン」のところで，なわをまた
ぎます。

〈くまさん〉—長なわとび—

二通りあります。
その１
くまさん　くまさん
こっち向いて
くまさん　くまさん
こんにちは

● 背を向けたままとびはじめます。
「こっち向いて」で，向き合います。
「こんにちは」で，ジャンケンをします。
負けた方の子供が出て，次の子供が入ります。

くまさんくまさん



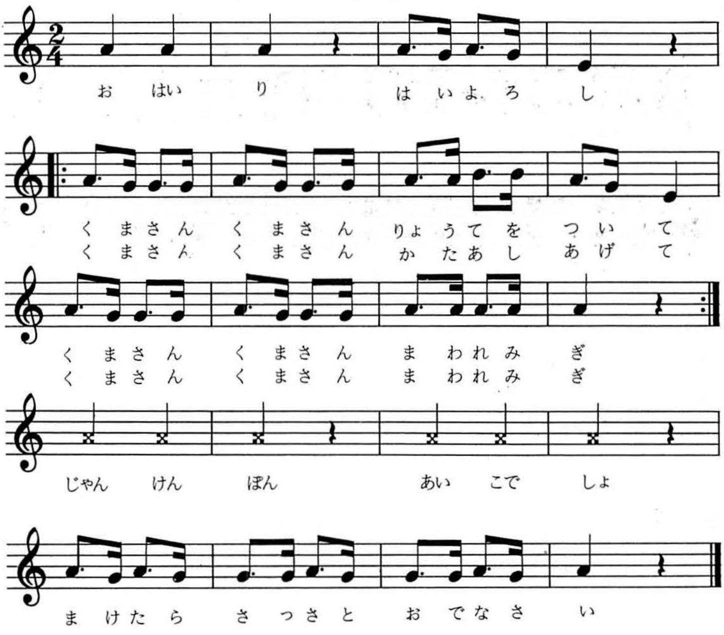
その2
おはいり　はいよろし

くまさん　くまさん　両手をついて
くまさん　くまさん　まわれ右
くまさん　くまさん　片足（かたあし）あげて
くまさん　くまさん　まわれ右

ジャンケンポン　あいこでしょ
まけたらさっさと　おでなさい

この「くまさん」は，歌の文句の通りに動作をしなければなりません。しそんじたら負けになります。

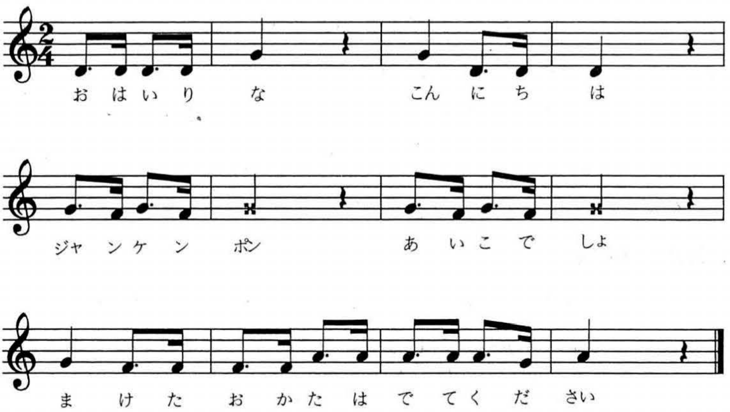
くまさんくまさん


おはいり　はいよろし
くまさん　くまさん　りょうてを　ついて
くまさん　くまさん　かたあし　あげて
くまさん　くまさん　まわれみぎ
くまさん　くまさん　まわれみぎ
じゃん　けん　ぽん　あいこで　しょ
まけたら　さっさと　おでなさい

〈おはいりな〉―長なわとび―

おはいりな　こんにちは
ジャンケンポ　　あいこでしょ
まけたおかたは　出てください

おはいりな



○　向き合って２人が入り，ジャンケンで負けたら出ます。そして，つぎの人が入ります。

羽　根　つ　き

指おり数えて待っていたお正月がやってきました。あなたの今年の目標はどんなことでしょう。もう決めましたか。一年の計は元旦にありと言われます。よい一年にしたいものですね。

むかしから，お正月の遊びはたくさんありました。羽根つきもそのひとつです。主(おも)に女の子がしました。着物のそでを左手でつまみ，ちょっぴり優しいしぐさで羽根をつく，ほほの赤い，元気な女の子がたくさんいました。

羽根つきの道具

① 羽子(こ)板　羽子(こ)板は，自分で作ってもいいのです。厚さ5㎜～1㎝くらいの板を形よく切り取り，自分の好きな絵でも描(えが)けば最高です。卓球のラケットと同じようなものです。

② 羽根　　羽根はお店に売っています。

遊び方

ふたりが向き合って，羽子板で羽根を空高くつき合います。交互(こうご)に羽根をつき，さきに落とした方が負けになります。負けた人には，顔に墨をぬったりしました。

大勢で輪になってつくのもいいですね。目標の回数を決めておいて，できるだけたくさんついてみましょう。

むかしは，羽根つき歌に合わせてついたものでした。歌は，おばあさんやお母さんに教えてもらうといいと思います。

羽根つき歌

ひいやふう　みいやよう　いつやむう
ななややあ　ここのやとう
とうからおいでたおいもやさん　おいもは一升(ます)いくらかね
24匁(もんめ)でございます　もちとまからぬか　しやからぽん
お前のことなら　まけたげよ　さあお出し　升(ます)お出し
ほうちょう　まな板出しかけて　頭を切るのが八つがしら
しっぽを切るのがとうないも
となりのおばさん　ちょっとおいで
おいもの煮(に)たので　お茶あげる　さあさあ｜かん　さあ｜かん

ひいやふう　みいやよう　いつやむう　ななややあ
ここのやとう　じゅういち　じゅうに
江戸のお竹が　みののかさの　しずくがおちるまで
　ひとろろ　ふたろろ　せいろでおさめた

まりつき遊び

女の子の遊びにまりつきがありました。まりは手づくりの手まりと，買いもとめたゴムまりがありました。もちろん手まりの方が古くから使われていたわけですが，これは木綿(もめん)糸をまいてつくったもので，棉(わた)がつくられるようになってからのことですからあまり昔(むかし)のことではありません。

(1) 手まりうた

手まりつきは，女の子が一年じゅうする遊びでした。明治時代の手まりは，中にわたを入れてかため，木綿糸でまいて，赤，黄，青などの色糸で，いろいろのもようにしあげた，美しいもので，それらは，祖母(そぼ)や母親の手づくりが多かったようです。これらの手まりは，えんがわや板の間でつきました。

手まりうたは，手まりをつきながらも歌いました。明治時代の手まりつきは，勝ち負けということは考えず，手まりつきを楽しんだようです。ゴムまりが使われるようになった大正時代からまりつき遊びは運動もはげしくなり，外の遊びになっていったようです。

① あんたがたどこさ

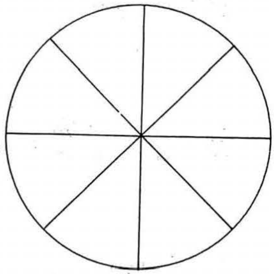
寒い北風のふく冬の間も，男の子は，外でたこ上げをしたり，こま回しをしたり，大勢集まればどう馬をしたりして，寒さに負けず遊んだものですが，女の子はお手玉をしたり，手まりをついたりして，家の中での遊びが多かったようです。

ようやくあたたかくなり始めると，みんな外に出て春の自然をからだ全体で味わいながら，長くなった春の日を遊びました。その中に次のような女の子の遊びがあります。

地面に，図のような線をひき，うたを歌います。

うた

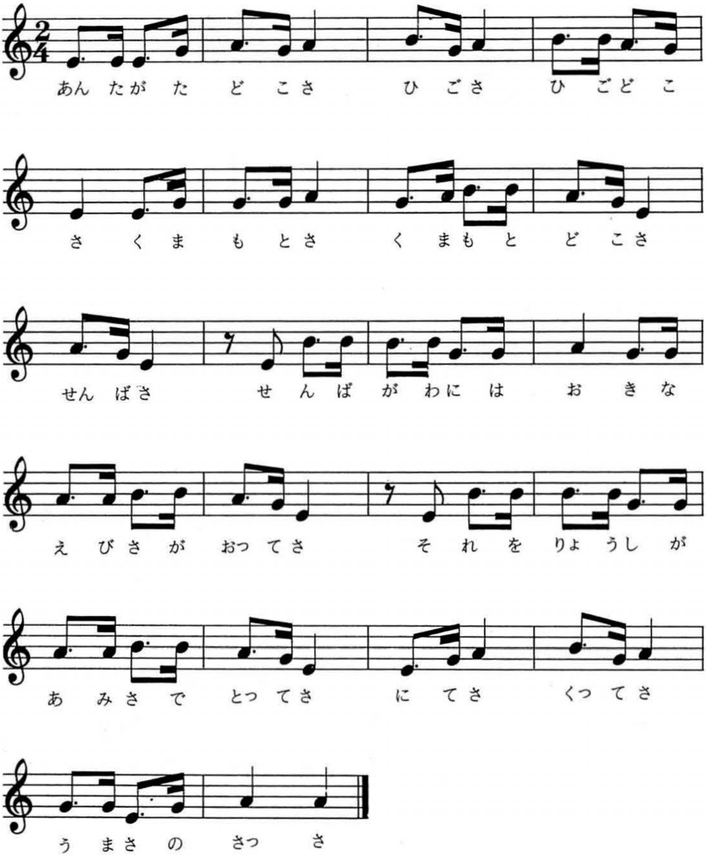
あんた方どこさ　肥後(ひご)さ
肥後(ひご)どこさ　熊本(くまもと)さ
熊本(くまもと)どこさ　せんばさ
せんば山には　たぬきがおってさ
それをりょうしが
鉄砲(てつぽう)でうつてさ　うってさ
煮(に)てさ　焼(や)いて　食(く)ってさ
うまさのさっさ



遊び方

歌をうたいながら，八つに区切(くぎ)られた中をうたに合わせて，一画(かく)ずつ歩きます。歩き方は円の中心にむく，進む方向にと二つがあります。歌詞の「さ」のところでは，一画さがらなければなりません。みんながいっしょに歌うときもあるし，別の子が輪の外で歌うときもあります。もし，うっかり線をふんだり，「さ」でさがらなかったりした人は，円の外に出ます。最後まで残った人の勝ちです。歌う速度を少し速くすると，なれてはいても，なかなかむずかしいものです。どうです。いっしょにやってみませんか。このうたは，まりつきうたとしても歌われました。

あんたがたどこさ


あん たが た ど こさ ひ ごさ ひ ごど こ
さ く ま も と さ く まも と ど こさ
せん ばさ せ ん ば が わに は お き な
え び さ が おつ てさ そ れ を りょ うし が
あ み さ で とつ てさ に てさ くつ てさ
う まさ の さつ さ

② お芳よしよし

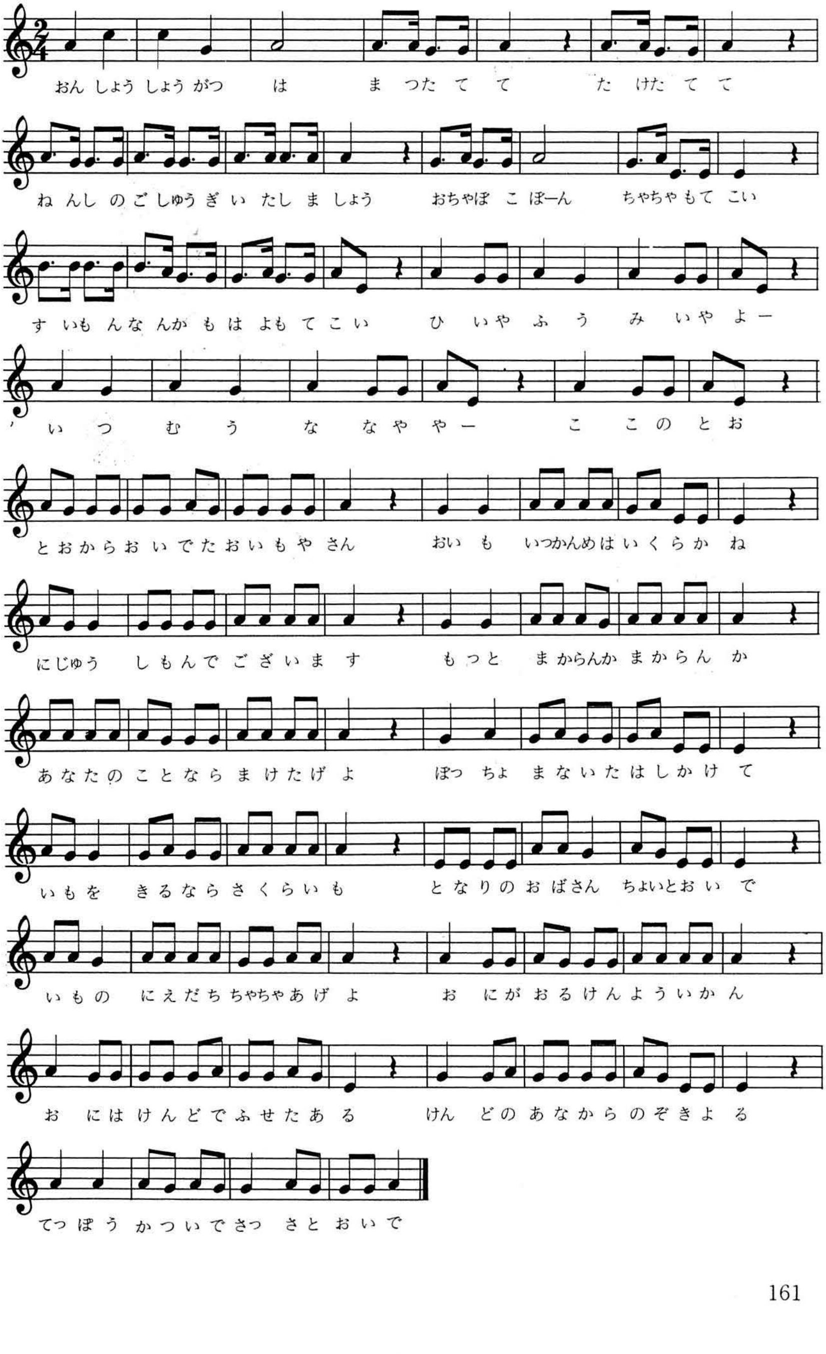
お芳よしよし吉田の生まれ
親にはなれて姉さんばァかり
奉公さそうか縁づきさそか
縁はいやいや奉公がしたい
奉公するならこの町おかん
おかん庄屋の機織り奉公
木綿二反につむぎを二反
それをその日に織りあげて
わたしは一度はいにたいものよ
いねる小道でかた紙ひろて
足でけり上げ手にとり見れば
下の一字はお万と書いて
お万来い来い　お色をつゥれェて
お色来たとてやる物なァいィか
筆や草紙やうたいの本や
まだもやりたし長崎かァもじ
入れていわしてあとより見ィれば
わげが三尺まきてがニィ尺
合わせて五尺で投げしィまァだ。

このうたは，江戸時代から歌われていたようです。たいへんのどかな，代表的な手まりうたです。

③　おんしょう正月

おんしょう　正月は
松(まつ)立てて　竹立てて
年始の　ごしゅうぎ　いたしましょう
おちゃぼこぼん　ちゃちゃもて来い
すいもんなんかも　はよもて来い
しいやふう　みいやよ
いつ　むう　なな　や
ここの　とお
とおからおいでた　おいもやさん
おいも　一かん目はいくらかね
二十四文(もん)でございます
もっとまからんか　まからんか
あなたのことなら　まけたげよ
ほっちょ　まないた
はしかけて
いもを切るなら　さくらいも
となりのおばさん　ちょいとおいで
いものにえだち　ちゃちゃあげよ
おにがおるけん　よういかん
おにはけんどで　ふせたある
けんどのあなから　のぞきよる
てっぽうかついで　さっさとおいで

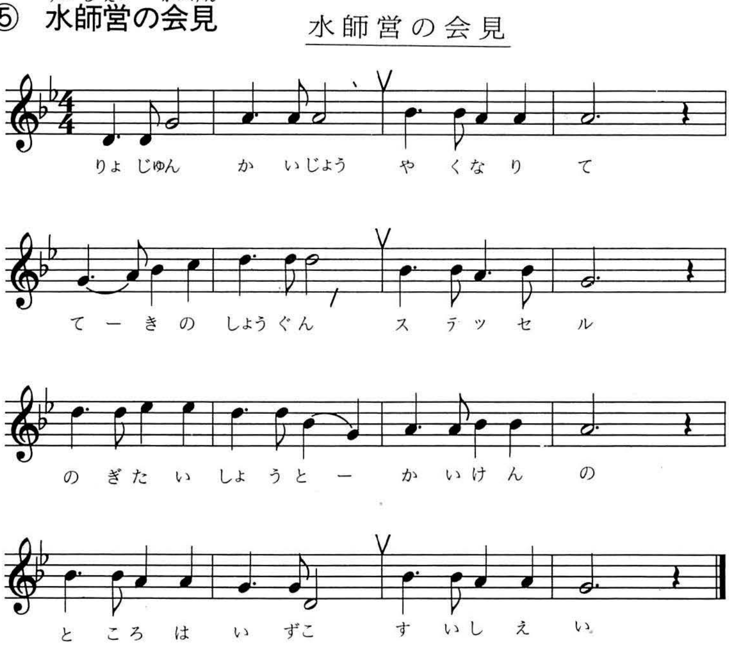
手まり歌


おん しょう しょう がつ は ま つた て て た けた て て
ね ん し の ご しゆう ぎ い たし ま しょう おちゃぽ こ ぽーん ちゃちゃ も て こい
す いも ん な んか も は よも て こ い ひ い や ふ う み い や よー
' い つ む う な な や やー こ こ の と お
と お か ら お い で た お い も や さん おい も いつかんめは い く ら か ね
にじゅう し も ん で ご ざ い ま す も っ と ま からんか ま か ら ん か
あ な た の こ と な ら ま け た げ よ ぼっ ちょ ま な い た は し か け て
い も を き る な ら さ く ら い も と な り の お ばさん ちょいとお い で
い も の に え だ ち ちゃちゃ あ げ よ お に が お る け ん よ う い か ん
お に は け ん ど で ふ せ た あ る けん ど の あ な か ら の ぞ き よ る
てっ ぽ う か つ い で さっ さ と お い で

④　ひとごろふたごろ

ひとごろ　ふたごろ　みごろ
よごろ　いつごろ　むごろ
ななごろ　やごろ　ここのごろ
とごろ
とんとんとんやのむすめに
　三つごができて
一人のこはお茶屋にやって
　茶のべべ着せて
一人のこはうるしやにやって
　うるしにまけて
一人のこは紙屋へやって
　紙一まいもろて
いろはと書いて県庁(けんちょう)へ出して
　県庁の道で
けんかができて　分け分け分けよ
　分けたら　じょうじゃ
こんやの　おばさん
　あいぐるまに　かせぐるまに
　上下たたいて　一もんめ

⑤ 水師営(すいしえい)の会見(かいけん)



旅順開城約成(りょじゅんかいじょうやくな)りて　敵(てき)の将軍(しょうぐん)ステツセル
乃木(のぎ)大将と会見(かいけん)の　所(ところ)はいずこ水師営

庭に一本(ひともと)なつめの木　弾丸(だんかん)あとも著(いちじる)く
くずれ残れる民屋(みんおく)に　今ぞ相見る二将軍

乃木大将はおごそかに　みめぐみ深き大君(おおきみ)の
大みことのり　伝(つた)うれば　かれかしこみて謝(しゃ)しまつる

昨日(きのお)の敵(てき)は今日の友　語る言葉もうちとけて
われはたたえつかの防備(ぼうび)　かれはたたえつわが武勇(ぶゆう)

かたち正して言い出でぬ「この方面の戦闘(せんとう)に
二子(にし)を失(うしな)いたまいつる　閣(かっ)下の心いかにぞ」と
「二人のわが子それぞれに　死所(ししょ)を得たるを喜べり
これぞ武門(ぶもん)の面目(めんぼく)」と　大将答え力あり

両将昼食(ひるげ)ともにして　なおと尽きせぬ物語
「われに愛する良馬あり　今日の記念に献(はん)ずべし」

「厚意(こうい)謝(しゃ)するに余りあり，軍のおきてに従(したが)いて
他日わが手に受領(じゅりょう)せば　長くいたわり養わん」
「さらば」と　あくしゅねんごろに　別れてゆくや右左
砲音(ほうおと)絶(た)えし砲台(ほうだい)に　ひらめき立てり日のみ旗

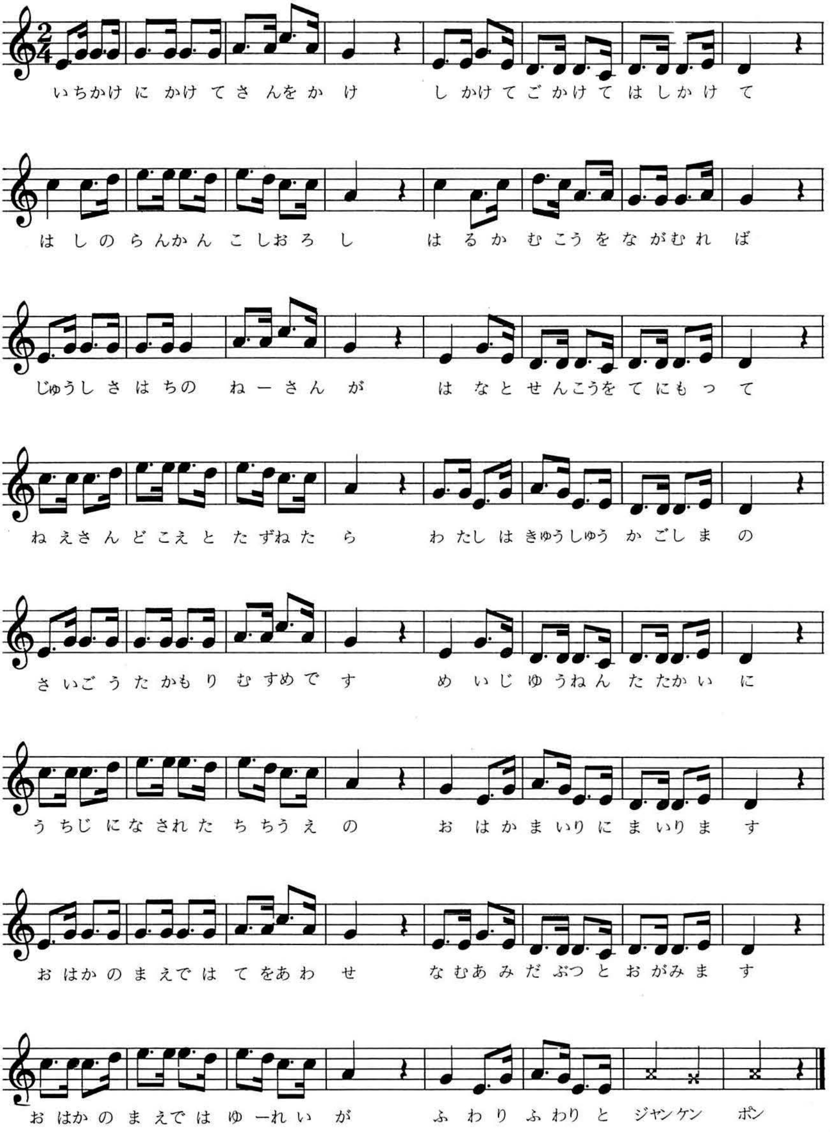
⑥　せんした　おんごろもち

せんした　おんごろもち
ふたふた　おんごろもち
三つでみさか　四つでよい子
五つでいっしょ　六つでむくどり
七つでななくさ　八つで山どり
九つことり
十にたつての　ひいふうみいよで
みやのあねさん
いとのがないとて　目すり鼻すり
いとのがたんばら　すけごろおそまに
おすけのみやげに　なんなにもろた
一にこうばこ　二におしろいばこ
三にさしぐし　四にしのめのまくら
とんとあげたるかたびら
肩(かた)とすそとの　わんめのおりめ
だんなのおりめ
だんのかわ　ござんのそうれば
しいそればしから　なまぞができてきて
ごばんこそでを　ながした
おじもながさず　おばもながさず
お寺のきっちゃんが　ながした
それやーこん　せんした　おんごろもち

⑦　一かけ二かけ

一かけ二かけ三かけて，四かけて五かけて　橋かけて
橋のらんかん　こしおろし　はァるか　向こうを　ながむれば
十七，八の姉さんがかた手にはな持ち　せんこ持ち
（はなとせんこを手に持って）
姉さんどこへとたずねたら　わたしは九州鹿児島（かごしま）の西郷隆盛（さいごうたかもり）むすめです
明治十年戦役に　うち死になされた父上のお墓（はか）参りに参ります
（戦死なされた）
お墓の前で手を合わせ　なむあみだぶつと拝（おが）みます
お墓の前では幽霊（ゆうれい）がふわりふわりとジャンケンポン

てまりうた


いちかけにかけてさんをかけ　しかけてごかけてはしかけて
はしのらんかんこしおろし　はるかむこうをながむれば
じゅうしさはちのねーさんが　はなとせんこうをてにもって
ねえさんどこえとたずねたら　わたしはきゅうしゅうかごしまの
さいごうたかもりむすめです　めいじゆうねんたたかいに
うちじになされたちちうえの　おはかまいりにまいります
おはかのまえではてをあわせ　なむあみだぶつとおがみます
おはかのまえではゆーれいが　ふわりふわりとジャンケンポン

⑵ まりつきうた

女の子は，よくまりつきをしました。遊びに行くときは，まりをふところにして家を出ました。そのころのまりつきは，えんがわや茶の間などの板の床（ゆか）で，ひざを立ててすわり，向かいあって仲（なか）よく遊びました。

次の①②のうたなどにあわせてまりをつくときは，てのひらでつきながら，うたの節の切れ目になると，まりを手の甲（こう）にのせ，次の節に移（うつ）り，また，てのひらでつきつづける，といったようなつき方でした。うたが終わると，また続けて歌いはじめます。

手まりうたは，どれも歌詞がおもしろくて，節の調子もよくそのため地域（いき）で同じようなうたが歌われました。

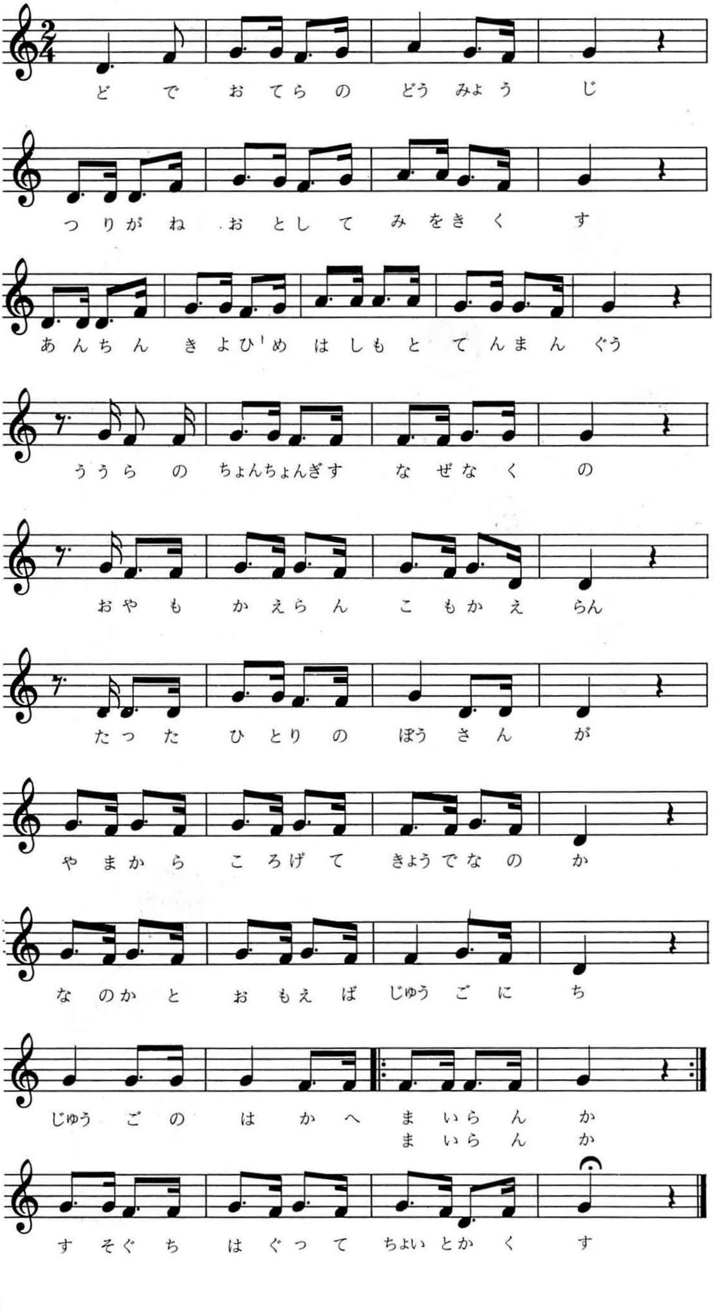
① どうでお寺のどうみょうじ

どうでお寺のどうみようじ　つりがね落として身をかくす
あんちん清姫（きよひで）　はしもと天満宮
裏（えら）のちょんちょんぎす　なぜ鳴くの
親も帰らん　子も帰らん
たった一人の坊（ぼう）さんが　山からころげて　今日七日（なぬか）
七日と思えば　十五日　十五の墓（はか）へ参らんか
すそ口はぐって　ちょいと　かァくゥす

遊び方

「すそ口はぐってちょいとかくす」のところで，地面からはねかえる手まりを，足をひろげ，着物のすそからうまくくぐらせて，着物の中にかくすようにしました。着物でなく，スカートをはくようになると，片足を前に上げてその下をくぐらせたり，スカートの中にかくしたりするようになり，その上手さをきょうそうするようになりました。このころはもちろんゴムのボールが用いられ，室内の遊びから，外の遊びに移ってきました。

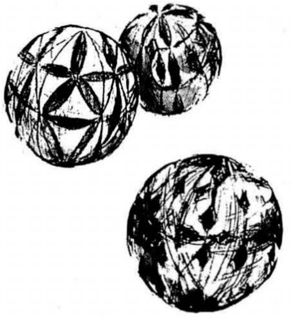
まりつきうた



ど で お て ら の どう みよ う じ
つ りが ね お と し て み を き く す
あ ん ち ん き よ ひ め は し も と て ん ま ん ぐう
う う ら の ちょんちょんぎす な ぜ な く の
お や も か え ら ん こ も か え らん
た っ た ひ と り の ぼう さ ん が
や ま か ら こ ろ げ て きょう で な の か
な のか と お も え ば じゅう ご に ち
じゅう ご の は か へ ま い ら ん か
ま い ら ん か
す そ ぐ ち は ぐ っ て ちょい と か く す

②　一裂談判（いちれつだんぱん）

一れつだんぱん　はれつして
日露（にちろ）戦争と　なりにけり
さっさと　にげるはロシアの兵
死ぬまで　つくすは日本の兵
五万の兵と戦こうて
六人残して　みな殺し
六月八日の戦いに
ハルピンまでもせめのぼり
クロパトキンの首をとり
東郷大将（とうごうたいしょう）　バンザンザイ



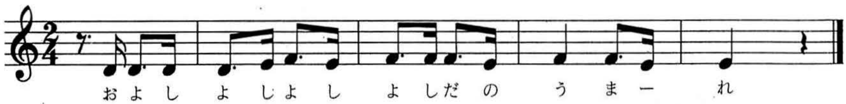
遊び方

気をつけてこのうたの歌詞（かし）を見なおしてみてください。一二三四五……十と，数えうたになっているでしょう。そのように数をあわせるため，本当の話とはちがっています。

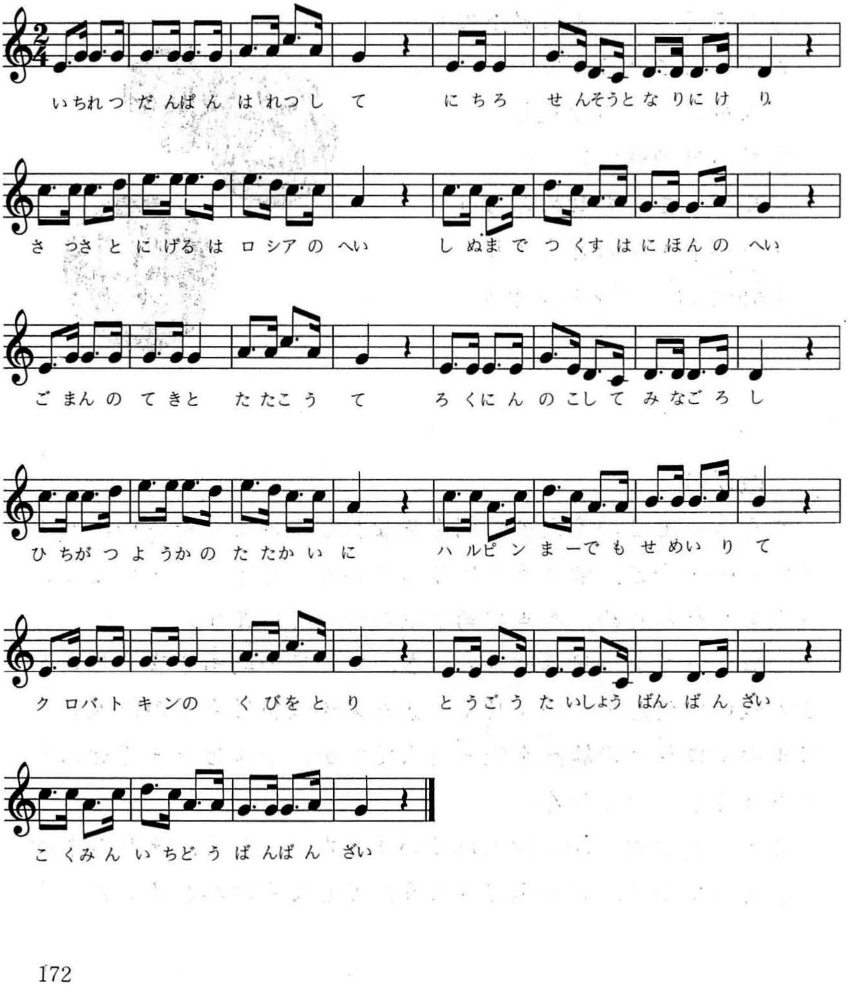
クロパトキンは日露戦争のとき，ロシアの総司令官（そうしれいかん）でしたが，この戦いで死んではいません。また東郷（とうごう）大将は海軍の軍人で，日本海でロシアの艦隊（かんたい）を破（やぶ）った人ですが，ハルピンまでせめそんだりはしていません。

このうたは古くから歌われていました。そして，まりつきのときだけでなく，お手玉とりのうたとしても歌われました。

まりつきうた



いちれつだんぱん



亥の子

亥の子は，旧暦の10月，亥の日を祝う行事です。子供たちの年中行事の一つとして，どの地方でも盛んに行われていました。

子供を喜ばせた，この亥の子の行事も，次第にうすれ，終戦後は，行われない地域もできました。

しかし，最近は，この行事が復活し，ところによっては，地区の人たちの世話で楽しい亥の子の行事が行われ，子供たちを楽しませるようになりました。

亥の日は，10月に二度あることがあり，また三度あることもあります。

二度ある年には，一番亥の子を，三度ある年には，一番亥の子か，二番亥の子を祝うことが多いようです。

亥の子の神は，田んぼの神様だと信じられ，この月の日に，神様は，田んぼから，家へ帰られるのだそうです。

その神様を迎えるために餅をつくのが，この地域の習慣になっています。

また，収穫後の祝いとして，農村で行われる，重要な年中行事でもありますし，男の子にとっては，年間を

通じて，一番盛(さか)んな，そして一番楽しい集団的遊びです。

むかしは，男の子のものでしたが，今は女の子も男子といっしょに，亥の子の歌を，元気よく歌い各家をまわっています。

子供たちの一団が，各家庭を訪(おとず)れます。

「こんばんは，おいのこさんをつかしてくれますか。」

「ぼくら，ようきてくれたのう。元気よくついてよ。」

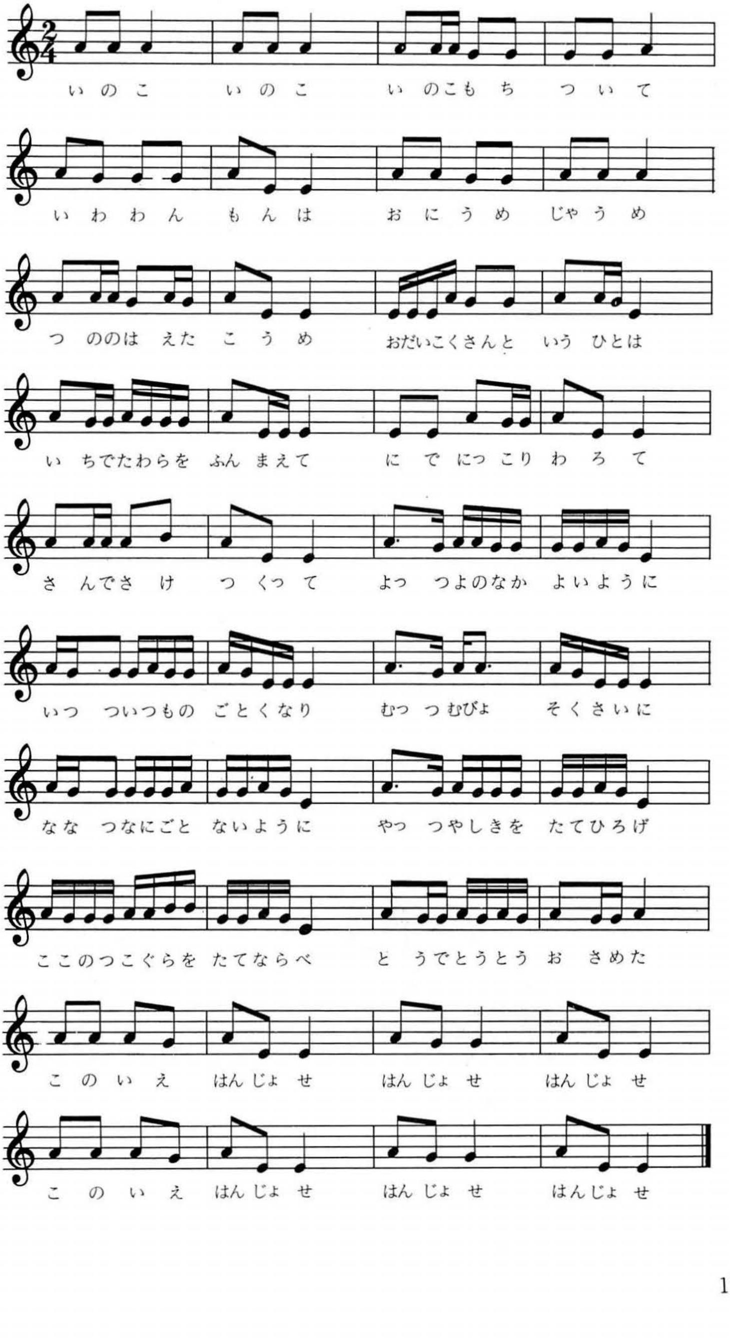
子供はにこにこして，元気な声で，「さあ元気よくつこうぜ。」といい，リーダーの声で，亥の子をつき始めます。

いの子　いの子　いの子餅(もち)ついて
祝わん者は　おにんめ　じゃんめ
つののはえたこんめ
おいの子さんという人は
　一に　たわらふまえて
　二で　にっこり笑ろうて
　三で　酒をつくって
　四つ　世の中よいように
　五つ　いつものごとくなり
　六つ　無病息災(むびょうそくさい)に
　七つ　何ごと無いように
　八つ　屋敷(やしき)を建て広げ
　九つ　小蔵(こぐら)を建て並べ
　十で　とうとう治まった
この家　繁盛(はんじょう)せい，繁盛せい
もうひとつ　おまけに　繁盛せい

〈わら亥の子〉

元気な，亥の子歌を聞いて，家々では，子供たちにご祝儀(しゅうぎ)（お金）を出してくれます。

いの子


いのこ　いのこ　いのこもち　ついて
いわわん　もんは　おにうめ　じゃうめ
つののはえたこうめ　おだいこくさんと　いうひとは
いちでたわらを　ふんまえて　にでにっこり　わろて
さんでさけつくって　よっつよのなか　よいように
いつついつもの　ごとくなり　むっつむびょ　そくさいに
ななつなにごと　ないように　やっつやしきを　たてひろげ
ここのつこぐらを　たてならべ　とうでとうとう　おさめた
このいえ　はんじょせ　はんじょせ　はんじょせ
このいえ　はんじょせ　はんじょせ　はんじょせ

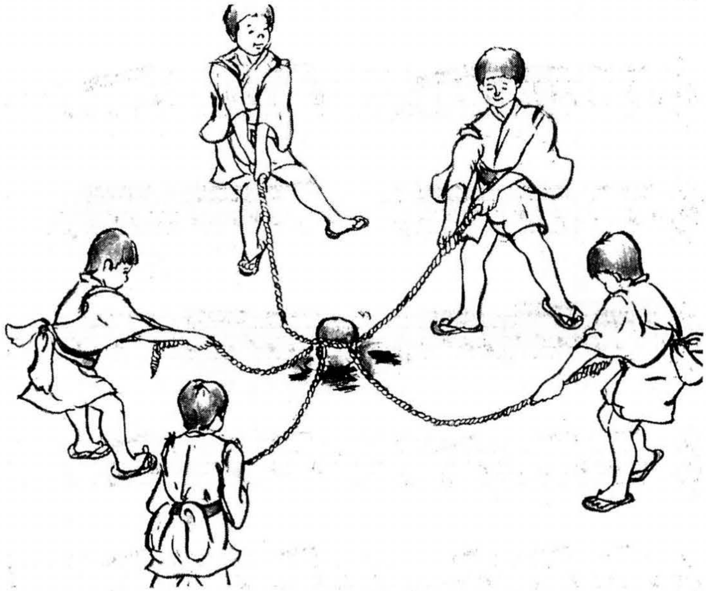
重信の亥(い)の子は，わら亥の子です。

子供たちにとっては，亥の子をついてまわる楽しさとともに，お金やおかしを分けてもらう楽しさがありました。

最近では，父母が世話をして亥の子をつき，つき終わって公民館へ帰れば，お母さんが作ってくれた，うどんやおにぎりをみんなでたべて帰る地域もあります。家々をまわって，いただいたお金は，子供会行事の費用などに使われています。

亥の子をついて終われば，わら亥の子は，庭の柿の木につるします。柿(かき)が来年もよくなるようにと，子供たちの願いが込められて，わら亥の子は，寒い寒い冬を柿の木ですごします。

なお，ところによっては，「石亥の子」をつく地域もあります。



〈石亥の子〉

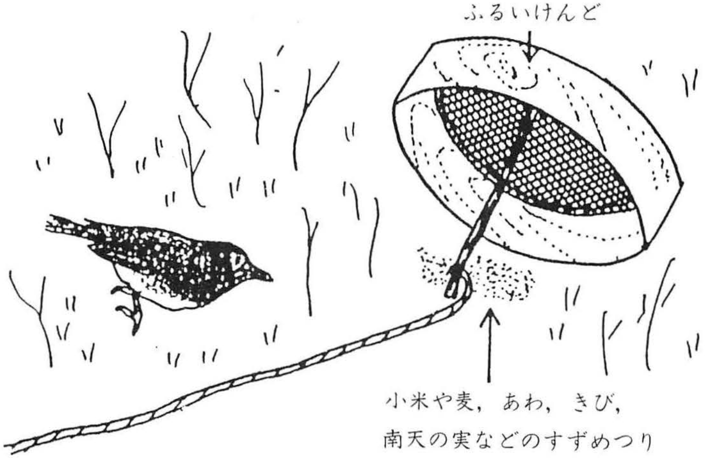
すずめとり

私たちのふるさとの野山や池，川などには，いろいろな野鳥が飛びかっています。

この野鳥を捕らえようと，子供たちは，いろいろ工夫したものです。

小鳥を捕らえるための「わな」もその工夫された道具です。仕かけのかんたんな「すずめつり」や複雑（ふくざつ）な「こぶち」などがあり，子供たちは，これを上手に仕かけ小鳥をとりました。

(1) すずめとり



〈すずめとり〉

子供たちは，雪がちらつき始めると，田んぼや，人気のない広場に，けんどを持って行き，風のあまり当たらない，自分の身がかくせる場所をえらんで，前の図のような「すずめとり」の仕かけをしました。

けんどを仕かけた下だけは，雪がつもらないで地はだが見えています。そこへ，落ち穂（ほ）やもみ，または麦の種をまいておきます。

雪が積もって，えさが見つからなくなると，おなかをすかせた小鳥はえさを求めて集まってきます。

小鳥は用心深くて，なかなかけんどの下に入りませんが，しんぼう強く待っていると，これなら安心と，「すずめ」や「つぐみ」たちはけんどの下のえさをついばみ始めます。

そこをねらって，ひもを引くと，けんどの中に小鳥は閉（と）じ込められます。ときには5・6羽もとれることがありました。つかまえるとき下手をすると全部にがしてしまうこともありますが，にがさないようにつかまえるのも，楽しい冬の遊びでした。

(2) こぶち（くびち）

子供たちは，小鳥のえのなくなった，秋の終わりから冬にかけて，鳥の集まりそうな，人里近くの森や，田畑の近くの木立ち（山の近くの田畑）を探（さが）し，自然の木を利用して，「こぶち」（「くびち」ともいう）をよく仕かけました。

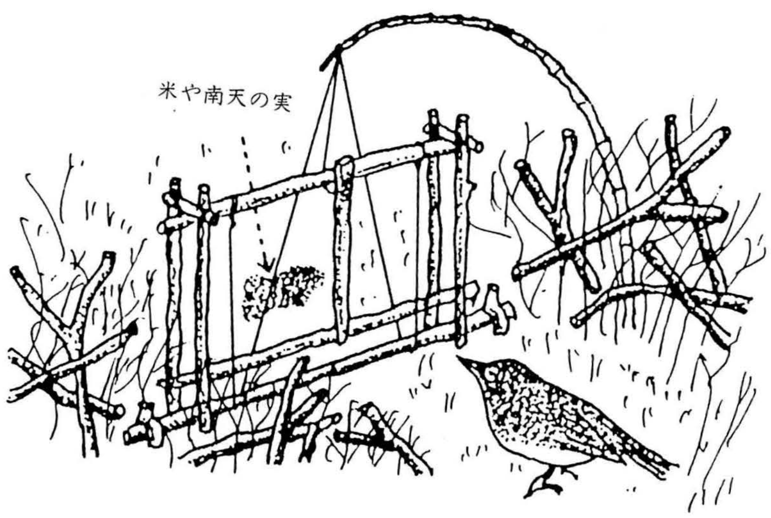
雪のたくさん降った朝など，「すずめ」「つぐみ」「ひよ」などがよくとれました。

時には，父親から

「そんなに，殺生（せっしょう）するな，かわいそうに。」と注意されることもありました。

えは，落穂（おち）ぼを探してきたり，木の実のついた枝を切ってき

たり，南天の赤く色づいた枝などを集めてきて，竹のつつにさし込んでおきます。赤い実のついた南天などは，小鳥の目にとまりやすいので，大変効果があったようです。



こぶち（くびち・こぼつ）

遊びの少なかった，むかしの子供たちは，いろいろと工夫して，小鳥を取っていましたが，小鳥をかわいがることは大切ですし，小鳥によって楽しいくらしもさせてもらっているので，みなさんは，こぶちなどを作って小鳥を取らない方がよいと思います。

今は，わなを使って小鳥をとらえることは禁止されているし，「めじろ」を飼うには，特別の許可が必要です。

竹　　馬

「かぐやひめ」「したきりすずめ」などのお話の中にも，竹がよく出てきますように，昔(むかし)は竹を材料にしていろいろな道具が作られました。竹馬もその竹を材料にして作り，子供たちがたいへん好(この)んだ遊び道具でした。

竹馬には三つの種類があります。

その一つは，葉のついた竹にひもをかけ，「たづな」のようにしてまたがって走って遊ぶものです。（図１）

（図１）

葉が地面をこすり，砂ぼこりがまい上がり，子供たちは本当の馬にのったような気分になりました。

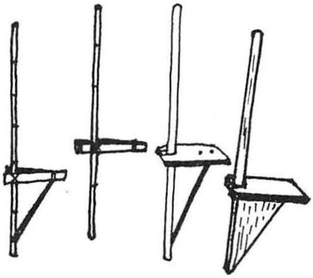
二つめは，竹ざおの先に馬の形をしたかざりをつけ，それにまたがって遊びました。馬の頭の形をしたかざりをつけた竹ざおの反対がわに車をつけ，ゴロゴロと地面を走りやすくしたものもあったそうです。

三つめは，みなさんもよく知っているもので，竹ざを足をおく横木をつけ，竹の上をもって歩いたり，走ったりするものです。（図２）みなさんのおじいさんが子供のころは，近くの竹やぶから竹を切って来て，自分で作りました。そして，寒い日には，みんなが広場に集まり，いろいろなきょうそうをして遊ん

だものです。

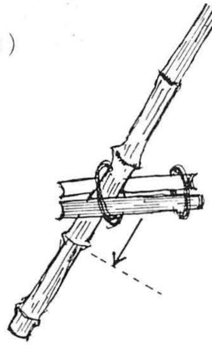
⑴ 竹馬の作り方

（図２）



まず，小学生のみなさんの手首ほどのふとさの竹を２ｍに切ったものを２本と足をおく横木にする。二ふしのこした竹１本，それにじょうぶなひもか，はり金を用意します。

（図３）



準備ができたら，横木の竹を半分にわり，２本合わせてしっかりと竹にくくりつけます。竹のふしの上に横木がくるようにくくりつけると，横木がしっかりと固定されますので乗りやすい竹馬ができます。また，横木をくぎでとめておくといっそうじょうぶな竹馬ができます。（図３）

⑵ 竹馬の遊び方

みなさんのおじいさんたちは，この竹馬で，ふつうに歩くだけでなく，いろいろな遊び方をくふうしました。

① 高さくらべ

足をのせる横木が高いところにある人ほど，ぐらぐらしてたおれやすく，練習が必要ですし，勇気もいります。だから横木のいちばん高い人がチャンピオンになります。

② かけっこ　おにごっこ

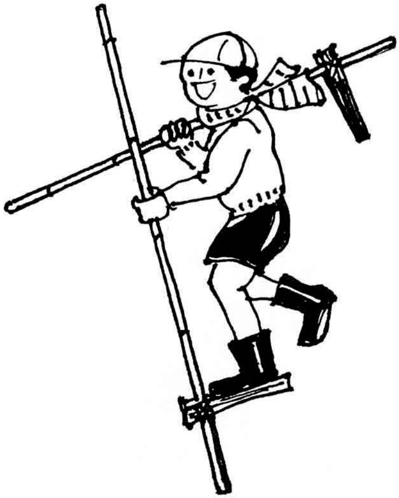
ふつうに走るだけでなく，馬がパカパカと走るように，両足をほとんど同時について走ったり，急に止まって，「回れ右」をしたり，また，おにごっこをして遊びました。

③　かつおぶしけずり

両足で立ったまま竹馬をこすり合わせて，カリカリとかつおぶしをけずるような音を出します。

たおれないように，うまく体のバランスをとりながら音を出すのは，たいへんむずかしいようです。みなさんも，がんばってやってみませんか。（図４）

④　てっぽうかつぎ



右足を上げて，左足でかた足けんけんをします。そして，右足の竹馬をかたにかつぎます。練習をすると急なさか道でも，かた足の竹馬でじょうずに上がり下がりができるようになります。まるで，てっぽうをかついだへいたいさんのようですね。（図５）

⑤　やりかつぎ

けんけんをして，片方の竹馬をやりを持つように持ちます。こうして，友だちと向かい合い，相手のおはらに竹馬をあて，おし合って相手のバランスをくずしてたおした方が勝ちになるのです。けっして竹馬の先で，相手をつくのではありません。（図６）

⑥　ちりとり

竹馬に乗ったままで，地面のちりを拾うという，たいへんむずかしい遊びです。左足を前に右足をうしろにして，左足と右足の間をあけていきます。そして，右足の竹馬をゆっくり地面にたおし，ちりがみなどを拾います。（図７）

⑦　まりけり

竹馬に乗ってするサッカーのようなものです。竹馬を自分の足のように，思うように動かせるようになると，うまくけることができるようになります。みんなが上手になって，サッカーをやってみるのもおもしろいですね（図８）

こままわし

みなさんは，こまを回して遊んだことがありますか。こまは，正月の遊びでしたが，冬の遊びとしても男の子たちに親しまれてきました。

こまは奈良時代ごろ，中国から高麗（こま）という国を経（へ）て日本へ伝えられたそうです。そのため「こま」と名づけられたといわれています。

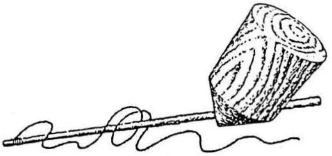
奈良時代の「日本書紀（しょき）」という本の465年のところに，九州の筑紫（つくし）（今の福岡（ふくおか）県）にきていた高麗の兵隊が，独楽（こまのこと）をおもしろがったと書かれています。平安時代の「大鏡」という本には，980年代，一条（じょう）天皇がご幼（よう）少のおり，この「こま」にひじょうに興味（きょうみ）をもたれたことが書かれています。さらに室町（むろまち）時代に書かれた「太平記」という本には，1365年，京都で子供がこままわしをして遊んでいたと書かれています。

日本では，はじめは身分の高い人の遊びであったようですが，しだいに民間の子どもにもひろまっていったことが，これらの本を通してもわかります。

さて，こまも，こまの遊び方も，次のように，いろいろあります。

⑴ ブチゴマ

直径5㎝ぐらいの丸木を長さ10㎝ぐらいに切り，先を円すい状にけずったものです。長さ50㎝ぐらいの棒の先につけたひもをこまに巻きつけ，こまを左手に持って地面に立て，右手の棒を急に右へ引きますと，こまはその場で回ります。そのあとは棒のひもをこまにあてて打つと，こまはビュンビュン回ります。こまの大小によって，それぞれ違った音を立てながら回ります。

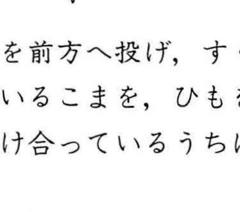


こまの表面に色をつけておくと，美しい輪の色どりを示しながら回ります。棒の先へつけるひもは，真田ひもやぼろ布などを用いましたが，一番よいのは，みつまたか，こうぞの皮でつくったものです。みなさんも作って回してみませんか。

⑵ けんかごま

木の本体のまわりに厚い鉄の輪をしたこまで，心棒も太くて短い鉄の棒で，表面は白く，何の模様もついていません。

鉄胴ごま



〈遊び方〉

こまとこまとをぶつけ合ってけんかをするわけですが，そのけんかのしかは，直径3㎜ぐらいのひもをこまにまきつけ，それを前方へ投げ，すぐ後方へ引いて回します。そのあと，回っているこまを，ひもを使って相手のこまにぶっつけます。ぶっつけ合っているうちに先に止まった方が負けです。

勝つためには，ひもを巻きつけるとき，きつく巻き，よく回るようにしたり，また，鉄の輪を二重，三重にかさねて，厚く

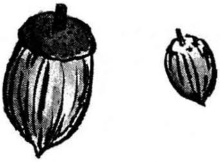
したりもしていました。

⑶　チョンがけ

鉄胴(てつどう)ごまを使っての遊びです。

こまにひもをまきつけ，そのこまを左前方へ投げ，すぐ右後方へ引く瞬間(しゅんかん)に，離(はな)れたひもの端(はし)を左手に取り，飛び返ってくるこまを，左右の手に持ったひもで受けとめます。上手になると，そのあと，ひもを上下に動かし，勢いをつけておいて，空中にほうり上げ，またそれを受けたり，左へ左へと回していったり，またくぐりをさせたり，背中(せなか)まわしをさせたりして曲芸まがいのこともできるようになります。

⑷　どんぐりごま



かし，くぬぎ，とちなどの木の実を拾ってきて，細くけずった竹を実の中心にさし通したものです。これを指先でひねって回して遊びます。これは，みなさんも作って遊んだことがあるでしょう。

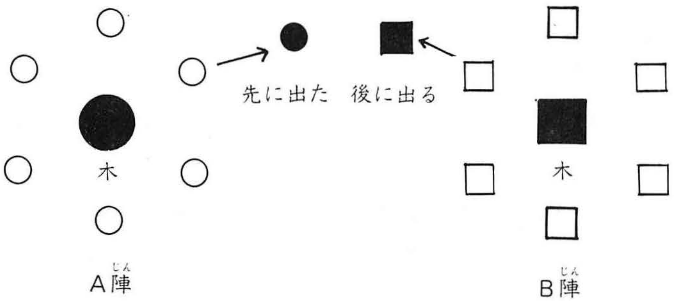
じんとり

寒い冬，戸外での遊びの王者は何といっても「じんとり」でしょう。おにごっこのようにいつもかけ回るので体が暖まるし，おにごっこにはない相手方の「じん」をうばい合うスリルもあるからです。学校の遊び時間には，広い運動場のあちこちで1年生から6年生まで加わって「じんとり」をしたものです。6年生が大将（たいしょう）で，1年生を「とりこ」にされないようかばいながらほほをまっ赤にしてがんばります。どの学年の子も参加できて楽しめる遊びは「じんとり」より他にはありません。

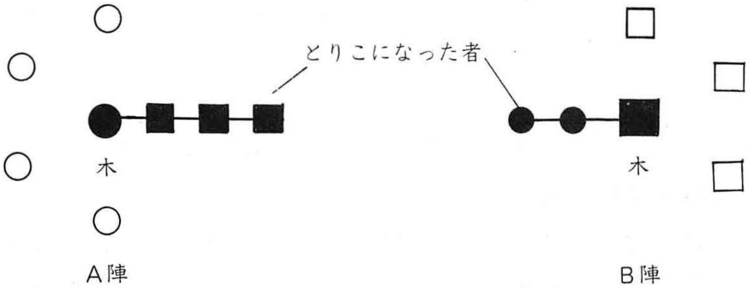
遊び方は次のようにします。さあ，みなさんもお友達をさそってやってみましょう。

○「じん」は運動場や神社・お寺の境内（けいだい）などの広場にある大きな樹（じゅ）木や柱を利用します。

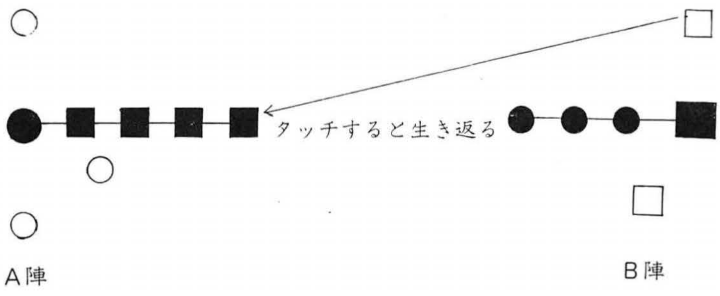
○　組分けをして，ジャンケンで負けた組から「じん」を1人はなれて相手方の「じん」を取りに出ます。それを相手方の1人が後から「じん」をはなれて，つかまえようと追っかけます。これを他の者も次々とくり返していくとゲームが盛（も）り上がってきます。「じん」を先に出た者より，後から出た者の方が強いきまりがあり，後から出た者にタッチされると「とりこ」になり，自分の「じん」には帰れません。味方の者が，うばいに来るまで待っているより仕方がないのです。



○「とりこ」にされた者は，相手の「じん」の前で１列になって味方の助けを待たなければなりません。「とりこ」になった者は「じん」から順に手をつなぎ，できるだけ長くなって味方の方へ近づき助けを待つのです。



○　味方の方に「とりこ」ができたら，相手方のすきを見て，助けに行かなければなりません。自分のじんを出てから，相手方の者につかまらないようにうまく体をかわして，味方の「とりこ」まで行きつき，タッチすれば「とりこ」は解放されます。解放された「とりこ」は味方の「じん」に逃げ帰ってゲームを続けることができます。



○「とりこ」が1人もいないときに，相手方につかまらないようにして，相手方の「じん」にたどり着いて「じん」にタッチした方が勝ちとなります。味方の者が次々と「じん」をはなれて戦うとき，1人は必ず「じん」に残って守ります。その守びの前にやって行って，これをおびやかし，ついうっかり，それを追っかけに出たすきに，不意に後ろから他の者が「じん」をうばう作戦もあります。「じん」を取られたら負けで，また初めからゲームをやり直します。

こいのたきのぼり

ぴゅうぴゅう北風がふく冬がやってくると，子どもたちの遊びも変わってきます。「子どもは風の子」といわれるように，からだ全体を使って遊ぶ，元気な遊びに変わります。それは，からだがあたたまるからでしょう。

その元気な遊びの一つに，「こいのたきのぼり」というのがあります。この遊びの名前も，元気のいい名前ですね。

この遊びを二・三人が始めると，みんなが，

「よーせて。」

と，集まって来るし，

「○○ちゃんもおいで。」　「□□ちゃんもおいで。」

と声をかけ合い，大勢でしたものだそうです。

たくさんの友達といっしょなので，余計(よけい)に楽しくなるのでしょう。

遊び方

(1) 何人かが向かい合って並(なら)び，手をつないで，その上に1人の子をのせます。

(2) 「こーいのこーいのたきのぼり」と，はやしながら，つないだ手を上へはね上げて，上にのせた子を前へ送っていきます。

(3) 送られている子は，はしまでいくと，おりて，次の子と交代します。

(4) みんなが一度はこいになるまで続けます。

○

みんなが一度ずつこいになり終わるころには，手をつないで，たきになった子も，こいになった子も，からだ中があたたまり，あせをかくくらいになります。

寒い日のくらし方として，とてもよく考えてつくり出された遊びですね。

乗りものごっこ

寒い日です。寒がりやさんがたき火をしていると，
「ねえ，みんな，汽車ぽっぽをして遊ぼうよ。たき火より，きっとあったまるから。」
「うん，やろう，やろう。」
と，いう声が聞こえてきます。

用意するもの

なわ１本でいいのです。人数によって長さを決めます。

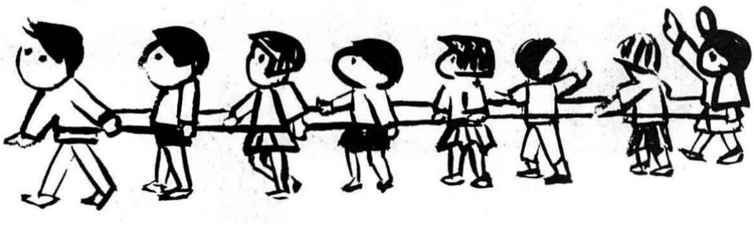
遊び方

なわを輪にしてくくります。

運転手さんになる人を決めます。運転手さんが輪の中の１番前になります。

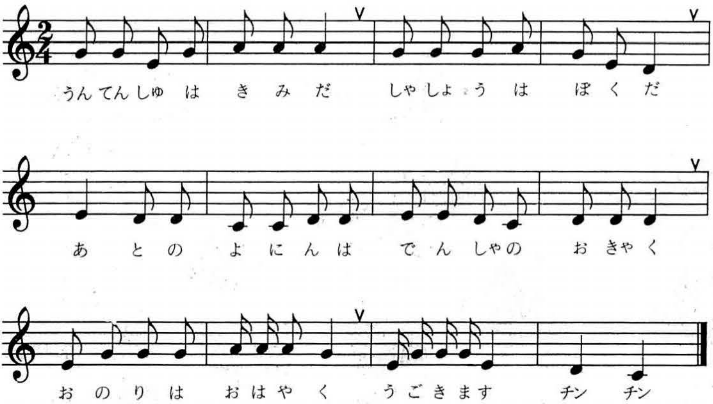
つぎに車しょうさんを決めます。車しょうさんは１番後ろにはいります。

運転手さんと車しょうさんの間に，残りのお友だちみんながはいります。



「ぴいー　はっしゃしまあ〜す。」
と，さけぶ車しょうさんの声。
「はっしゃ，オーライ。」
と，運転手さんの声，みんなの歌声，

電車ごっこ



「しゅっしゅっぽっぽ，しゅっしゅっぽっぽっ。」
と，言いながら，元気な子どもたちは，広場を横切り，お宮を横切り，ぐんぐん，ぐんぐん走っていきます。

体はぽかぽかぬくもってきます。みんな声をそろえて歌をうたいながら，うれしそうにいつまでも走り続けるのです。

たくさんのお友だちと長い長い汽車を作って，遠くまでかけてごらん。寒さなんかに負けないぞ。

どう馬（どん馬）

北からからっ風がふきだすと，子どもたちは体のあたたまる遊びを考えだします。

今のようにサッカーボールなどないころ，男の子たちは，どう馬（どん馬）遊びをしてあたたまりました。

学校では校舎（こうしゃ）の南側の板べいにもたれて，家へ帰ってからはお宮やお寺の白いかべにもたれて遊びました。

遊び方

集まったなかまが二つの組に分かれます。ジャンケンで負けたチームが馬になるのです。ひとりはかべにもたれて足を開け

て立ちます。次の人は，立った人の足の間に頭を入れて馬になります。次の人も馬になった人の間に頭を入れて馬になります。次々とチームの人数だけ馬になってしまうのです。

勝ったチームは，その馬の上にどんどん乗っていきます。全員乗れなかったら交たいをします。乗れないようにするために馬になるチームは背の高い人が後ろの馬になるさくせんを考えたりします。

それでも全員乗れると，乗った1番前の人が何本かの指を出して，

「しかしかなんぼ」

とさけびます。下で馬になっている人が，

「何本」

と指の数をあてます。当たると交たいするのです。当たらないと，あたるまで何度も指の数をかぞえていくのです。

どう馬になっている子も，走って来て跳(と)び乗る子も体に力がはいるため，たいへんあたたかくなります。

すっかりあたたかくなると，

「おもしろかった。ぼくの体はほかほかだ。」

「ぼくも，ほかほかだ。」

と，子どもたちは，どの子もみんな元気です。

からっ風がいつの間にかふきやんでしまう楽しい，楽しい遊びです。

みなさんも，冬の寒い日に，外へ出てたくさんのお友達とやってみませんか。

肝(きも)だめし

冬の楽しい遊びに，試胆会(したんかい)といって肝(きも)だめしがありました。
さびしい夜道を，一人で目的地へ行き，そこで決められた品物を持って帰る遊びです。
むかしの子も，今の子も，暗いさみしい夜道のこわさは変わりません。そのこわさを，自分でおい払い，肝っ玉の太い人間になろうという行事です。

昭和20年ころまで，どの地域にも少年団（今の子供会）があり，そのリーダーは小学校の高等科（今の中学１～２年）の人がなっておりました。
きょうは肝だめしというと，心配そうな顔をした子，何も

こわくないといって，平気な顔をした子などいろいろ見られました。

(1) 肝(きも)だめしのじゅんび

上級生は，夕方になると，会堂に集まり打ち合わせをします。

① だれが，どこで，何をするかの分担(たん)

② 用意するものは何か，コースをどうするかの決定

③ 安全についてどんなことに気をつけるかの注意

小さい子が泣きだした時，上級生が手を引いて，目的地まで行き，その子に成功した気持ちをもたせることなど，やさしさ，思いやりがありました。

(2) 肝だめし

① 少年団の団長は，はじめに，小さい子がこわがるような話をしておきます。このとき，顔の表情がさっと変わる子，がまんしてこわさを忘れようとする子，みんな不安そうです。このようにさせることが，この遊びをいっそう面白くします。

② 出発順を決めます。持って帰る品物をいいます。

③ 4年生以下は二人で行きますが，上級生は一人です。

④ 行きしに，上級生がかくれていて，白い布を出したり，みのかさを着て出たり，雨傘(かさ)をさして出たりして，やって来る子に恐(おそ)ろしい感じを与えます。

⑤ そこを通りぬけ，言われた品物を取ると，全速力で走って帰ります。

このようにして，子供たちで，心を鍛(きた)えました。昭和20年ごろからなくなっていましたが，最近は行われだしました。

わらべ唄

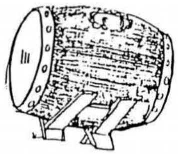
わらべうた——向かいの山から——

わらべうたは，歌詞(かし)が次から次へとお話のようにつづき，おもしろいですね。ふしも，ほとんど言葉のアクセントの通りで，歌詞を読んでいるような感じがします。

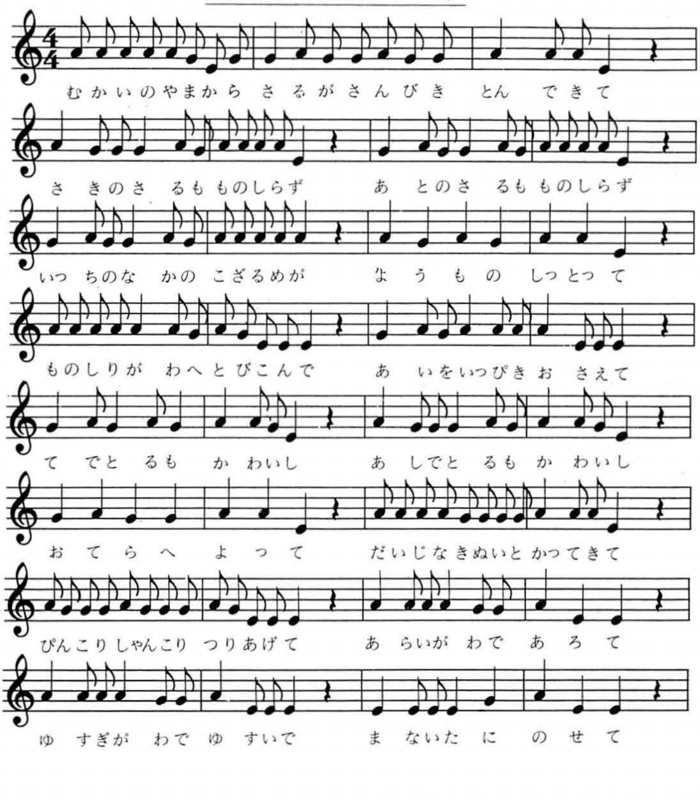
うたいやすさや歌詞のおもしろさで，人から人へと広まっていったものですから人によってうたい方がちがいます。また，その当時の生活や遊び，子どもの心や気持ちが素朴(そぼく)によくでています。

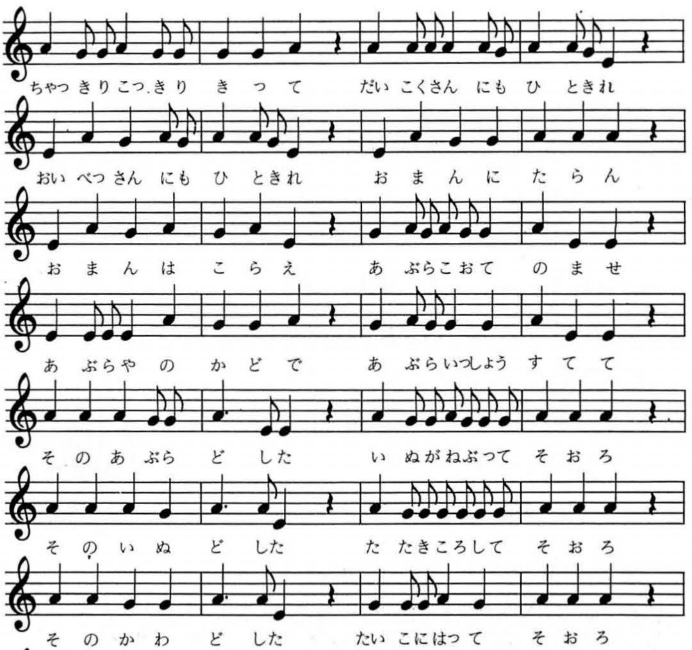
向かいの山から猿(さる)が三匹(びき)とんで来て
先の猿もものを知らず後の猿ももの知らず
いっちの中の小猿めがようもの知っとって
もの知り川へとびこんであいを一匹おさえて
手でとるもかわいいし，足でとるもかわいいし
お寺へよって大事な絹糸(きぬいと)かって来て
ぴんこりしゃんこりつりあげて洗い川で洗うて
ゆすぎ川でゆすいでまな板にのせて
ちゃきりこっきり切って大黒さんにも一切れ
お夷(えびす)さんに一切れおまんに足らん

おまんはこらえ油買うてのまそ
油屋のかどで油一升(しょう)すてて
その油どうした　犬がねぶって候(そうろう)
その犬どうした　たたき殺して候
その皮どうした　太鼓(たいこ)に張(は)って候
その太鼓どうした　灰(はい)に焼いて候
その灰どうした　うりに置いて候
そのうりどうした　からすがつついて候
そのからすどうした　打ち殺して候
〃大黒さんにも一切れ〃
〃お夷(えびす)さんにも一切れ〃



向かいの山から





〔注〕〃お寺によって〃〃お夷(えびす)さんに一切れ〃などは当時，お寺が生活の中心であり，食べ物などは，まず神様にそなえ神をまつる日常の生活が子どもの歌にもあらわれている〃その灰(はい)どうした　うりに置いて候〃という「うり」にはうり虫がつくので，当時は灰を虫の駆除(くじょ)に用いていたらしい。

子 も り 歌

子もり歌は，赤ちゃんをおぶっておもりをしたり，寝かしつけたりする時に歌いました。子もり歌は，美しくてやさしい，そして，なつかしいひびきを持っています。

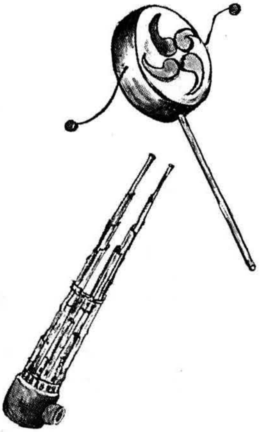
子もりは，子どもの仕事でした。野良(のら)仕事から帰ってくる両親を待ちながら，ひもじさに泣く弟や妹をあやす気持ちは，自分も泣きたいような心細さ，やりきれなさがありました。

時には，背中をおしっこでぬらされたりもしました。

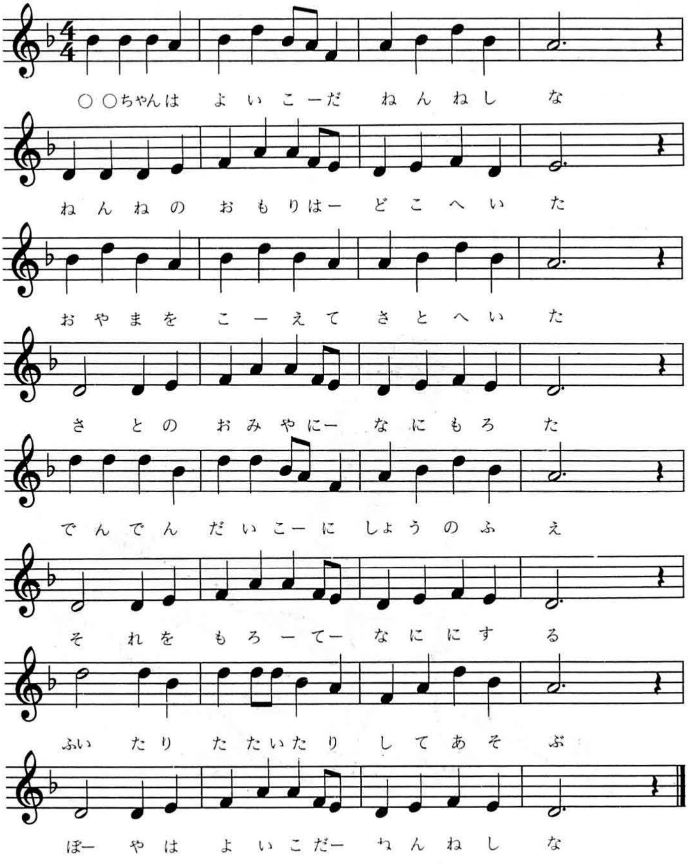
また，子もり歌はやさしいお母さんを思い出させてくれます。そい寝をしながら歌ってくれた子もり歌が思い出されてくるでしょう。お母さんの肌のぬくもりや，やさしい笑顔はいつまでも心に残るものですね。

子もり歌 (1)

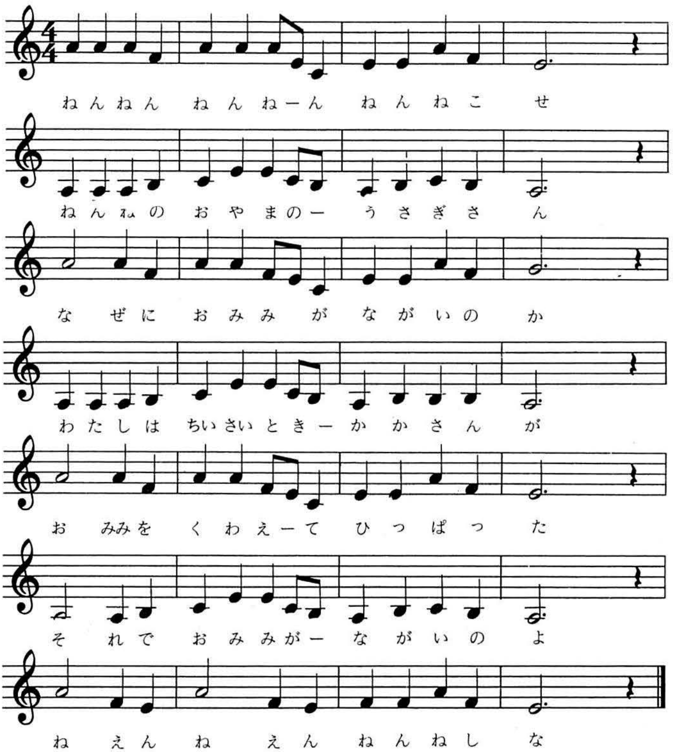
○○ちゃんはよい子だねんねしな
ねんねのおもりは　どこへいた
お山をこえて　里へいた
里のおみやに　なにもろた
でんでんだいこに　しょうの笛
それをもろて　なににする
ふいたりたたいたりしてあそぶ
ぼうやはよい子だ　ねんねしな



子もり歌 (1)



子もり歌 (2)



子もり歌 (2)

ねんねん　ねんねん　ねんねこせ
ねんねの　お山の　うさぎさん
なぜにお耳が　長いのか
わたしは　小さいとき　かかさんが
お耳をくわえて　ひっぱった
それで　お耳が長いのよ
ねえん　ねえん　ねんねしな

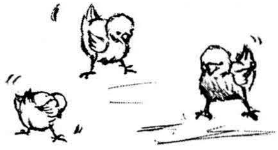
数　え　う　た

日本民謡（みんよう）の一つの形式で「一つ，二つ，三つ」と数をおって歌詞（かし）がつくられています。

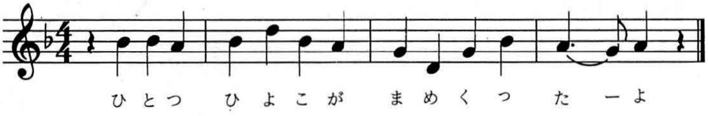
江戸時代に，手まりを売る人や，あめを売る人などの物売りが，数えうた形式の童謡をうたって歩いたのが，のちに民謡やわらべうたにもひろまり，今のような数えうたになったといわれています。そして，この数えうたは，「羽根つきうた」「手まりうた」，「お手玉うた」などにも取り入れられています。

重信町でうたわれた数えうたには次のようなものがあります。

一つ　ひよこが豆くったあよ
二つ　舟（ふな）には舟頭（せんどう）さんがたあよ
三つ　店には店がたあよ
四つ　よそいきゃおぜにがたあよ
五つ　遊者にはお車だあよ
六つ　昔はよろず暑こたあよ
七つ　泣くにはるす先がたあよ
八つ　山行きゃ大おくがたあよ
九つ　米つきやぐらがたあよ
十で　殿様葵（とのさまあおい）のごもん



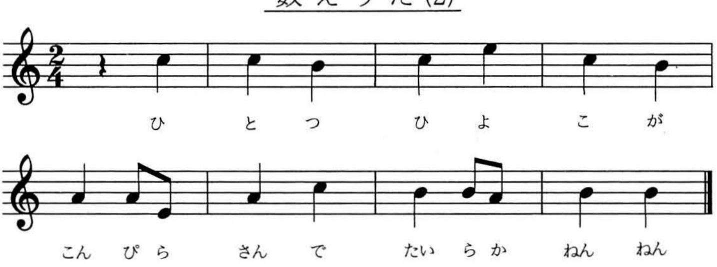
数えうた(1)



一つ　ひよこがこんぴらさんでたいらかねんねん
二つ　舟(ふね)には舟頭(せんどう)さんがたいらかねんねん
三つ　皆(みな)さんおめでとうでたいらかねんねん
四つ　横浜(はま)ステーションでたいらかねんねん
五つ　医者さんはかばん持ってたいらかねんねん
六つ　昔(むかし)はよろいかぶとでいたらかねんねん
七つ　泣く子にゃしゃぶりこでたいらかねんねん
八つ　山にはうさぎさんがたいらかねんねん
九つ　こじきはおわんもってたいらかねんねん
十で　殿(との)様お馬に乗ってたいらかねんねん

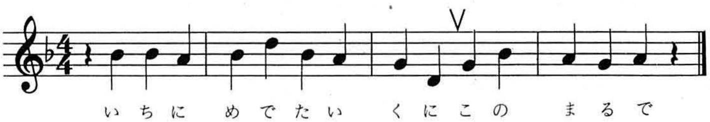
「たいらかねんねん」とうたう人と，「たいじゃくね」と歌う人がいるようです。

数えうた(2)



一にめでたいくにこの丸で
二にはにおいのやくしの丸じゃ
三にはさかずきちょうしの丸じゃ
四には信濃(しなの)のなぎなた丸じゃ
五にはごばんのごいしの丸じゃ
六にはろうそくちょうちんの丸じゃ
七にはひちやのとだなの丸じゃ
八には浜辺(はまべ)のしんでんの丸じゃ
九には国々さしぐしの丸じゃ
十には重箱まきえの丸じゃ

数えうた(3)



やよい三月しほぎのせくに
いそに花さくよい娘(むすめ)子が
ありまざいくのめかごをさげて
岡(おか)と海とのあいだのいそで
ひとつひろたがこれなにがいよ
一にいたがい
二でにしのかい
三でさざえがい
四でしじみがい
五にはごながい
六までのかい
七にひめがい
八にはまぐり
九にくわずがい
十でとらさめ弘法大師(こうぼうだいし)のおしめしのかい

おわりに

◇　昭和59年・60年度は，郷土教育資料として，「重信の子供の遊び」を集録し発刊することになりました。

◇　集録された遊びの内容は，今の私たちから考えれば想像もできないものかも知れません。遊び道具も，身のまわりの草木であったり，手づくり用具であったりしたのです。テレビもなければ，ラジオもない，むかしのおじいさん，おばあさんは，笹(ささ)舟を川に浮かべたり，かぶとむしやせみをとったりし，また，竹馬，まりつき遊びをして子供時代を精一ぱい遊んで成長してきたものです。

◇　現在では遊びの内容もまったくかわっています。しかし素朴なむかしの遊び方と，それにまつわるうたは，現代の私たちに大切なことを教えてくれるのではないでしょうか。それは，むかしの重信の子供たちが，自然とのかかわりの遊びの中で，豊かな心情や豊かな創造性の大切さを，私たちに語りかけてくれているのです。

◇　この「重信の子供の遊び」には，集録もれのものもあり，内容・体裁に不手際も多いと思いますが，読まれた大人の方々は話し合いの中で補完していただければありがたいと存じます。

◇　最後に集録・編集に御協力下さった地域の方々，うたを歌って下さった老人会の皆さんに心より感謝申し上げます。

編集協力者一覧

○編集委員

南吉井小学校

池川敏朗　中矢俊江　高須賀一恵　深井　泰

日野康敏　明星方夫

北吉井小学校

近藤良倍　宇都宮雅雄　藤井紀子　和田真知子

桑名千代子

拝志小学校

椿原和典　高橋謙一　青野隆夫

上林小学校

田中　和　吉田　修

重信中学校

大森利敬　橋本矩之　玉井幹夫　橋本勝司

高須賀康夫　坂田育治

○絵をかいた人

上林小学校　田中　和

重信中学校　富田泰代

○題字をかいた人

南吉井小学校　菅野茂美

○わらべうたに譜をつけた人

南吉井小学校　高須賀一恵

元北吉井小学校　野首和子

○協力した人

重信町教育委員会

和田久弘　野中　忍

重信町老人クラブの皆さん

重信の子供の遊び

昭和六十年十一月三日　印刷発行

編集者　重信町教育委員会

発行者　重信の子供の遊び編集委員会
温泉郡重信町大字志津川九七二
電話〇八九九—六四—一五〇〇

印刷所　有限会社　青葉図書
松山市小栗六丁目三—一二三
電話〇八九九—四三—一六五